
災厄の姫君

日向あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

災厄の姫君

【Nコード】

N3787J

【作者名】

日向あおい

【あらすじ】

【一部性R15】

平安のドS男とウブなお転婆姫によるラブ・ファンタスティック将門記2（新婚編）

——時は平安。幸せな新婚生活。自分たちの望む国を築き上げようと希望に満ちた日々——彼の望むものはひとつ残らず手に入られるはずだった。

その日、彼女はすべての災厄を従えて彼らの前に現れた——。

※平安初期に起きた将門の乱を、妖・陰陽師などの要素を加え、ラ
ブファンタジー仕立てにしたパロディー将門記です。

前作「赤い月が見ている」をお読みでない方も本作から十分お楽し
みいただけます。

プロローグ（前書き）

こちらの作品はファンタジック将門記シリーズ序章『赤い月が見ている』の続編となっています。

ですが前作をご覧になってない方でも、本作から楽しみいただけよう執筆しています。もし、本作がお気に召しましたら、小次郎と尚子の出会いの話『赤い月が見ている』もご覧いただけます幸いです。

プロローグ

がさがさという葉の擦れるような音で彼女は目を覚ました。

あたりは真っ暗だ。いくら今日が満月だからといっても、彼女の今いる洞穴の奥まで照らすことはできないでいる。

彼女は眠そうに目をこすりながら上半身を起こし、あたりを見回した。すると、そばにあるはずの母の姿が見当たらない。

「朧^{おぼろ}?」

周りで寝息をたてている兄弟たちを起こさないように注意しながら立ち上がり、彼女は洞穴の入口へ向かった。母親はすぐに見つけることができた。

「朧?」

彼女が母の背に声をかける。母はまるで娘が起きて来ることを知っていたかのように、驚く様子もない。ただ空高くに上りきった満月を、静かに見上げているだけだった。

「どうしたの?」

彼女は声をかけると、労るように、その小さな手を母の体に添えた。

母が、それに答えるように、幼いわが子に視線を送る。黒曜石のような母の瞳に、柔らかな色が灯った。

「……………泡雪^{あわゆき}の気配が消えた」

「泡雪? また気配を消しているのではないの?」

「奴がどんなにうまく気配を消したとて、我には分かる。奴とは久しく会っておらぬが、いつもあの巨大な妖気を直ぐそばに感じておった。じゃが、今しがた、それがぷつりと消えた」

「死んだの？」

「わからぬ。だが、そうだとすると、ちと困るのう」

そう言うってから、まるで自分を嘲笑うように、ふん、と鼻を鳴らすと、母は秋風の香りを嗅ぐように、夜空を見上げた。

娘は、そんな母の横顔を伺いながら、不思議に思った。

なぜ、臆はそんなに泡雪を心配するのだろう。

普段の母からは、泡雪のことを好意的に思っている様子はいかげえない。むしろその逆だ。母がいつも自分に語ったのは、泡雪との死闘の数々だった。たしかに、母の頬には今も消えない切り傷がある。それを刻み込んだモノこそが泡雪であった、と。

『いつか、息の根を止めてやる。今度会ったら、あの首を噛み切つて、奴の自慢の尾を引きちぎってやる。いいか、もしもお前が奴に鉢合わせするようなことがあったなら、噛み跡の一つも付けてやるのだぞ』

娘は物心ついたころから、そう言い聞かされたものだった。

だから、娘にはなぜ母がそんな泡雪の身を案じているのか理解できなかったのだ。

「今宵は冷える。中に戻れ」

母が不意にそう言った。彼女は返事をする代わりに母の目をじっと見つめた。

次の瞬間、目にも止まらぬ速さで、母が崖下へと身を投じた。そして、軽やかに、まるでつむじ風そのものとなったかのように、音も無く絶壁を駆け下りると、あっという間に森深き山中にその姿を

消してしまった。その間、彼女が瞬きを数回する程度の時間しか要していないのだが、そんな母親の姿を見慣れているのか、娘はさして驚く様子もなく、再び洞穴へ寝に戻っていった。それどころか彼女は、暗闇だというのに全てがはっきりと見えているかのような迷いのない足取りで、難なく先ほどまで眠っていた場所に腰を下ろした。そして、同じようにそこで眠る兄弟たちにぴたりと寄り添うようにして横になった。

「朧は？」

すぐ隣の兄が身動きせず、声だけを投げかけてきた。
起きていたのか。背中から伝わる兄の鼓動に、眠気を誘われながら、娘は面倒くさそうに言った。

「泡雪が消えたって」

「……泡雪が？」

兄の声に、微かな驚きが加わる。

「消えた？ 死んだのか？」

娘は小さくアクビをし、瞼を閉じた。

「それを確かめに行ったのだろう……朧は……」

娘はそれだけ言う規則正しく寝息をたて始めた。

「……まさか、あれほどの山猫が……？」

兄の独り言が、静かに洞穴に響いた。

・1・名誉の負傷

1 名誉の負傷

尚子^{たかこ}は、背中にひやりと冷たさを感じた。太い柱だ。尻餅をついた姿勢のまま、必死に後ずさりしていたが、それももう出来ないと思う。これはまずい。

「ま、まって、小次郎落ち着いて……」

四つんばいになり、じりじりと距離を詰める男の目は真剣そのもの。まるで飢えた獣のように、ゆっくり、確実に、近づいてくる。その間合いの詰め方が、尚子に逃げ道のないことを思い知らせた。

「将門^{まさかど}だ。将門と呼べといったろう」

また少し、男の顔が近づく。

尚子の喉がごとりと音を立てた。

「もういい加減、観念しろ。そう簡単に俺から逃げられると思うなよ」

男はぞくりとなるほど、低い、心地よい声で言った。

「こ、こんなことしている場合じゃないだろう？」

「こんなこと？ まだなにもしてないが、例えばこんなことか？」

男はニヤニヤとしながら、片手を尚子の胸元へ伸ばそうとする。

「い、いやっ！」

慌てて胸元を両手で隠す尚子。鼓動は勝手に早くなる。

「ほう……」

しばらく宙でぴたりと止まったままの男の手が、ふたたび尚子の頬へと伸びていく。

尚子はこの時、男の顔から笑が消えたことに気がつかなかった。

「なかなか上手く煽ってくれるじゃないか」

男がまた少し前進して、今にもお互いの鼻が触れそうな距離になる。男の熱い息が唇にかかる。

ち、近い！

このままじゃ……。

身の危険を感じた尚子は両手で力いっぱい男の胸を押して、突き飛ばそうとした。

「煽ってなんかなっ——」

が、既に遅い。乱暴に男が、尚子の唇を奪った。

「んんーっ！！」

もがいても、両肩を男にがちり押さえられ、びくともしない。そればかりか、唇から流れ込む男の情熱に、体がしびれて動けない。あつという間に、全身から力が抜けていき、頭が真っ白になっていく。

だめ。

このままじゃ、何も考えられなくなる。こんなことしている場合じゃないのに……。

手放しそうになった正気を、必死に呼び戻し尚子は顔を背けた。自由になった口から悲鳴が上がる。

「いやっ、こ、小次郎っ!!」

「将門。わからんやつだなあ」

再び自分の口を塞ごうとする男の唇を、いやいやをしながら避ける。

だが、往生際が悪いな、と言いながら男は尚子の両手首を掴み、背後の柱へ押しつける。

「わかった、わかったからっ!! 待って話を聞い——んんっ……」

文字通り尚子は口をふさがれた。長い口づけに、尚子の腕から力が抜ける。それに気づき、顔を上げた男は、頬を真っ赤に染めた尚子を満足に見下ろした。本当に嬉しそうに。

「お前は俺のものだ」

男が耳もとで囁いた。どんな女性が聞いても、一瞬で陥落するよ

うな声で。

百戦錬磨のこの男は、自分の声がこの手のことでは大いに戦力になることを知り尽くしていた。だから、得意げになって男が、尚子の顔を再び見下ろすのは当然といえば当然だったかもしれない。

が、男は相手が尚子であることを再認識すべきであった。

ぶちん。

「…………え？」

尚子は完全にぶち切れていた。その音が部屋に響きわたってもおかしくないくらい盛大に。

「私がいつお前のものになったーーーーっ!!??」

尚子の叫び声と共に、強烈な蹴りが男の股間に炸裂する。声も出せずに悶絶する男の手を振り払って、尚子は立ち上がった。

「真昼間から何考えてんだ、大馬鹿野郎ーーーーっ!!」

尚子は怒りのまま吐き捨てると、大股で部屋の入り口まで行き、力の限り木戸を押し開ける。

派手な音と共に開かれた扉————その扉の向こうに、背の高い男の姿が現れ、尚子は思わず息を飲む。

「……………」

冷ややかにその男は、尚子を見下ろす。その視線の意味を尚子はまだ感じ取ることとはできない。だが、その男の瞳に、好意とは真逆

の感情が含まれていることは分かる。

「よろしいですか。殿にお話があるのです」

目の前の男は抑揚のない声で言った。

自分はこの男に嫌われている。でもなぜか分からない。

初めてあった時から、なぜか彼は自分に対して激しい敵意を見せた。尚子にしか分からないように。それとなく。

なぜ、こんなに嫌われているのだろう。まったく検討がつかない。だって、まだ、出会って間もないのだから。

「……………待たせたのなら、すまない」

尚子は搾り出すように言うと、道をあけた。男はちらりと尚子に視線を送るだけで、部屋の中に入っていった。

「殿、失礼いたします」

男は尚子を振り返り、尚子に部屋の外へ出ることを無言で促す。

「……何をされてもかまいませんが、殿の手を煩わすことはお控え願います。では」

言い返す間も与えられぬまま、部屋の木戸が閉められた。苦々しい後味の悪さだけが尚子の口の中に広がっていく。

何もできない。

今の自分は、ただ飯ぐらいの厄介者。

何の力にもなれない。

自分だけ。

「……………」

尚子はくると木戸に背を向けた。

いいんだ。

たしかに自分にはできることは少ない。でも、その出来ることをするだけだ。誰に何を言われたとしても。

それが今の自分なのだから。

それが愛する男に、今自分ができることなのだから。

男は木戸を閉め、小さく、本当に小さく息を吐いた。だが、彼の主はすぐにそれに反応する。

「どうした、よしたつ好立」

「いえ、さしたることではありませ——」

男——ふんやのよしたつ文室好立は部屋の中央で『くの字』になって小刻みに震えている主を見て、ぽかんとなった。

「何してるんですか？」

「め、名誉の負傷……」

好立は、今度はわざとらしくため息をついてみせた。またこの男は、あの娘をからかっていたのだな、と思ったからだ。

あの娘は、なにかと政治に興味をもち、女官や家臣たちに国勢を聞いて回っていると聞いている。

今回はどんなことを、問い詰められたのかは知らないが、この男は話題を変える口実として、あの娘を口説いてからかっているのだろう。いかにも、主のやりそうなことだ。

実際はどちらが口実かわかったものではない。誤魔化すのが口実で、ただ何も知らない生娘を面白がってからかっているだけではなからうか。

まったく、こんなことがいつまで続くのか。頭が痛い。

「……出直しますか？」

「いや、いい……」

「そうですか。それにしても、なんとかありませんか」

「じゃじゃ馬のことか？」

あえて肯定せず、好立は続ける。

「美姫ならこの田舎にだって、いくらかきましょう。なんだって、胸だか腹だかわからないような子供を相手にされてるのですか？」

まったく……愛玩動物だとしても最悪だと思うのですがね。もう少し馴てもらいませんか、女房（※女官のこと）たちもお手上げ状態ですよ」

「そうか、それは困ったな」

将門はからからと笑った。ちっとも困っているように聞こえない。むしろ、実に楽しそうだ。

これは、何を言っても無駄だな、と好立は悟った。それで、またまた、深い深いため息をつくことになる。

そういえば、このところの自分は、ため息をついてばかりだ。

あの娘が、この滅びかけた国、下総しもふちに来た、あの日から――。

・2・真実の王（1）

2 真実の王

それはちょうど十日前。好立は再認識することになった。

「よう、好立。待たせたな」

「ご無事で何よりです。さあ、母上様も首を長くしてお待ちですよ」
誇らしい気持ちすら溢れ、好立はひそかに胸が高鳴っていくのを
感じた。ほら無事に主は帰ってきた。

帰ってくると信じていたが、でも不運な事故や災害、疫病は避けられない。人知を超えた出来事に巻き込まれれば、さすがの彼でも
どうにもならない。

実際、魑魅魍魎が蔓延る京の都では、呪いだの祟りだのアヤカシ
だの怨霊だの、とりあえず得体の知れないものが幅をきかせていた
から、馬鹿にできない。人は呪いや悪霊の力で簡単に死ぬし、アヤ
カシに食われれば骨ものこらない。

とは言っても、それらを簡単に凌駕するものこそ人の欲望だと彼
は考える。人の最大にして最強の天敵は人だ、と。

だが、彼の王は帰ってきた。確かに無傷で帰ってきたのだ。

やはり、自分の目に狂いはなかった。この男こそ、ただ一人の王
だ。

それにしても――。

好立は、眩しそうに目を細めるようにして、馬上の男を見上げた。
何かが変わった。この男の心に、長年覆っていた黒く分厚い雲が
吹き飛んだような、そんな印象を受けた。

いったい、何があったのだろう。この僅かな間に。

「好立。報告は後だ。まずは、女官と薬師を呼べ」

主は言った。

なぜ、薬師を？ と好立はかすかに眉を動かす。が、すぐさま、その理由を察知した。

彼の主は、自分の懷に巻きつけてある帯をするりとほどくと、背後でぐったりとなつている人物を好立に手渡した。自力で主に捕まる力がなかったので、帯で己の体に縛り付けるようにして、運んできたようだ。

好立は慌てて少女を受け取り、しばし、自分の腕の中にいる少女と、主の顔に交互に視線を送った。初めてみる顔だ。数いる主の恋人の一人かと思つたが、違うらしい。

「この娘は……？」

「嫁だ」

「……はっ!？」

主は飄々としたものだ。さすがの好立も、わが耳を疑った。

嫁？

今、嫁と聞こえたが。

「道中で、熱を出してしまったようだ。急ぎ、薬師を」

腕の中の娘が、熱を出していると言われ好立はぎよつとする。

いったい、どこの娘をかつさつてきたのかは分からない。そもそも、この数日、何をしていたのやら。聞くのが怖い。聞きたくないが、聞いておかねばならない氣もする。この男の右腕と自負する者として。

好立は頭を切り替えた。今は、この娘の回復を優先すべきだ。高熱でうなされる娘を、追い返すわけにもいくまい。

「薬師を呼べ。この方を西の部屋にお運びせよ。部屋は温めるのだ。それから冷たい水に、濡れ布巾、着替えも用意せよ」

背後に控えていた者に少女を手渡し、てきぱきと指示を飛ばし始めた。その横を主が、大腿ですり抜け、屋敷の中へと歩き出す。

「母上に挨拶に参る。好立、かい摘んで報告せよ」

慌てて主の背中を追いかけながら好立は短く報告をはじめた。

「ひどいものです。残された田畑は使い物にならないような低地ばかり。首謀者は源護と……」

好立が口を濁す。だが、百も承知と言わんばかりに、にやりと主は笑ってみせた。

「伯父上であろう？」

「残念ながら……。常陸ひたちの源護殿と、上総かずさの良兼様よしかねであると調べがついています」

「そうか」

彼の主、平小次郎将門たいらのこじろうまさかたは短く答えた。その背中からは、どんな感情もうかがい知ることはできなかった。

常陸とは現在の茨城県であり、当時、その土地一帯を治めていたのが桓武平氏の長、平国香たいらのくにかであった。その国香の威を借りる狐として大きな顔をしているのが、源護一族だ。

この源護の娘が、長男の国香と国香の息子、さらには国香のすぐ下の弟、二男の良兼に嫁いでいる。つまり、国香や良兼の義父こそが、源護である。

この下総の国を治めていた桓武平氏の三男である良将よしまさと二男の良兼の不仲は衆知のこと。そんな中、良将の訃報は嵐のごとく関東を駆け巡った。

———死んだ。

あの、目障りな良将が死んだ———

すぐさま動いたのが次男良兼と、人の良い長男国香を裏であやつる源護であった。

二人は、下総の土地をあっという間に奪い取った。残されたのは、少しの雨で氾濫する川に挟まれた、使い物にならない低地。そして、未開拓の地だ。さらに、働き手である奴隷や農民も多く奪われた。

悲鳴を上げたのは、良将の妻。まだ幼い子供を抱え、夫がこの世から去った悲しみに浸る間もなく、自国が崩落していく様を目の当たりにすることとなった。

このままでは、愛する夫が愛した国が、滅んでしまう。夫が大好きだった川も、山も、大切に育てた馬たちが走り回る牧も、皆、義兄の手に渡ってしまふ。それだけはさせまい。夫の愛したこの国を、奪われてたまるか。

彼女はすぐさま、京都にいた嫡男の将門を自国へ呼び戻すために文を書いた。

その時、文室好立も将門と共に、京都にいた。京都で出世の道を開くべく、奔走すること早十二年。飛び込んできた将門の父の訃報に、好立も動揺が隠せなかった。

好立は、良将が好きだった。あれほど豪侠、豪胆という言葉が当てはまる男を、好立は知らない。彼の主、将門も確かに父の血を継いでいるのは誰の目にも明らかであったが、それに無謀と傲慢が少々加わっている。危なっかしくて見てられない。

だが、親子に共通するのは、強さだ。肉体もだが、腕も立つ。さすが、北方の最強豪傑民族、蝦夷えみしの残党を押さえ込んできた鎮守府將軍ようぐんとその息子だけある、いつも好立を唸らせた。

蝦夷とは一人で常人百人分の戦力に匹敵するほどの、戦うために生まれた戦闘民族である。女子供も例外なく帯剣し、馬を自分の体の一部のように乗りこなす。

彼らと戦ううちに、良将の剣さばきも、馬術も洗練されていたと考えられる。その父の技術を、小さな頃から肌で感じ、見事に全てを吸収してきた将門は、いつしか父を抜いていた。好立の知る限り、将門の右に出る豪傑はいない。

そんな良将の死は、それだけで頭を鈍器で強打するような衝撃だったが、同時にもたらされた知らせは、将門と好立を奈落の底へと

突き落とすものだった。

将門の敬愛する伯父たちが下総の国の土地を次々に占拠している。このままでは、下総が立ち行かなくなる。一刻も早く戻ってきて、父の跡目を継いでくれ。将門の母の切実な訴えだというのに、二人はそれをすぐ信じる事ができなかった。

特に、将門の記憶にのこる良兼は、そのようなことをする人物ではなかったようで、最後の最後まで信じようとはしなかった。幼き頃に、まるで自分の息子のように目をかけてくれたあの良兼伯父上が、自分とその国を追い込むようなことをするとは考えられない。そんな将門の心は、好立にも痛いほど伝わってきた。

信じたくない、だが、母の虚偽とは思えないし、その理由も考えられない。

一晚将門は、一言もしゃべらずに部屋に引きこもってしまう。しかし翌朝になると、一転して将門は京都を後にすることを好立に告げた。

このまま京都にいても、出世は見込めそうに無い。中央にいてもうだつが上がらないのなら、自国に帰って己の思うような国を作る。それも、一つの道だ。何しろ京都が嫌いだ。思っていることを半分も口にしないような、そんな腹の探り合いなど、性に合わない。そんなようなことを、一気にまくしたてると好立に出立の準備を急ぐようにと命を出した。どうやら、彼の性格上、一度、京都を出ると決意した瞬間に、全てがばかしくなってきたようである。将門はその日のうちに、上司から世話になった関係者、気まぐれな恋を楽しむための恋人にいたるまで、さっさと挨拶を済ませ、後腐れなく自国へ出立する準備にかかった。

もちろん好立も同行する意を伝えた。好立は、京都もわりと嫌いではなかったが、将門のいない京都は好きになれそうに無い。京都でなくても同じだ。将門に残れと命じられても、ついていくつもりであった。将門の居ない生活など、隠居か出家と同じだ。

こうして、二人は小船に乗り込み、いったん上総に上陸し、そこからは陸路で下総へと向かうこととなった。が、上総についたとたん、将門は一人ひらりと馬にまたがり、先に行けと抜かしたのだ。「お前は先に行け。俺が帰ってくるまでに、ざっと掃除しておけ」それだけ言い残すと、将門は颯爽と走り去ってしまった。呆然としながらも、好立は彼の背中を目で追う。

“俺が帰ってくるまでに、ざっと掃除しておけ”。つまり、それは自国の情報を集め、主たる将門を迎える準備をしておけという意味だ。

それは分かるが。これから国の長となるう人が、単身で他国を走り回るといふ無謀な行為にいたるといふのはどうなのだろうか。しかも、自国を侵略しようとしている疑惑のある国で。

たしかに、あの猛獣を捕らえられる者はそうそういないだろう。だが、多勢に無勢ではさすがの猛獣だとて、降伏せざるを得ないのではないか。

好立に迷いが生じる。

後を追うべきか。否か。

数秒の後、好立は心を決める。否だ。自分が後を追ったところで、戦力になるばかりか、足手まといになる。なぜなら、自分は戦闘においてはからっきし役に立たない。あるのはこの知力。

将門は、将門でやるべきことがあるのだろう。ならば、それを成し遂げた主が帰る国を、維持することこそ自分の使命。王が帰った時、国が滅んでいては意味がない。

こうして、好立は彼が認めるただ一人の王の生還を下総で迎えた。全てが予定通りに始まった。全てはこれからなのだ。

彼の王が、すばらしい国を作る。その傍らにいるのは自分。良将が作った豊かな国を越える、さらに至福の国を主が築く。それを補佐するために自分は生まれてきたのだから。

だが、将門は一人ではなかった。傍らに、奇怪なものをつれて帰ってきたのである。

高熱にうなされるこの少女が、いったい何者なのか。それを知るのが怖い。

恵みの女神かそれとも――。

好立は将門の背中を追いかけながら、先ほどの少女の顔を思い浮かべた。

不安ばかりが募る。

全ては杞憂であってほしい。

> i 5 9 1 5 — 3 1 7 <



「失礼しますよ、母上」

将門は御簾を押し上げ、部屋の中央へと進んだ。

「まあっ！！ 小次郎っ！」

扇で顔を覆いながらも、母は全身で喜びを表現した。無理もない。十五で故郷を離れた我が子との十二年ぶりの再会である。

将門としても、胸の中がぐっと暖かくなるのを認めざるを得ない。母の笑顔に出迎えられ、やっと故郷に帰ってきた実感がわいてくるようだった。

だが、同時に切なくもある。こんなに母は小柄であつたろうか。肩も腕も細く、自分が乱暴に掴んだだけで粉々に骨が碎けてしまうのではないかと思うほど頼りない。記憶の中の母よりも、何倍も儚げに見えた。

「たった今、帰りました」

形式通り、母に頭を下げ挨拶をしようとしたところで、将門は母に手を取られた。ゴトリと音を立てて、母の持っていた大きな扇子が床に落ちる。

「もおー小次郎ったら、遅いわっ！ 待ちくたびれてしまったじゃない。よく顔を見せて」

両頬を母の手のひらに挟まれながら、将門は内心、あれ？ と思った。なんだ、意外と飄々としてるじゃないか。最愛の夫を亡くし、さぞ意気消沈して、泣き腫らした目をしていることだろうと思っていたのだが。

いささか拍子抜けしながら、将門は少しだけ老いた母を見つめた。すると母はニツコリと花のように微笑みかけてきた。

変わらない。十二年たっても、この人は少女のように、笑うのだ。しかし、若いのは笑顔だけではない。

「うん、ずいぶんと凛々しい顔になったわね。いい男。惜しいわっ！ 私がもう少し若かったら……」

しれっと、そんなことをぬかす母に将門の首がぐくつと項垂れた。

「……母上……私はあなたの息子です」

「まあ、そうだったわね。残念だわっ！ こんなにいい男が目の前にいるのに……」

（……相変わらずすぎる……）

どうも母を目の前になると調子が狂う。終始、母の、ゆっくり、まったり伸び伸びしたペースで事が進むのだ。その母の話し方に敗因がある気がする。

彼女が性格的におっとりしているからだろうか。彼女のまわりだけ、何故か一面の野花が咲き乱れ、蝶々がひらひらと舞う光景が見える時がある。もちろん錯覚なのだが。こちらまで気が抜けてくるから困り者だ。

だが、それでいて中々の策士なので侮れない。何しろ、あの父、良将の妻を長年勤めあげ、また父も母には頭が上がりなかったというまぎれもない事実がある。

実際、他国の激しい謀略にあいながら何とか国を存続させてこられたのも母の力が大きいだろう。母がいなければ、今頃、将門が帰

る国はどこにもなかったはずだ。

将門は自分の頬に添えられた母の手を、優しく取ると、きりっと顔を引き締める。

「今までよくぞ頑張られましたな、母上」

女の細腕で、飢えた猛獣どもから必死にこの国を守っていたのだ。どれほど不安であったろう。

次々に土地や人手を奪われ、いつ攻めこまれるかと、震えていたに違いないのだ。

「だって、良将様の子同然ですもの、この国は。自分の子供を守るのは親のつとめです」

母は将門の両手を自分のそれで優しく包み込む。揺れた母の袖からふわりと懐かしい香りがした。

「でも今日から、この国はあなたの子となるのです」
不思議だった。

母の手のひらから、自分の手に何か温かいものが流れ込んでくる。それは母の祈りに近い想いであり、その母が亡き父から託された熱い想いであったが、今の将門にはその正体がわからなかった。ただ、ただ、胸が温かくなっていくのを静かに感じていた。

「良い子に育てるのですよ」

将門はその母の笑顔を見て、まるで太陽のようだと思った。闇に覆われたこの国を、必死に照らし続けた暖かな恵みの光。

ふと、そんな笑顔をつい最近別の場所で見たのを思い出す。あの太陽も、野心と血にまみれた闇夜を照らす希望の光。

（似ても似つかないというのになあ、性格も顔も）

将門はクスリと笑う。

だが自分にとってはおどちらも失うことができない光だ。

「ところで小次郎」

「はい？」

母の表情は変わらず笑顔だったが、嫌な予感がした。満面が笑みすぎて怖い。

「嫁を連れてきたというのは本当なの？」

「……」

将門は絶句した。情報が早い。

（おのれ、好立！ わざとだなっ！！）

普段なら、この手の浮いた話はあつという間に好立の手腕により、箝口令が引かれる。噂話を糧としている女官たちも、どういう訳か好立にかかると貝のように口硬くなった。

おかげで、京都では多くの女性を渡り歩いてきた将門も、男女仲の煩わしさから無縁に生きてこられた。

それが、今回はどうだ。

将門が自分の屋敷に女を連れ込んだことはこれまで一度もない。そんな大事件を好立が口止めしなかったなど、故意としか考えられないではないか。

ぎろりと御簾の向こうを睨む。そんなことをしたところで、好立はしれっと涼しい顔をしているに違いないが、やらずにはいられない。

「早く紹介してね」

目を輝かせてそう言った母は、完全に先ほどまでとは別人。まるで新しい玩具をねだる少女のように、身を乗り出している。

「どこの子なの？ 美人なの？ 歳はいくつなの？ いつから恋仲なの？ 文はいくつやり取りしたの？ 貝合わせはお好きかしら？ 紅の着物とか好き？ まあまあどうしましうっ！ ほら私には息子売るほどいるけど娘は一人もいないでしょう！？ もー早く会いたいわ」

将門は開いた口が塞がらない。よくまあ次から次へと……。

「今から行こうかしらっ！ ああ、もうっ！ 小次郎ってば、一緒に連れてきてくれればよかったのに」

将門はぐったりとなった。会わせたくない。非常に会わせたくない。きつとこの人は、自分の幼少期のあることないことを尚子に吹き込みただけなのだから。

「折を見て連れてきますよ……それより……」

「折っていつですよ！ 明日かしら、明後日かしらっ」

「……いやそんなに早くは無理……」

「嫌だわ何を着て会えばいいのかしらっ！」

「て、聞いてねーな……」

ふう、とため息をつく。そして大きく息を吸ってすくっと立ち上がった。

「母上」

「はい」

「今日より私がこの屋敷の主です」

「ええ、そうよ」

「私の命に従って頂きます」

「ええ、もちろんよ」

何を今更、という顔で母は息子を見上げる。

「以後、私を幼名で呼ぶのはお止めください。私は平将門です。では御免」

きっぱりと言い切り、将門は母に背を向け、部屋を後にした。その後ろを好立が追ってくる気配がしたと思ったその時。

「ぷぷー……っ!!」

母が盛大に吹き出す音が聞こえた。

「……」

将門は悔しそうに舌打ちする。そしてばつの悪そうな顔で背後の従者を見やった。好立は眉ひとつ動かさない。だが必死に口端をにやりと緩ませないように耐えているに違いないのだ。そう言う男だ。将門が黙って睨み付けていると、ついに好立が勝ち誇ったように言った。

「まだ私は何も申し上げておりません」

「やかましいーわっ!!!!!!」

将門はふんつと鼻息を荒くし、大股で歩き出した。

・2・真実の王(2)

「それで？」

そう切り出したのは好立だった。

まるで逃げ出すように実母の部屋を後にした主人の背中に、誰もが瞬殺されそうなほど鋭い視線を送る。それを察したのか、主人が体を縮みこませて、こちらをうかがうように振り返った。そのしぐさは母親に叱られた子供そのもの。

こういう時、腹心ではなく幼なじみというスタンスをとるのが好立の巧いところでもある。もちろん、二人でいるときだけだ。また、それを主人も望んでいた。

「そ、そんな怖い顔で睨むなよ」

「誰かさんのせいで、こういう顔になったんです」

「それって、まさか俺のせいかな？」

「話を反らさないください。今度はいったいこの女を拾ってきたんんです？ さあ正直言って貰いましょうか」

好立はキリキリと主人に詰め寄る。とたんに将門が視線を外した。あやしい。あやしすぎる。

好立の天性の感が、それ以上聞くな、後悔するぞと言っている気がした。

もしこれが、どこかの村の娘なら、こんなに口ごもったりしないだろう。

寺の尼か？ いや、それには、髪を剃髪していないからあり得ない。

ならば、神社から巫女をかつさらってきたか？ そうだとして、自分に隠すほどの格式の高い神社が上総から下総の道中にあっただろうか。

(……まさか)

ふと、口にするのも恐ろしい考えが浮上する。

主人が自分に言えないような家の娘。一人いたはずだ。あの上総の国に！

（いやいやいやっ！！ さすがにそこまで馬鹿ではないだろうよ）

好立は不吉な考えを吹き飛ばすように、頭を左右に振った。

そうだ。自国を脅かそうとしていると噂に聞いていた相手の国に単身乗り込むだけでも無謀だというのに。本拠地へ図々しくも顔を出し、娘を奪って逃走するなど、あるはずがない。

通い婚というスタイルが一般的であるこの時代では婿取りが普通。妻を『娶る』とは文字通り『女取る』と書く。

つまり、父親の了承も得ずに、娘を奪って自国へ連れてくるなど、父親の面子を泥で塗りつぶし、汚泥を頭から掛けたに等しい。喧嘩を売っているとは思われないということだ。

自国の先の長が死んだこの混乱時に、よもや将門がそんな愚行に走ったとは考えたくもないし、あってはならない。ならないのだが……他に該当者が思い浮かばないのも事実。

好立は恐る恐る質問を繰り返した。

「それで？」

ふう、とため息を一つ将門は溢した。ため息をつきたいのはこっちだ。

「……尚子だ」

「……………」

「年は十五」

「——そんな情報いらんっ！！」

思わず主人の胸元をわしづかみにして目をひんむく。

「往生際が悪い。とっとと吐け」

「わ、わかった！ わかりましたっ！」

両手を上げて降参する将門。しぶしぶ、好立は首もとを締め上げていた手を離してやる。

ぱたぱたと襟元を正しながら、将門は言った。

「尚子は言わば、上総の国の姫君だ」

将門は得意げに、口端を上げる。

「姫君……？」

好立は恐る恐る、確認する。もう該当者は一人しかないのだが。それでも、最後の望みを託して将門の言葉を待った。

「決まってる。“あの”良兼伯父上の一人娘だ。すごい手土産だろう？」

そう言った将門の目は自信に満ちていた。きらきら輝いていて、眩しいほどだ。それが好立の怒りを増長させているとも知らず。

これは何の冗談だ？

しかも、なんだその言いぐさは？

何だってそんなに自慢気に言うのか。自分が何をしでかしたのか、わかっていないほど馬鹿ではあるまい。

ただ気に入った娘を連れ帰ってきたとはわけが違う。『取れるものならとってみろ』と飢えた獣の前に自分の首を晒しているようなもの。それなのに、まるで褒めてくれとねだる子供のような顔をしているのは、どういう了見だ。

（——すごい手土産、だど？）

好立の唇がわなわなと震えだす。

（言わば姫君だ、だどっ！？）

込み上げる怒りに、目の前が赤く染まって見えた。

何も考えてない。後で尻拭いに奔走させられる好立のことなんて好き勝手やって、あとはまかせたぞ、と言えは済むと思っている。そうに違いないのだ、この男はっ！

そんな好立の気持ちをこれっぽっちも将門は気づいていない。

「まあ、そういうことだから、丁重に扱えよー。じゃないと蹴られるぞ。わははははっ」

そう笑い声を立てながら、再び自室へと向かって歩き始めた。その将門の背中に『ぶち』という何が切れる音が聞こえたとか聞こえないとか。

そのすぐ後で、「今すぐ返してこいっっ！！！！」という怒声と、

バキツという誰かが殴られたような音が続いたとか何とか。真実はすべて歴史という名の闇の中である。

将門は自室に戻ると、一人低く唸り声を上げた。手に握られた和紙には、先に帰郷させた好立の調査結果がびっちり記されていた。「なるほど。これは、さすがの母上もお手上げになるわけだ」

そうぼやくと、将門は和紙をぽいっと放り捨て、床の上に長い手足を放り出した。同席していた好立がその和紙を目で追う。その情報をごんだけ苦勞して集めたと思っているんだ、というようなため息が聞こえてきたが将門は気にする様子も無い。まるで自分で最悪の現状を確認するように、天井を見上げたままため息まじりに言った。

「せっかくの実りの秋だというのになあ。すでに田畑は、悪知恵の働く狸と、虎視眈々と俺の首を狙う狼に食い荒らされてるってわけか」

当然、狸とは常陸の源氏であり、狼とは上総の伯父だ。

両者は、父良将の死後、この秋に収穫のあった田畑を狙って、家臣を派遣したのだろう。その田畑を運営していた農民たちをうまく丸め込むために。

この下総の国は、圧倒的な力をもつ父の存在でもっていたに等しい。その父が死んだ今、近隣の豪族が攻め込んできて、あつという間に土地を奪っていくのは目に見えている。おまえたちも殺されるぞ。そうなる前に、自分たちに税（米）を納めれば命も土地も守ってやる。こんな滅びることが分かっている国の後継者なんぞ、当てるな。

そんな甘い言葉をかけ、農民たちに土地を提供（寄進）させ、農民ごと手中におさめた。そんなところだろう。狸の考えそんなことだ。

「まいったな。食っていけるのか？」

「多少の蓄えはあるようですが、このままでは我々は飢え死にです」
「だよな」

確実に穀物の生産が見込まれている土地を狙って、というところが敵ながら憎い。残されているのは水害の多い低地ばかりだ。

「とりあえず、父上様と親交の厚かった方に、それとなく援助を求められないかと思われます。その間に、生産量の確保ができねばこの国は誰かが攻めてこなくても滅びますよ。まあ、その間にどこかに攻め込まれたらひとたまりも有りませんが」

物資と共に流出した農民たちは、いざとなれば鋤を武器に持ちかえて、国を守るために戦う。立派な戦力だ。

つまり、農民を他国に取られたというのは戦力を削がれたのも等しい。今、この屋敷にいる衛兵たちだけでは、とても太刀打ちできないだろう。いくら、父に鍛えられた精鋭達であっても。

「そうなるな。いやあ、参った、参った……」

将門はごりごりと頭を掻きむしった。

予想はしていたがここまでとは。笑い事ではすまされないぞ、と小さく息を吐いた。

早急に人員と食料を確保せねばならない。だがどうやって。人がそう簡単に沸くわけもないし。

「とりあえず……親父と親交の厚い御仁に頭を下げるしかないな……俺の親交の厚い者っていうと京都だもんなあ」

「ええ、しかも、女性ばかり。不倫相手の女性のご実家に頼めるわけありませんし。あなた様に正室でも側室でも、一人でも妻が居ればよかったのですが……連れて帰ってきたと思えば“あれ”ですし」

「はっはっは」

さらりと好立の嫌味を交わしながら、体を起こし胡坐をかく。ますますに好立に向き直った将門の目は黒々と光っていた。

「頼れるとしたら、母上の実家か」

「そうですね。犬養春枝殿と、あとは平真樹殿（いぬかいほるえ）でしようか。すでに、

殿の帰国を知らせる文を届けさせてあります。じきじきに挨拶周りをした際に、うまく頼み込んできたらいかがですか？ 得意でしよう、そういうの」

「褒めてるのか？」

にやりと将門は笑った。

本当に好立は仕事が速い。主の手の届かないところでも、代りに手を差し出せる男だ。

（そういえば……）

将門の脳裏に、先日上総で出会った男の顔が浮かぶ。あの男も、補佐官としてこの好立にひけをとらぬ逸材であったように思う。短い間であったが、将門の直感があの男を欲しがっていた。それだけは確かであり、自国へ引き抜くための理由としては十分すぎた。

「惜しいことをした」

「は？」

思わず口にしてしまった将門は、好立の声で我に返る。

「いや、泥に埋もれた金塊を見つけたのだが、両手がいっぱい持って帰れなかったという話だ」

男の顔を思い浮かべながら、ふっと小さく笑った。

上総の国で、尚子の供をしていた男、鷹雄^{たかお}だ。たしかに、あの男は逸材であったかもしれないが、仏頂面が過ぎる。鼻^{ひなめ}目もあるかもしれないが、好立のほうが扱いやすいし、色々と誤魔化せるし、便利だ。だが、尚子の安全が最優先というあの男なら、安心して尚子を任せておける気がしたし、利害が一致している分、将門に逆らうことも無かっただろう。実に惜しいことをした。

「金塊ですか……張りぼてでなければいいですけど。持ち帰ってきた宝石と同じように」

「ほう、宝石と認めたか」

将門はにやりと笑う。宝石とは失言だったと、内心悔しいだろうと思ったのだ。だが、好立は眉一つ動かさずに言い返した。

「蓼^{たて}食う虫も好き好きといえますし。私にはその辺の砂利とかわら

ぬ石でも、殿には宝石のように見えているのだろうと言ったままです」

「ふん。言ってる」

けらけらと声を立てて笑うと、将門は立ち上がった。それを視線で追いながら好立は問う。

「どこへいかれるのです？ お休みになるのでは？」

もう夜もどっぴり更けている。まさか今から国内の田畑を見回るほど勤勉な殿様ではなかったように思うが。そんな好立の腑抜けた顔を、「決まっているだろう」と一蹴する。

「俺は愛妻家だ」

将門は心の中で、まだ妻にはいないが、という言葉を読み込む。今までの武勇伝の全てを知っている好立は、まさか将門が尚子に手を出していないなど、思いもよらぬことに違いないからだ。

知られるわけにはいかない。将門の沽券こけんにかかわる。

「……………愛妻家は、熱でうなされる妻を夜這いにはいかないと思いますか…………」

「おまえ、俺が二度の飯より女好きだと思っているだろう」

「違うのですか？」

間髪いれずに返ってきた答えに、わざとらしく将門は首をすくめる。

「あのな……………俺にしてみれば、おまえのほうが異常だ。何だって女を作らない。ま、まさか不能か！？ それとも俺を狙ってるのか！？」

「そうです」

「……………なっ！！」

冗談で言っただつもりだった将門は、絶句した。

なんてことを、しれっとした顔で言うんだこの男は。

しかも、今の『そうです』はどっちに対する答えなのだろうか。不能なほうか。それとも……………。

（き、聞けないっ！！）

完全に固まった主人の様子に満足したのか、好立はすくつと立ち上がった。

「明日は朝からやるのが山済みなのです。夜更かしするのは勝手ですが、甘やかしませんのでそのつもりで。しっかり働いてもらいますよ。では失礼」

言い終わるが早いのか、好立は将門の自室から姿を消した。

一人残された将門は、しばらくの間、もんもんと思い悩んでいたが、急に何かを吹っ切るように「よしっ！！ 厄払いだ」と叫んだと思うと、勢い良く自室を後にし、最愛の人が眠る部屋へと駆け込んだ。



規則正しい寝息が聞こえる。

尚子を下総に連れて来て、すでに三日目の夜が明けようとしていた。その間、将門は自分の寝室ではなく、尚子の寝ている部屋で、ほとんど眠ること無く朝を迎えていた。

今日も尚子の寝顔に見いつている間に、部屋の外が白ばんできてしまった。

だが、見ていて飽きないのだから仕方がない。

熱のためほんのりと上気した頬。甘い果実の香りがしそうな、小さくふっくらとした唇。絹糸のように艶やかな黒髪。

将門には、目の前に横たえる尚子が芸術品のように思えてしかたがない。透き通った彼女の白い肌は実は陶器で、少し触れただけで壊れてしまうのではないだろうか。思わず彼女の頬に伸ばした手を引き戻してしまう。

(……やっとなにに……)

将門は心の中でそう呟いた。

そう、自分はついに、手に入れたのだ。

与えられたのでも、もともと有ったものでもなく——自身で掴み取ったもの。

自身の心で欲しいと望み、その心に従い、命をかけ、手中に収めた——自身の力だ。

（……まずは一步だな。小さくとも一步確実に前に進んだ）

それまでの将門はどこか他人事のように思うことがあった。この国も、民も、父と祖父の力で得たもの。

将門はこの世に生まれ落ちた時に、幸運にもそれを受け継ぐことが約束されていた。長男ではなく次男。将門の兄は、幼い頃に死んでいた。ただそれだけの理由で、この国は自分のものになり、国の長となり得た。

だが、自分はまだなにもしていない。民や家臣たちから“国の長”と敬われるようなことは何もしていないのだ。

全てはこれから。

この国をどこへ導くのか。決めねばなるまい。その目指す方向を、自分の民に指し示してやらねばなるまい。

もう後戻りはできない。するつもりもない。

微熱に脅かされ、未だ眠り続ける最愛の人を、将門は食い入るように見つめた。

（お前は、俺の国の指針だ。俺が間違った方へ進まぬように、ちゃんと見張っててくれよ）

くすりと将門は息をもらした。そして、そっと尚子の頬に口づける。

尚子の望む国を作ろう。尚子の笑顔が曇らぬ国に育てよう。

国の民、一人一人が、“自分らしく”生きていける、誇り高き国を。彼女がそう望む限り。

そのために自分は彼女をここへ連れてきたのだから——。

「寝てる暇はないぞ。早く元気になれ。そして俺の子をどんどん産め」

将門は、ごつごつとした豆だらけの手で尚子の額を撫でた。

尚子の前だけ自分の顔が豆腐のように緩いことを、最近、将門は自覚せざるを得ない。

・3・大きな国（1）

3 大きな国

将門は首をぐるりとひねり、四方八方を見渡すと、思わず目を細めた。

（みごとだ――）

目に映るもの全てがまぶしい。

砂金のように煌めく朝日を浴びて、いっぱい背伸びする野草。

一面の野原は、そよ風に大きくゆっくりと波打ち、まるで黄緑色の海の中にいるようだ。

そよ風はそよ風で、夢見心地へ誘うように歌う。

空は青い。

雲は高い。

ふわりと香る、懐かしい土の匂い。

まるで、この牧に立っているだけで、何か大きなものに包み込まれているような心地になる。

何かに似ている。何だっただろう。

その何かが気になって、将門は考えを巡らせた。

遠い昔に感じた、力強さと暖かさと厳しさを持つ、大きな男の腕の中で、同じような気持ちになったことがある気がする。

あの人はいつも鬼のように恐ろしい顔をしていた。周囲の人々からも、気難しい人だと言われていたし、自分もそうだと思っていた。

幼心に近寄りがたかったが、それは恐怖からではなく畏敬の念からくるものだったのではないだろうか。今になってそう思う。

会えなくなっただけから、もっと話せばよかったと思う。聞いておき

たいことが山ほどあった。聞いて欲しいことが天ほどあった。

もう二度と、叶うことはあるまい。

もう一度だけ、と願うことは幾度となくあったとしても。

——父に会いたい、と。

「よう、小次郎！　ずいぶんと早いじゃないか」

重低音と共に聞こえてきた懐かしい声が、将門を引き戻した。

振り返ると、裸馬にまたがる武者の姿が近づいて来るのが見えた。

日に焼けて浅黒くなった顔に、真っ白な歯がのぞき、ぎらぎらと

目を輝かせるこの男は、好立と同年の三二歳。名を多治経明^{たじのつねあき}という。

今が男の盛りというところか。父、良将にその才能を高く買われ、

この朝廷所有の放牧場の管理を任されている男だ。

彼の鍛え抜かれた体は、服の上からでも分かる。見かけどおり腕の立つ男はあるが、なかなかの策士でもあった。腕が立つ分、好立よりもタチが悪いという説もある。

かくして、小次郎少年は、“深謀遠慮の好立”、“悪知恵の経明”という、五つ年上の二人の軍師に恵まれ、数え切れないほどの危機的狀況を切り抜け、たくましく成長してきたのである。もちろん、危機的狀況とは、近所で評判の美人を夜這いし、うっかりその恋人と鉢合わせして切りつけられる、なんていう女性関係も含む。特に、女性を籠絡させることにおいては、将門の師匠はこの経明であったかもしれない。

とにもかくにも多方面において、将門の少年期を支えてきたのは、好立とこの経明であった。

「おまえこそ、こんな時間から働いているのか？」

素直に関心した将門は、そう聞いた。まだ、朝日も全部顔を見せていないほどの早朝に、この牧で誰かに遭遇するとは思わなかったのだ。

「まあな。亡き殿から任された大事な牧だからな」

経明は馬上から、遠くを見やる。将門も経明の視線を目で追った。黄緑色の大地を踏みしめ、走りまわる若馬の数頭の群れ。その若馬よりも、体が一回り大きく、立派な筋肉を脈打たせるようにして追いかける成熟した馬群。ざっと数えただけで百頭はかるく越える。終焉の見当たらないこの広大な土地が、父の管理していた牧であり、今は自分のものとなった牧である。この牧で多くの軍馬を育て、朝廷に納める。それが、将門親子が朝廷から与えられた仕事であった。

だが、将門にとってこの牧は朝廷から任されているという事以上の意味を持つ。

なぜなら――。

「残ったのはこの牧だけだからな」

将門はぼつりと言った。

父の遺産は、今となってはこの牧だけ。だから、経明は必死に守ったのだろう。父の愛した牧を将門の手に渡すために。

容易なことではなかっただろう。それが想像できるだけに、胸が熱くなる。じっと見つめる将門の視線に気づき、振り返った経明と視線が交わる。将門はそつと、心の中で感謝を伝えた。

だが将門は思うのだ。もしかしたら、父の遺産は牧などではないのかもしれない、と。

こんなひどい有様になった滅びかけの国で、文字通り体を張って、自分の帰りを待つ者たちがいた。だからこそ、自分はこうして生きていられる。帰る場所がある。

彼らこそが、父の遺産なのではないだろうか。

“国があるから民がいるのではない。民がいるから国があり、王があるのだ”

将門ははっとなって、あたりを見回した。牧の風に乗って、父の声が聞こえたきがしたのだ。

だが、望む人影がそこにあるわけも無く、小さく肩をすくめた。
(まさかな……)

弱気になっているのだろうか。幻聴が聞こえるなど。

「小次郎、久しぶりにどうだ、競争しないか？」

見上げると、白い歯をのぞかせて経明が挑戦的な笑みを浮かべていた。

「いいだろう」

将門がうなずくを見て、経明はぴゅーと指笛を吹いた。馬を呼ぶときの合図だ。

「負けたら何してくれるんだ？」

「ずいぶんと強気じゃないか。この俺様に勝つつもりか？ あの陸奥鎮守府將軍良將の息子だぞ」
つちんじゅふしやうぐん

「言ってる。ほら、どの馬でもいいぞ。とつとと選べ」

将門は、経明の指笛を聞きつけ集まってきた馬を見渡した。どの馬も若々しい。将門の視線はゆっくりと、何頭もの馬たちの前を通り過ぎる。

ふと、そのうちの一头に、吸い込まれるようにして止まった。油も乗って、黒光りするほど美しい黒毛の、見事な牝馬だった。

将門がそっと近づき首を優しくなでてやると、牝馬はじっと将門を見つめ返してきた。

だからこの馬に決めた。

大丈夫。この様子なら背に乗せてもらえるだろう。

「おまえじゃない、殿と呼べ、殿と！」

「知らない。俺が知っているのは、鼻垂れの小次郎だけさっ」

からからと笑う経明に、将門は舌打ちした。

「よし、分かった。いいかつ！ 俺様が勝ったら、今後一切、俺を“小次郎”と呼ぶんじゃねーぞっ！！」

言いながら、将門はひらりと牝馬にまたがった。

「勝ってから言うんだな」

「ったく、経明といい、好立といい。俺を何だと思ってやがる」

「男がぐだぐだ言ってるんじゃない。ほら、行くぞっ！」

言い終わるが早いか、「はいやーっ」と雄叫びを上げながら、
経明は馬の腹を蹴った。

「あ、待てこらっ!!」

慌てて将門も馬を走らせる。

馬の息遣いと将門の呼吸が重なる。

土を踏みしめる蹄と将門の鼓動が一つの音楽のように音を奏でる。
牧の香が頬をなでていく。気持ちがいい。

風が歌う。土が踊る。

この牧は、自分の原点。

皆ここで学んだ。

自然との対話を。心のあり方を。

そうだ。自分はこうやって、大きな自然の一部になって生きていたのだ。

風の息吹を肌に刻み。

空の色に染まり。

川の流れに包まれ。

大地の暖かさに心を溶かす。

それなのに、ずっと忘れていた。陰鬱で閉鎖的な常闇の京都で暮らすうち、いつのまにか自分も完全に真っ黒に染まってしまっていたのだろう。

(尚子か……)

あの娘が自分の心のよどみに、清水を引き込んでくれた。まるで暗闇に、ひと筋の光りが差し込むように。

「だあぁーっ!! 勝ったぞっ、こんちくしょうっ!!」

将門の操る馬が経明の馬を抜き去ったところで、軍配は将門に上がった。お互いに肩で息をしながら、二人は馬の背に倒れこんだ。

勝ちを譲られたのではない。お互いに手を抜くことはしない。真剣勝負だ。

経明の乗る馬はまだ新馬。まだまだ訓練の足りない、人間で言ったら十代の少年だ。乗り手の言うことを聞くときもあれば、そうでないときもある、やんちゃな時期だ。一方、将門の選んだ馬は、今が花盛りの二十代半ばの成人女性。

経明は将門に勝って見せろと言った。どんな状況がおこるかわからない新馬にまたがる経明に。初めて乗る馬で。しかも駿馬を見極めて。

どんな状況でも、自分の手で勝利を掴みとれねば、自分の主とは認めないとでもいうかのように。

しかし、将門は勝って見せた。

「……………負けちゃったか」

経明は満足げにそうつぶやくと、体を起こし、ひよいと馬から飛び降りた。そして、静かにひざまづいた。

「何の真似だ」

将門も馬を下り、経明の前に立った。

「我が殿。この命、我が殿に捧げます」

経明が顔を伏せたまま言った。表情が読み取れない。

だが、冗談でないことはその声色から分かる。だから、将門も真顔になった。

「多治経明」

「はっ」

「俺にその命を差し出すと申すか」

「御意」

「ならば、死ぬな」

はあ？ とでも言いたげな顔で経明が将門を見上げる。将門は膝を折って経明の肩に手を置いた。

「俺が死ぬまで、仕えよ。俺より先に死ぬことは許さん」

将門の心からの願いを乗せた言葉は、澄んだ朝焼けの空に溶け込

んでいった。

経明は将門の瞳の奥に強い意志を見たが、その主人の意には従えない。目を伏せ、首を横に振る。

「……………それでは、役目を果たせたことにはなりません」

将門も、彼があっさり自分のこの命令を受け入れるとは思っていなかった。だから、今度は語調を強める。

「俺の許可なく勝手に死ぬような奴は必要ない。わかったな」

眉間にしわを寄せ、ついに経明は怒りをあらわにした。

「……………そんなわけいくか！ 己の主を先に死なせて、^{あるじ}のうのと生きていられるかよ」

「石頭だなあ。わかれよ、俺の命令だって言ってるだろう」

「そんな命令聞けるかっ！ 主なら主らしいこと言えよっ！！」
と、その時だった。屋敷の方から、異変を告げる早馬が現れたのは。

「殿っ！！ お方様が急変されました、急ぎお戻りくださいっ！！」
一瞬にして、将門の顔から血の気が引いた。

「……………なんだと！？」

将門は次の瞬間、地面を全力で蹴り、跳ね起きた。そして、鬼の形相で、使者に詰め寄る。

「尚子は回復に向かっていると言ってたではないかっ！？ 急変とはどういうことだ！！」

「ご、ご危篤との事です！」

急に将門の手から力が抜ける。

「——危篤………今、危篤と言ったか？」

尚子が危篤だと？

あの娘が死ぬのか？

呆然となった将門の瞳に、次の瞬間、黒々しい光が戻った。

「くっそう、誰が逝かすかっ！」

使者を牧の上に吹っ飛ばす。そして、使者が乗ってきた馬にまたがり、手綱を取り、「はっ！！」と短い掛け声と共に、馬を全速力

で走らせ始めた。

あつという間に小さくなっていった将門の豹変ぶりに、残された
経明と使者は、目を丸くしたものだった。

・3・大きな国（2）



尚子^{たかこ}はまだろみの中にいた。

まだ重たい瞼を、かすかに開けると、暖かな日差しが飛び込んできて、まぶしさに思わず小さな呻き声を上げてしまう。

真新しい藺草^{いんそう}のいい匂いがした。莫蔭^{もくえん}の上に寝具が敷かれているらしい。

そこで尚子は、はたと思う。

（寝具？ 莫蔭？）

やっと焦点のあった視界にうつし出されたのは、見慣れない室内。
（……………ここは？）

首をゆっくりとひねり、部屋を見渡す。朱色に施された几帳^{きちょう}（※布製のついたて）が並べられ、寝ていた夜具のすぐ横で香が焚かれている。落ち着く香りだ。

自分の部屋ではないのは、すぐに分かった。尚子が十五年間暮らしてきた部屋より、置かれた家具のそれぞれに年期が入っている。だが、行き届いた心遣いを感じる。

「目を覚まされましたか？」

初めて聞く女性の声が尚子の耳に届いた。尚子よりも少し年上だろうか。澄んだ、美しい声だった。声の主は、几帳のさらに向こうにある御簾^{みす}（※レースのカーテンのようなもの）の外にずっと控えていたらしい。

「……………よろしゅうございますか？」

なかなか返事をしない尚子を、不審に思ったのか、女性が御簾を押し上げ、部屋の中に入ってくる気配がする。衣擦れの音が、すつ、

すっとしたかと思うと、几帳の間から若い女性が姿を見せた。

黒々とした髪は、一本一本が透き通るように輝き綺麗にまとまっている。肌も白く真珠のようで、うっすらついた口元の紅がよく栄えた。大きな二重の瞳に見つめられれば、女の尚子ですら、どきりとなって、生唾を飲み込んでしまう。

(……………美人……………)

優雅としか表現できないような、気品に満ちた動きで女性は尚子のそばに座った。

尚子はその動きに目を奪われていた。

そんな尚子に気がついた女性は、尚子と視線が合うと、花のようにふわりと笑った。そして、背後に控える他の女官に声をかけた。

「近江、おおみ将門殿をお呼びして」

とたんに、尚子は“将門”の二文字に反応する。

(そうだ、小次郎!)

とたん、あの赤い満月の夜の記憶が、いつきに尚子の脳裏を駆け巡った。

あの夜、自分は平小次郎将門と共に、尚子の実家である上総国（現在の千葉県北部）から、この下総国（現在の茨城県）に来たのだ。来たと言え、旅行のようだが、そんなものではない。

命からがら、多くの村人を犠牲にし、今までの生活も、父も、兄弟も、全てを捨てて、夜通し馬を走らせてきたのだ。

小次郎と二人で、新たな人生を歩むために。

新しい国を作るために。

「こじ……将門殿はどこに!? 無事なのですか!？」

尚子は女性に詰め寄る。

女性は、静かに微笑んだ。

「すぐにいらっしゃいますよ。ええ、たぶん、駆け込んできますわ。ちよっといたずらをしておいたから」

「はあ……」

わけが分からず、情けない声が出た。

「あの……ここは？」

「下総ですよ。平将門の営所（屋敷）です。私はここよりちょっと離れたところにいたのですが、今さっき来たのよ。どうしてもあなたに一目お会いしたくて。そうしたら運良くあなたが目を覚まして……よかったわ、もう大丈夫そうね」

そう言いながら女性は、尚子を再び寝具に横たえるように促した。（よかった、下総なんだ……）

再び体を横にしながら、尚子はこっそり胸をなでおろした。

とりあえず、上総から無事に下総にたどり着いたことだけは確かなようだ。

この女性も自分に危害を加えようとしているようではなさそうだし、今自分の置かれている状況を見るからに、小次郎と引き離されてどこかの屋敷に幽閉されている、というわけではなさそうだ。きつとここも、小次郎の所領の館の一つなのだろう。

というより、この人は誰なのだろう。首をかしげていると、女性と目が合った。女性は柔らかに微笑みかけてくる。

「でも、驚いたわ。こんなに可愛らしい姫を選ぶなんて。もっと、こう、色っぽい、気の強そうな、女狐のような女だったらどうしようかと思っていたのよ」

「……め、女狐？」

「そうよっ！ 女狐だったら追い出してやろうかと思っていたの」女性は、ぷうっと頬を膨らませ、木の実のように赤い唇を突き出した。どうやら、怒りを表現しているらしいが、可愛らしいので思わず微笑んでしまいそうになる。

「ところで、お名前をお聞きしても良いかしら？」

尚子は慌てて起き上がり、姿勢と肌蹴た夜着を正した。

「申し送れました。上総の介、平良兼が一姫、尚子と申します」

三つ指を立て、深々と頭を下げる尚子。数秒の後、顔を上げる。まん丸に見開いた大きな大きな黒曜石の瞳とぶつかった。

尚子が、何も言わない女性を不思議に思った時だった。

「まあ~~~~！」

素っ頓狂な声が部屋を駆け抜ける。

尚子はぎょっとした。予想外の反応に、次の行動に移れない。何かまずいことを言ってしまったのだろうか。

内心慌てふためいたが、この場合尚子の落ち度はどこにもない。

「まあまあまああっ！！ あの上総の！」

「は、はい……」

「まあ、あのお小さかった姫が！ こんなにお美しくなれてっ！！」

「え？」

それは、どういう意味だろう？ と眉を詰めたその時だった。

どすどすどすどすっと、廊下を踏み鳴らす足音が近づいてくる。

「あら、もう帰って来たわ」

ぽかんとする尚子を見て、女性はくすくすと笑い声を上げた。

まったく展開についていけない尚子に、女性はさらに続ける。

「大目にみてやってくださいな。姫は四日も、高熱でうなされながら眠り続けていらしたのですから」

「え？ え？」

——バンっ！

部屋の木戸（妻戸）が、乱暴に開かれる。

「尚子——！」

「お、お待ちください！！ 殿……あっ！！」

「うるさい、離せ、尚子っ！！ 逝くな尚子っ！！ それだけは許さんっ！！」

女官が止めるのも聞く耳持たず。無造作に御簾が持ち上げられ、浅黒い顔の男が几帳の上にがばりと顔をだした。

「……小次郎？」

ぽかんとなって小次郎を見つめる尚子。そんな尚子の無事な姿に

ほっとしたのか、それともまだ夢でもみているかのようで信じられないのか、その両方か、小次郎はその場に呆然と立ち尽くし動けなくなった。

不思議に思った尚子は、もう一度声をかける。

「小次郎？」

それが合図となったのか、小次郎は尚子に駆け寄り強く尚子を自分の腕の中に押し込めた。

「わっ、ちょ、小次郎っ!？」

わけがわからず、真っ赤になって小次郎の胸の中から抜け出そうとするが、びくともしない。それどころか、まるで自分の胸の中に尚子を閉じ込めようとでもするかのような将門の腕の力はすさまじく、息がまともにできない。

「ちょ……くるしいっ!！」

力任せに突き飛ばそうとした時、尚子の耳に切なそうな小次郎の声が飛び込んできた。

「……尚子……」

（えっ!？）

まさか、泣いてるの？ と尚子は仰天する。そう言えば、小次郎の体が小刻みに震えているような気がする。いよいよ、何が起きているのかわからない。

普段、気取ったそぶりで女性に甘い言葉を垂れ流すこの男が明らかに動揺し、感情を隠そうとしないので、尚子もどうしていいかわからなくなってきた。

どうして泣いているの？

何があったの？

そう聞きたいのに、小次郎の腕の力が強すぎて声がでない。

これが小次郎なのか。本当は、こんなに感情の豊かな、激しい男性なのか。尚子は、新たな彼の子供のような一面に、胸がほんのり暖かくなっていくのが分かった。

また一つ、彼を思う気持ちが沸いて来る。一緒にいる時間が増え

れば増えるほど、泉のように沸いて来るこの気持ちを抑えることはできない。

小次郎が離してくれるまで待つしかないのか、と諦めた尚子を見計らったように、その場に居たもう一人の女性が口を開いた。

「なんです、将門殿。姫は夜着のままだというのに、無礼ですよ」

完全に彼女の存在を忘れていた尚子はぎよっとなって固まる。同時に小次郎も、がばりと尚子から体を離れた。

女性は、さも面白いものを見たと言わんばかりに、くすくすと笑う。その女性の存在に、今気がついたのだろう、小次郎の顔があっという間にばつの悪いものになっていく。

「……………なんで、こんなところにあなたがいるんですか」

その瞬間、尚子には、自分より十歳も年上の将門が、まるでいたずらの見つかった子供のように見えた。それで、尚子はピンとくる。

（……………まさか……………この人！）

尚子はじっと女性を見つめた。

「母が、息子の妻の心配をしたらいけないの？」

将門にそう言ったかと思うと、女性はずっと体をずらし、今度は尚子の方を向いた。

「申し遅れました。あなたの叔父にあたる平良将が妻にございます」
平良将の正妻にして、将門の母、亜子あしはこれでも御歳四十をかく越える。どう見ても二十代というような風貌からは、二七歳にもなる将門を含む六人の子供を生んだ女性とは、とても思えない。

「将門殿がちっとも紹介して下さらないから、待ちきれなくて押し掛けてしまいましたのよ。うふふふ」

「……………母上……………」

尚子は目をぱちくりさせた。

女好きのこの男にも、どうにも御し得ない女性がいたのか、と。

「菜月なづきの方様。そろそろ……………」

御簾の向こうから女官が亜子に声をかけた。

「そうね。そろそろ失礼しなくては」

立ち上がった亜子に小次郎は声をかけた。

「どちらへ行かれるのですか？」

「今日は相馬へ参ります。有り米を全部よこしてくださいと、父上の所へ泣き落としに参るのです。さ、行くわよ、近江^{おうみ}」

亜子は自分に気合いをいれるように、ふんと鼻息を荒くし、御簾の向こうの女官と共に部屋を出て行こうとした。

「な、泣き落とし！？ それは以外と使えるかもしれない……あ、待ってください母上、私も参ります！！」

呆気にとられていたが、将門が慌てて亜子の後を追う。

これがこの国の影の実力者、葉月の方、亜子姫との初めての出会いであった。

・3・大きな国（3）



「さあ、薬湯を飲め」

低い男の声で尚子は再び目をあけた。どうやら自分は、また眠りに落ちていたらしい。

室内は小さな炎が揺らめくだけの暗闇。外は静まり返って、虫の声しか聞こえてこない。だいぶ夜も更けているのだろう。

将門が薬湯を飲ませるために、尚子を抱き起こそうとして、こちらに手を伸ばしてきた。尚子は慌てて寝具に寝かせていた半身を起こし、将門の手から薬湯を奪い取る。

「そのくらい自分でできる」

言いながら自分の体がだいぶ楽になっていることに気がついた。熱もずいぶん引いたらしい。それでもまだ体の節々が痛む。

「何だ、遠慮するな」

「してない。それより、病がうつったら大変だ」

女官たちは何をしているのだろう。こんなこと、屋敷の主たる将門がやることではない。

尚子はちらりと御簾の外へ目をやってから、薬湯を口に含む。その目の動きで尚子の気持ちを察したのか、将門がくすりと笑った。

「いいんだ。おまえの世話は俺がすると言ってある。それに、もう四日もこの部屋で寝泊りしているが、俺はなんともない」

「——んぐっ」

尚子は薬湯を噴出しそうになるのを必死でこらえ、なんとか飲み込んでから聞き返した。

「寝泊り!？」

「ああ、ずっと添い寝してやっていたのに気がつかなかったのか？」
「なっ……………」

あまりの衝撃に、尚子は二の句が告げない。

まさか、知らない間に男と同衾していたなんて。

（ふ、不覚っ!! 熱があったとはいえ、全然気がつかないなんてっ!!）

こみ上げる恥ずかしさに、顔から火がでそうだ。

「——っ!!」

がばり。

尚子は自分にかけられていた寝具の布を頭からかぶって、自分の体を将門の視線から隠した。

「なんだ、どうした？」

将門は面白いものでも見るように、にやにやと笑った。

「大丈夫だ、まだ何もしていないぞ。眠りこける女を抱く趣味はない。それから、ずいぶん頑張って耐えたが、体も見えてないぞ。体を拭いていたのも女房たちだしな」

（あ、あたりまえだっ!!）

何かされていてたまるか。だいたい、何を頑張って耐えたっていうんだ。

そう言い返してやりたかったが、恥ずかしさが先にたって、言葉がでてこない。

（もう、どうして、そう……）

この手のことからずっと逃げてきた尚子だって、将門がこれから尚子に何を求めてくるのか分からないわけではない。

この時代の姫と呼ばれる女性たちは、教養の一つとして、“男女の恋愛話が好きなのは女性の方。姫たちはかしずきの女官たちから、歯に衣着せぬ話を聞き、あれやこれやと深くリアルな知識を得る。今で言うガールズトークである。

尚子だって、進んで女官たちの話に参加することはなかったとは言え、耳に入ってくることもあれば、教養として学んだ知識ももっている。

だが、頭でわかっていたとしても、それを実際に行うのとは話が別だ。到底、女官たちの言うようなことはできそうにない。恥ずかしいものは恥ずかしいのだからしかたないではないか。

もうどうして言いかわからないくらい尚子はパニックに陥っていた。

一方、寝具の掛け布の中で一人何がぶつぶつ言っただけ、いつこうに顔を見せようとしないうちに、将門は自然に顔が緩む自分を感じていた。

「尚子」

名前を呼ばれた尚子がびくりと体を硬直させる。

将門は掛け布ごと、尚子を抱き寄せた。すっぽりと腕の中に納まった瞬間、尚子は石のように固まってしまった。

そんな彼女の初々しい仕草も、将門に春の日差しのような暖かさを呼び込んでくる。

「やせたな……」

高熱で寝込んでいた間、薬湯と白湯しか口にしていなかった。元々細身だった尚子の体が、ますます華奢で頼りなげに感じた。腕の中に閉じ込めておかなく消えてしまっているのではないか。そんな不安すら覚えるほどに。

「尚子」

もう一度将門が呼んだ。

すると掛け布が零れ落ち、尚子の大きな二つの瞳が将門の瞳の

中にうつりこんだ。

将門が緩やかに笑む。そして、流れるような自然なしぐさで、尚子の唇にそっと口付けた。

唇を離すと、瞼を閉じ自分に身をゆだねる尚子の姿があった。

絶されなかったことに、こっそり胸を撫で下ろしつつ、名残惜しそうに将門は尚子の瞼に短く口付けし、尚子を寝具に寝かしてやる。

「この国をおまえにやる」

尚子に掛け布をかけなおしてやりながら、将門は言った。

「今はまだ、手から零れ落ちてしまいうるな、小さな国だ。だが、俺はこの国を大きくする」

尚子はじっと将門を見上げている。その瞳は、将門の言葉を一つ残らず胸に刻み込むかのように真剣だった。

「大きくとは所領地のことではないぞ」

将門はごろりと尚子の横に転がった。

「民が生きていることに絶望し、生まれてきたことを悔やむような国にはしない」

今日を明日への希望につなげられるような。

尚子が尚子として生まれてきたことを喜べるような。

なにより、将門自身が生きていることを、誇りに思えるような。

「それには、おまえの力が必要だ」

自分の体を尚子の方へ向かせ、将門は尚子に微笑みかけた。

「私の力？」

「ああ。おまえにしか出来ないことだ」

ふいに尚子はがばりと体を起こし、寝具の上で正座したかと思うと、ずっと将門の方へ体の向きをずらした。どうやら、主として将門が命令を下すと思ったようだ。

「何でもする。私で出来ることならば、この命に代えても——
わっ！」

尚子の言葉をさえぎり、将門は再び自分の腕の中に引っ張り込んだ。おのずと、尚子は引き倒されるように寝具に突っ伏す形になる。

「今は寝ろ。そして、早く体を治せ」

「……」

尚子は将門の腕から逃げ出そうと、もぞもぞ動いている。が、そうはさせじと、将門はさらに両腕で尚子の体を背後から抱え込んだ。

「返事」

「……わかった」

「よし」

「わ、わかったから……」

「なんだ？」

見ると尚子は耳を真っ赤に染めながらもじもじしている。

「腕を……離して……」

消え入りそうな声で将門の腕から逃げようと懸命になる尚子。だが、尚子は分かっている。逃げるものを追いかけたくなるのは、何も野生の獣だけの本能ではない。いや、この男も立派な獣ではあるが。

「……尚子」

「な、なに？」

必死に将門の指を一本ずつ解きながら尚子は答えた。

「今、出来ることなら何でもするっていったよな。その言葉、忘れるなよ」

「え？」

「とりあえず、今日はこのまま寝ろ。いいな」

「こ、このまま!？」

「嫌か？」

「嫌だっ!!」

「うわ……即答かよ。傷つくなあ……」

女性に袖にされたことのない将門は、がつくりとなった。その拍子に尚子が腕の檻から抜け出す。すかさず、将門の腕が尚子の腰に絡みつき、引き戻した。今度は向き合って抱き合う形だ。

「ちよっ！ これじゃ寝られないっ！！」

今度ばかりは将門も、尚子の意見に同意した。お互いの息がかかりそうな距離に尚子の美味しそうな唇がある。

（確かにこれは寝られなくなりそうだ……）

このまま流されてしまおうか。そう思ったが、また尚子が病をぶり返して高熱に命を落としても困る。しかたなく将門は腕の力を緩めた。

慌てて尚子はぐると体をねじり、再び将門の腕の中で背を向けた。その拍子に、尚子の白いうなじが、将門の目に飛び込んできた。（………手遅れかもしれん……）

「私」

将門がその尚子の首筋に釘付けになっていると、尚子の声が聞こえた。今にも尚子の首筋にかぶりつきたい衝動と戦っていた将門は、後ろめたさに、思わずどもる。

「な、なんだ？」

「小次郎の力になれる？」

思いもよらない質問に、将門はとっさに言葉を失った。

「私にもできることはある？ この国の力になりたい。小次郎の力になりたい」

将門はその小さな背中から、覚悟のようなものを感じ取った。

自分は、多くの民の命を犠牲にしてきた。多くのものを捨ててきた。

もう帰る国はどこにもない。

自分の生きる場所はここしかない。

この場所で、自分は民のために、国のために——生きていく。そんな覚悟が、華奢な背中から伝わってくる。

将門は、ふっ、と顔を緩ませた。

（まったく……）

時々、将門はこの娘がほんとうに一五だというのが信じられなくなる。将門の知る一五の娘は、もっと感情的で良い意味で愚かだ。

若さゆえの暴走は、時として凝り固まった古い体制を吹き飛ばすほどのつむじ風となる。

だが、この娘はどうだ。何か一つのことを成し遂げようと夢中になっている時、普通、自分が気がつかないうちに視野が狭くなってしまう。それは、十代の若者であればなおさら。自分の目的達成のために、他者のことや、周囲にそれが何をもたらすかまでには考えが及ばないものだ。

だが、この娘は年相応に視野狭窄に陥ったとしても、ここぞという時に必ず、いつきに視野が広がる。盲目に突き進むだけでは何も成せないことを知っているのだろう。自分ひとりの力だけで生きてきたのではない。他者があってこそ今の自分があることを。

（だからこそ、俺の隣にふさわしい）

ただの娘など要らない。

尚子だから。尚子だけが。

自分には必要なのだ。

「おい、聞いているのか？」

尚子はそんな将門の言葉が、どこか遠くの方から聞こえてくるように感じていた。

「だから、言っただろう。おまえにしか出来ないことがある、と」

「……うん」

返事はしたものの、頭の中は幾つかの記憶の断片が忙しく駆け巡っていた。

自分がこの国に来てしまったということが、どういうことを招くのか分からないほど子供ではない。

尚子はそつとあの赤い月夜の出来事に思いをはせた。

自国においてきた皆は元気でいるだろうか。自分をいつも暖かく見守ってくれた人たちは、無事でいるだろうか。

いつかこの国に迎え入れたい。皆でまた笑いあいたい。小次郎はそれを許してくれるだろうか。

（でも皆を呼ぶには、その土台がいる）

まずは自分の土台を確保しなくてはなるまい。この国での自分の居場所を見つけなくては。

小次郎のそばで、ぬくぬくとしているだけでは、いざという時に尚子の大切な人を守ることはできないのだから。

誰からも文句を言わせない、完璧な土台を整え、それを守り、維持出来るまで、彼らを呼び寄せることなど出来ない。

（皆と一緒に生きていくためには……私がしっかりしなくちゃ）

“幸福”な毎日とは、用意されているわけでも、降って湧いてくるわけでもない。誰かに幸せにしてもらえるなんて、そんな甘い夢は描かない。

幸福は誰かに与えられるものではなくて、自分でつかみとる物。

そのためには大きな努力をしなくてはならない。

今の自分には何ができるのだろう。何の力ももたない自分に。上総の豪族、上総介平良兼の娘であることを捨てた自分に。

「……たく」

痺れを切らしたのか、将門がふうと息を吐き出すと、がばりと体を持ち上げ、尚子の上に覆い被さった。将門の奇襲に、考え事をはじめていた尚子はなすすべもなく唇を奪われる。

「なにするっ……んーっ!？」

抗議しようと開いた尚子の口は再び小次郎のそれで塞がれる。あげく、そのまま、少し乱暴に舌を吸われた。

（な、にっ!?)

初めてのことに尚子の頭は真っ白になった。

体を必死によじり、小次郎の体の下から逃れようとした。だが、すぐにたくましい腕に、しっかりと抱きしめられてしまう。

（苦しい！ 息ができない）

脈拍が上がり、余計に酸素を欲する尚子の脳は酸欠で悲鳴をあげていた。だが頭が真っ白になっていくのは、酸欠だからというだけではない。

まるで薬でも盛られたのではないかと思うほど、体から力が抜けていく。

「息をしろ……」

少しだけ口を離し、囁く小次郎。

「っ……」

やめて、と言おうと思ったが、間に合わなかった。再び唇を奪われる。

今度は、優しい口付け。

尚子は胸の奥が、きゅうと熱くなるのを感じた。

小次郎の唇がそっと離れていった時、尚子は不思議な気持ちになった。だがそれが何なのかわからなかった。胸の奥で、何かがほんのり暖かくなったのを感じていた。

「今は、早く元気になることだけを考えろ」

ぼけっと小次郎の顔を眺めていると、小次郎は悪戯を思いついた少年のような顔になった。

「早く寝ないと、このまま襲うぞ」

「なっ！！」

「俺はそれでもかまわないがな」

「ね、寝る寝る！！」

再び顔を近づけてきた小次郎を、慌てて体を横にひねり拒絶する。小次郎は、ふわりと笑い、尚子の頬に唇を軽く寄せると、尚子の隣に横になった。腕を伸ばし尚子を後ろ抱きにする。

小次郎の息が、耳元にかかって、尚子はどきりとなった。

視線を下にむけると、小次郎の腕がしっかりと自分の体に巻きついていて。

（寝られないっ！ こんな寝られるわけないっ！！）

どんどん大きくなる自分の心臓の音が、小次郎に聞こえてしまうような気がした。

「……こ、小次郎、腕を離して……」

返事がない。

しかたないので、首をひねり小次郎の様子を恐る恐る伺う。

「……小次郎？」

鼻の触れそうな位置に、小次郎の顔がある。切れ長の目は閉じられ、長いまつげが見えた。

小次郎が規則正しい寝息を立てていることに気がついたのは、その少し後だった。小次郎の顔に見とれていたことに気づいて、尚子は頬を染めた。

小次郎はこの夜、思いがけず深い眠りをむさぼることになった。

本当に本当に久しぶり————十二年ぶりに、心安らかな睡眠を得たのであった。

・4・昔のツケ

4・昔のツケ

「長い付き合いだ。今後私にできることならば、いくらでも協力しよう。遠慮なく言うがいい」

壮年の男から、将門に向けられた言葉だった。将門は、その男の表情に心が洗われるような爽快感すら覚えた。

「有難い。このご恩は忘れませぬ」

将門は深く頭を下げる。本当に心から頭が下がる思いだった。

「……では御免」

顔を上げ、将門はもう一度だけ男の顔を見る。

たいらのまさき

平真樹。下野の豪族の一人で、源護と所領を隣にする彼は、ことあるごとに源護から嫌がらせを受けている。いつかは真樹の堪忍袋の緒も切れるだろう。そうなれば、圧倒的武力をもって真樹の首と領地を我が物にする。その時を虎視眈々と狙う狸の魂胆が透けて見える。と言うよりも、独創性に欠ける見え見えの手だ。昔から使い古されてきたのだから。そこがまた苛立ちを生む。こんな見え見えの策に引つかかるほど愚かな当主であると思くびられているということか。

将門は真樹がそんな小物でないことを知っているが、近隣の民はそうはいかない。この国の当主は愚鈍だ。そう噂が立てば、農民たちは真樹を見捨てるかもしれない。この時代、農民は立派な戦力。農民に見放されるということは、戦力も財力も低下し、国は滅びへの道を辿るのだ——今の下総のように。だからと言って、挑発にのって応戦すれば、今度は近隣の豪族たちが真樹を侮るだろう。あん

な愚策に乗るとは、と。

つまり耐えるしかないのだ。

ただひたすらに、そんな源護の嫌がらせなど、完全無視をし続ける平真樹に、将門は好感を持たざるを得ない。大らかな人柄も、この男の魅力の一つだ。今も二つ返事で、将門の所領再興に尽力することを約束してくれた。ますます好感度は高まる。ついでに、妻と娘も美人で有名ときた。もはや言うことはない。

(そう言えば……)

ふと将門の海馬に刻まれた、幼い頃の記憶が呼び起こされる。

十数年前、将門の色恋方面の師匠である多治経明と共に、この屋敷に忍び込んで、娘に何度か夜這いしたことがある。平真樹も将門を婿にと考えていたようだ。だが、それもすべて京都に立つ前のこと。もはや過去のことだ。

(あの姫はなんと言ったか……名前も思い出せんが、肌は御影石のように白く吸い付くように、こう……実にいい女だった)

将門は心の中で独りごちた。

「ところで」

立ち上がったとした将門は真樹に呼び止められた。しかたなく座りなおす。

「三姫さんのかみめのことだが」

将門はやはりな、と思った。自分ですら、ふと姫のことを思い出したくらいだ。真樹も昔話の一つや二つはするだろうとは思っていた。

だが、将門の予想は少しずれていた。

「そなた、三姫の婿になるという盟約はどうした？ まさか反故にするつもりではあるまいな」

その真樹の笑顔がなんとも怖い。

「……十年以上も前のことですぞ」

「あの日、姫の部屋に忍び込んだ将門殿を、見逃してやったのは、

将門殿がいずれ婿にと申しておったからだ」

将門は舌打ちしたい気分だった。

見張りは経明に任せてあったから、きっと経明が真樹に何か吹き込んだのだろう。それを、真樹も三姫も真に受け、しかも、ずっと将門の帰郷を待っていたというのだろうか。

（嘘だろう……）

将門もなんとか笑顔を作った。どうしてもひきつってしまうのは不可抗力だ。

「三姫にも良き縁談はいくつもあったのだが。姫が嫌がったのう。昔から知っているだろう？ 私は三姫には昔から弱い。幼くして出来た娘だからかのう。可愛くてしかたないのだ」

「……そうで有りましたね」

将門は真樹から見えないように舌を巻いた。

（思い出になってなかったか……ははは）

いよいよ風向きが悪くなってきた。こうなることなら好立を連れなければよかった。

（いや、だめだ。あいつがこの話を聞いたら、ほれ婿に行け、やれ婿に行けと言うにちがいないっ!!）

今の将門たちには、本来なら同盟国と強力な後ろ盾は喉が出るほど欲しい、ご馳走のようなもの。だが、と将門は思う。

（尚子が……）

せめて尚子に一人でも子供が出来てから。そうでなくては、尚子の立つ瀬がない。

下総において、尚子の地位が磐石なものとなってから。それから側室を設けるといふならば、尚子に対しても言い訳ができよう。尚子だって納得してくれるに違いない。

後ろ盾の全くない、しかも嫡子も産んでいない尚子。片や豪族、平真樹の娘。

どう考えても尚子に勝ち目はない。家臣たちは三姫たちに従い、正妻の座は事実上、三姫のものとなるだろう。それはさすがに不憫

としか言いようがない。避けたいことだし、絶対に避けるべきことだ。

だが、きっと好立あたりは、これ幸いとこの縁談を、あの手この手で押し進めるに違いない。

(まいったなあ……もうちょっと待ってて欲しかったなあ……)

決して悪い話ではないのだ。時期が最悪なだけで。

せめて、尚子を正式に妻としてしてから、一報が好立の耳に入るようにする必要がある。だが、あの地獄耳だ。どこから情報を得てくるか知らないが、明日には好立に知れていると覚悟したほうがいいだろう。

(……帰ったら、夜を待たずに契るか。尚子に子が出来れば、なんにも問題ないんだからな)

尚子の熱も下がったことだし、将門としても願ってもないこと。

(……散々じらした罪は重いぞ、尚子)

脳裏に尚子のあられもない姿が見え隠れする。妄想のなかでもつれない尚子に、将門は胸を弾ませた。勝手に口元が緩む。目じりまで下がり始めたその時。

「……………ずいぶんと嬉しそうだが……そうか！ 姫の婿になることがそんなに嬉しいか！ よかったよかった」

将門の血の気が、さあっと音を立てて引いていった。完全に忘れていた。

(しまった……)

目の前の問題が、何も解決していなかった。どうやってこの場を切り抜けようか。妙案がまったく思い浮かばない。

「はは……はははは……」

将門の空笑いが、静かに響いた。



自分の屋敷に戻った将門を出迎えたのは、いつものように好立だった。今は一番会いたくない相手でもある。

それが顔にでてしまったのだろうか。将門のかすかな緊張をめざとく好立が指摘してくる。

「平真樹殿はなんと？」

将門は勝手に顔の筋肉がこわばるのを感じる。できるだけ平常心を装うが、普段どおりに、と思えば思うほどそれが難しい。

普段自分はどんな顔をして、好立の出迎えに応じていただろうか。思い出せない。

「快くお力添えくださるそうだ」

将門はやっとそれだけ言うと、好立の視線から逃げるように、彼の前を大股で通り過ぎた。

「そうでしたか。一先ずようございました……それで、条件は？」

将門が、ぎくりと体が反応しそうになるのを必死でこらえた。

「条件などない」

「そうですか。何も要求されず、でも、尽力くださると、お約束したださったわけですね」

念を押すように、好立は言った。

「そうだ」

好立に背を向けたまま将門は言うど、歩き始めた。

「それは良うございました」

好立も将門の後を付いてくる。

「先日の犬飼殿に続き、朗報でございますな。これで、なんとかこの一年は越せましょう」

「うむ」

「後は、殿の後ろ盾となる方をお早く見つけてください」
将門の足がピタリととまる。

(……わざと言ってるのか?)

いや、まださすがに知らせは届いていないだろう。
供をした者にはしつかり口止めした。どこから情報漏えいしたと
いうのか。

好立が、遠く離れた真樹の屋敷での密談が聞こえるほどの地獄耳
だ、というのなら話は別だが。

(そこまで地獄耳だったらバケモノだぞ、好立……)

将門は何事もなかったかのように、再び歩き始めた。聞かなかったことにした。

好立はすべてお見通しだった。静かに聞き返す。

「聞こえないふりはお止めください」

「……」

何か隠しているのは分かっている。だが、何かは分からない。

平真樹が無理難題を持ち込んでくるとは思えない。いったいどんな条件を出されたのだろうか。

(まあいい……今は見逃してやろう)

好立はわざとらしくため息をついた。

「それはそれは。早く北の方を、そして世継ぎを、という皆の声が
ちゃんと聞こえているようで、幸いです」

すると、将門はくると体をひねり好立を振り返った。好立は驚
いたが、眉一つ動かさずに足を止める。

「世継ぎと言ったか？」

「……何嬉しそうな顔してるんです？」

好立はぎろりと主人を睨んだ。

今度は何だ。何か企んでいるのは分かるが、何も考えていないよ

うな気もする。単純に娘と懇ろにしていたいだけではないのか。

そんなことを考えていると、将門が好立に向かって人差し指を突きつけてきた。

「だ、か、ら——今から子作りに励む。三日三晩、ひたすら励めば子供の一人や二人できるだろう」

名案だと胸をはる将門に、好立は閉口する。

やっぱり後者であったか。

まったく……いつまでもこの男は少年のように目を輝かせて、女性を語る。いつだったか、どこぞの美姫の夜這いがどうのこうのと経明と作戦会議をしていたときもそうであった。

「三日三晩……籠もる気ですか？」

「ああそうだ！！ 何か文句あるか！？ 三日夜餅でも用意して待つてろ」
みかよのもち

この時代の貴族は、妻となる女性のところへ三晩連続で通う必要がある。一晩ではただの浮気とされ、夫婦とは認められない。そして、三日目の夜に二人で餅を食べる。この餅が三日夜餅である。今という結婚指輪のような存在であろうか。もつとも餅は食べてしまふのだが。

夫になる者はこの餅を一口で噛み切らずに飲み込まなくてはならない。（女性は食べ方自由）

ちなみに、餅のサイズは、三センチほどだと言われている。結構大きい。餅を喉に詰まらせて死んだ新郎もいたのではなからうか。今も昔も男性は大変だ。

「三晩、部屋に通わないで籠もるくせに、餅は食べるのですね……」
「気分だ気分！」

高らかに笑いながら将門は再び娘の部屋に向かって歩き出した。その足取りはどこか弾むように見え、それが好立の顔をさらに引きつらせていた。

尚子の部屋の前につくと将門は好立を振り返った。念を押すように言う。

「いいか、入ってくるなよ！」

「はいはい」

「三日だぞ！」

「はいはい」

「何があってもだ、いいな」

語尾がずいぶん跳ね上がるように聞こえたのは好立の気のせいかな。

「……分かりましたよ。ごゆるりと、どうぞ」

「ばかもの！ ゆっくりしてどうする、励むのだ！」

「……はいはい」

好立の返事も、もはや投げやりだ。背中に羽でも生えているのかと思うほど軽やかな足取りで娘の部屋へ消えていく将門を見届けると、好立はぼそりと呟く。

「まったく、とんだ宝石だ」

好立が四、五歩、娘の部屋から遠ざかった時だった。

「好立ーっ！！」

ばたんと激しい音が空気を揺らした。驚きもせず平然と振り返ると、娘の部屋から飛び出してくる将門の姿があった。

「三日籠もるのではなかったのですか？」

「嫌味を言うなっ！ 尚子をどこへやったっ！！」

「どこにも？」

「何っ！？ ではなぜ、部屋に居ないっ！！」

「さあ？」

「さあっ！？」

「勝手に外に出て行きました。引き止める理由もございませんので、姫様のお心のままに。てっきりもうお戻りかと……」

「何っ！？」

将門は好立に詰め寄った。

「どこへ行ったのだ！」

「存じません」

忌々しそうに将門が自分の唇を噛む。明らかに好立に向けて苛立

ちを露にしている主人に、好立もつい、腹の奥底に閉じ込めていた想いが溢れ出していく。止められない。灰汁のような苦々しさが口の中を侵していくのを感じながら、その苦味はついに言葉として発せられた。

「……そんなにあの娘がいいのですか？」

「何だと？」

好立は冷やややかに将門を見つめた。将門の瞳にかすかな憤りの色が灯る。

「あの娘は百害あって一利なしです。正気とは思えません。なぜあの娘なのですか。他に年頃の娘ならどこにでも——」

「好立」

将門の地鳴りのような低い声为好立の言葉をさえぎった。ゆつくりと口を閉じ、主の目を見つめる。

——なぜ分からない。この俺の意思がなぜ分からない。

そんな強い炎を将門の瞳の中に見て、好立の心底がどくと脈打つ。

自分はどんな危険なことでも、主のためならやる覚悟はある。主が我がままに生きることが好立の望みだ。だが、それは主のやりたい放題を許すことではない。この選択が主にとって良きことならばいくらかでも尽力しよう。

しかし、好立にはこれが破滅への一本道であるようにしか思えないのである。しかもそれは逃げ道のない一本道。

「好立。俺に失望させるな」

「……………」

「尚子はどこだ」

好立は小さくため息をついた。

主はすべてわかっている。それでも、あの娘が欲しいというのだ。ならばあの娘を手に入れて得られる利点を説明してほしい。納得

できる理由を。この自分の命と、この国の民すべての命をかけられるほどの大義名分を。

もし娘にそれにあう価値がない時は――。

（――排除する。どんな手をつかっても、我が主のために――この手で……）

「……姫様の居場所は経明が詳しいでしょう」

・5・牧を統べる者(1)

5 牧を統べる者

(何もない……)

尚子は心の中でつぶやいた。また一つ深いため息がこぼれる。

自分にと用意されたこの部屋は完璧であった。家具も、小道具も、着物も何もかもがそろえられ、尚子が不自由なく日々を送れるようにという配慮がそこかしこから感じられる。日当たりもよい。上総の実家ほどではないにしろ、立派な庭が一望できた。

小次郎が尚子の世話にと付けてくれた女官も、それは才のある人物なのだろう、実に気が利く。今も、付かず離れずとも言おうか、尚子の視界に入らないように部屋の外に控えていてくれる。慣れない尚子自分が自分に気を使うことで、気疲れするのを懸念してのことだろう。それでも、尚子が何か物を探すそぶりでもすれば、すぐさま必要なものを差し出してくれる。

たしか、名はあやめ、といったか。年は二十代後半に見える。普段は切れ長の目元が涼しい印象を与えるが、柔らかい物言いをするのでさほど気にならない。むしろ、知的な線の細い美人と、称した方が近いな、と尚子は思っている。

そう。この部屋は、何一つ不満のなく、完璧だった。

でも、尚子はそれが納得いかない。

(ここでゆっくりくつろいでいる場合ではないんだ)

一人ぬるま湯に浸かり、贅沢な思いをするために、自分はこの国にきたわけではない。

自分ひとりが、迫り来る苦難から逃れるために、自国の民を犠牲にしたわけではない。それなのに。

この、ゆるゆると流れる時間が、つい七日前の赤い月夜の出来事を霞ませる。自分の記憶を白で塗りつぶし、都合のいいように書き換えていく。この緩やかな時が現実で、あの切迫した一日こそが夢だった、と。

（このまま、この部屋でじっとしてはダメだ）

尚子は心の中で強くそう思った。

だけど、どうすればいい。今の自分に何ができるというのだろう。自分には何の力もない。権力も、財力も、武力も。

小次郎は自分にしかできないことがあると言っていたが、それが何なのかまるで見当がつかない。こんな、役立たずに何をさせようというのだろう。

（第一……よくよく考えたら、小次郎はなぜ私を下総へ連れてきたのだろう。何もない私を……何もできない私を）

考えれば考えるほど、自分がちっぽけな存在に思えてくる。

なんて無力なのだろう。

尚子は、そっと自分の手のひらに視線を落とした。

（この手で、多くの者の命を救える気でいた。そう驕っていた。私にも何かできるのではないかと。だから、上総では村々を見回って、田畑を耕して……でもその時に救った命よりも多くの命を私は奪ってこの国へ来たのではないだろうか。父上の権力を笠に、えらそうに民に指示をし、英雄気取りで土をいじって遊んでいただけだったのかもしれない）

それが証拠に、今の自分の手には何一つ残っていないではないか。権威は父のもの。

田畑を耕したのは民たち。

民を救ったのは……父の武力。

（何もない……私には……何もない）

——ゴト……。

尚子の手から離れた扇が、重力に従い床に着地した。が、それに気がつく様子も無く、尚子は床の一転を見つめている。

ほどなく、かすかに尚子の耳に絹擦れの音が届いたような気がした。

「……………良い天気でございますね」

いつのまにか、目の前に女官が姿を現し、尚子の扇を拾ってくれていた。

「空……？」

扇を受け取りながら、尚子は促されるまま部屋の外に目をやった。高い高い青空の上に、真っ白な綿雲が浮かんでいる。

あの空を、飛べたなら。

あの風を感じて、雲を切って——。

『俺の隣で自由に生きろ。おまえらしく、自分の心を偽ることなく』

不意に、尚子はあの赤い月夜のことを思い出した。あの日、小次郎は自分にそう言ったのだ。

もう二度と、自分の心に嘘をつくな。自分の大切にしたいものを偽るな。そうすれば、自ずと、今、自分がとるべく行動が見えてくるはずだ、と。

（私のしたいこと……しなくてはならないこと……）

尚子はぐつと唇をかみ締めた。

自分のとるべき行動。今、したいこと。それは、この部屋で何不自由なく暮らすことではない。

（平良兼の一人娘であるこの私も、焼きが回った。何を迷うことがあるというのだろう）

自分の心は、とうに大きな声で叫んでいるというのに。

あの男の力になりたい。

そして、残してきたみんなの力になりたい。

こんな“完璧”なところで小次郎に守られていても、見えてくるはずがない。自分のすべきことも、居場所も。

「すまぬが、一つ頼まれてほしい」

尚子は空を見上げながら言った。あやめは、返事をするかわりに、尚子に頭を下げる。

「着替えの用意を。馬に乗りたい」

尚子はあやめをまっすぐに見た。あやめも、尚子の真意を伺うように静かに見つめ返す。

「かしこまりました」

あやめは、顔色を変えずに承諾した。内心、姫と呼ばれる身分の者が馬に乗るとはどういうことだろうと、自分の耳を疑ったかもしれない。それでも一切顔にださないところが、やはりこの女官の才だろう。そればかりか、あやめはこう付け足した。

「馬のことならば、多治殿にお伺いするのが宜しいかと思われます」

「多治殿？」

「すぐに牧にご案内するよう、手配しましょう」

あやめは、細い目をさらに細くして笑った。この人は、こんなに柔らかに微笑む人だったのか、と尚子は思った。



女官のあやめの手配で、すぐに牧へと到着することができた。

尚子は、その広大な土地に目を見張る。想像をはるかに超えていた。見渡す限りの牧草地に、数え切れないほどの馬たちが暮らして

いる。

(すごい……)

雄大、という言葉がこれほどしっくりくる光景を見たのも初めてならば、これほど大規模な牧を見たのも初めてだ。牧だと言われねば、馬たちは野生馬ではないかと思ってしまう。坂東にはこれほどの規模の牧は他にないだろう。もちろん、都にだって無いはずだ。

その牧で飼育されている馬たちの走る姿も、馬小屋で飼われている馬が、たまの野駆けで水を得た魚になるのとは比べ物にならない。伸びやかに自然体で生きていっているように見え、その堂々とした姿がまぶしく感じた。

「この牧は、周囲が沼地でね。その沼地が天然の柵になっているから、馬は逃げることはない」

背後からの声に、尚子は勢いよく振り向いた。筋肉質の若い男が尚子にすぐ側に歩み寄ってくるのが見えた。

人の気配に気がつかないほど、自分が馬たちに見惚れていたのだと気づかされる。

「いい牧だろう？」

男は実に誇らしげに言った。

「あなたが……多治経明殿？」

返事のかわりに、経明はにかつと白い歯を見せた。

「女官から話は聞いている。姫さんは馬に乗れるそうだな。勇ましいことで結構、結構。そういう女は嫌いじゃないぞ」

他の者が同じ事を言えば、女のくせに馬などに乗るとは、なんてはしたない、というような嫌味に聞こえそうだが、この男の爽やかさがそれを許さない。むしろ尚子には好感の持てる気安さに感じられた。

「馬を借りたいのだが」

「ああ、それでも選んでくれ。この牧の馬は、どれでも都の帝に献上できる上等な馬ばかりだぞ」

「ならば……乗りやすい馬を選んでください」

「残念ながら姫さん、それは無理だ。選ぶのは俺じゃない」

経明はそれだけ言うのと、ぴゅーと指笛を吹いた。

どういう意味だろうと思う間もなく、馬たちが一斉にこちらを振り返る。経明の姿を確認したのだろう、そのうちの十頭ほどがこちらに走りよってきた。

「このあたりでは、馬具をなるべく付けない。子供のころから俺たちは裸馬を操る練習をするんだ。そのためには、人と馬がより深く信頼しあわなきゃならん」

一頭の馬が、経明に甘えるように頭をこすり付けてくる。その馬に低い声でどうどうと声をかけてやる、彼の目は本当に愛しい我が子を見るような暖かさを含んでいた。

「人が馬を選ぶんじゃない。互いに選び、選ばれる。認め、認められる。そういう関係でなければこいつらには乗れないってわけさ」

「選び、選ばれ、認め、認め合う……」

「そう。人と同じさ」

「同じ……」

「俺は主として小次郎を選び、あいつの全てを認める。小次郎は俺を側近として選び、俺にこの牧の全てを任せた」

ずっと経明の顔から笑顔が消えた。

「俺はあいつにしか仕えない。俺の主君は後にも先にも小次郎だけだ。だから俺は姫さんを認める」

尚子の周囲から、音が引いていくような気がした。あつという間に、自分たちを囲うように集まっている馬たちの、息遣いだけが大きく響いてくる。

「……………認めるが、従うことはない」

尚子は静かにそう言った。

小次郎の命令と尚子の命令とが対立した時は、迷わず小次郎を選ぶ。そういう意味でしょう、今のは？

尚子は問いかけるかわりに、じっと経明を見つめた。

はるか遠くの方で馬が嘶いた。

経明の他にも、尚子を品定めしている者がいる。この男は、あんにそれを自分に伝えようとしてくれているのだろうか。

それとも、それは尚子の願望に偏った憶測だろうか。少なくともこの男だけは自分に敵意を持ってはいないのではないかと。

「まあいい、それより……姫さん、何か特別な香でもつけているのかい？」

思いもよらぬことを問われ、尚子は呆けた顔になってしまった。

「周りを見てみる」

「え？」

言われるままに、尚子は首をひねりぐるとあたりを見回した。

そして――。

「えっ!？」

尚子は目を見開いたまま、息を呑んだ。

(ち、ちかい……)

振り返った尚子の鼻とくつつきそうなほどの距離に、五頭もの馬面が並んで見えた。

尚子は思わず一步足を後退させるが、すぐに馬たちが間合いをつめてしまう。

馬たちは皆、大きな鼻をヒクヒクさせて、まるで尚子がまとう香を嗅ぐようなしぐさに見えた。敵意を持って尚子に近づいたというわけではなさそうだ。

(な、何……私、もしかして臭いのか!? いや、昨日はちゃんと湯浴^{ゆあ}みして汗は流したが……)

「姫さんからよほど気になる匂いがするみたいだなあ。こんな馬たちの姿は初めてみる」

経明は腕を組んでしたり顔を決め込み、尚子に助け船を出す気はさらさらな様子。

(何、どうしろというの!)

さらに、じりじりと間合いをつめてくる馬たちに、尚子は思わず声を高めた。

「ちょ、ちょっと待っ……下がれ！」

尚子の澄んだ声が秋の高い空に抜けた。

と、どうだろう。五頭の馬たちは、驚いたことに、前進をやめ、いっせいに後退し、尚子から人ひとり分離れた形になった。

(ど……ういう……こと?)

わけがわからず呆然と立ち尽くす尚子。

「な……なんだ……何がおきた？」

始終を尚子の横で目撃していた経明も、目を何度もしばたたかせている。それもそのばす。

(……馬が私の命令を……聞いた……?)

そんなことはあり得ない。あり得ないのに、今この状況を説明できる言葉が他に思い浮かばない。そればかりか、尚子には目の前の馬たちが、次の命令を今か今かと待ちわびているようにすら、見える。

なぜ?

どうということ?

返事の期待できない問いだけが、尚子の脳内を高速回転していて、目が回りそうになってきた。

「尚子！」

尚子は、はっと我に返る。

「こ、小次郎……」

屋敷から馬でかけてきたのだろうか、息をきらした小次郎が姿をあらわした。

「どうした二人とも。顔が真っ青だぞ？」

尚子は経明と顔を見合わせる。

経明は無言のまま尚子を見つめ返した。その表情は、先ほどの出来事が見間違いや勘違いなどではないことを物語っているように尚子には思えた。

「まさか、怪我でもしたのかっ？」

沈黙したままの上に表情の堅い二人に、将門が事故でもあったのかと、想像を巡らせたようだ。慌て尚子は首を横にふる。

「私が馬に驚いて悲鳴をあげたら多治殿が駆けつけてくれたんだ……」

尚子はさらりとそう言うと、経明の表情を盗み見る。経明は静かに、尚子から目を反らした。経明もさっきのことを小次郎に話すつもりはないようだ。

（説明できるわけがない……）

尚子は小次郎に促されるまま、小次郎の乗ってきた馬にまたがる。小次郎が馬の腹をけた。馬が嘶き、走り出す。

尚子はちらりと背後を振り返った。

先ほどの馬たちは何事もなかったように解散していて、もうそこには尚子をじっと見つめる経明の姿しかなかった。

・5・牧を統べる者(2)

将門は、屋敷から走らせて馬にまたがり、帰路についていた。背後には尚子の穏やかな息づかいを感じる。

ぽこん、ぽこん、と馬が地面と蹄とで奏でる音とは、なんとも心地よいものだ。落ち着く。

尚子を探して駆けてきた往路とはずいぶん違いだなと、思わず将門は嘲笑を漏らしたが、その心地よさが馬の蹄の音からくるものではないことに本人は気づいていなかった。

(それにしても――)

将門は怪訝そうに眉を詰めた。先ほどから尚子が口を開こうとしないのだ。

彼は神経を九割がた自分の背後に集中させたが、よくわからなかったので、首をわずかに動かして、なんとか横目で背後を盗み見ることに成功する。すると、尚子は難しい顔でどこか一点を見つめたまま、心ここにあらずという様子。何かを深く考え込んでいるのは明らかだ。何かあったのだろうか。

(まさか……)

さっと将門の顔が曇った。もしや、経明が何か言ったのでは、と思ったのだ。だが、それも一瞬のことで、すぐにその考えを打ち消す。

経明はきつと何も語っていないだろう。助言も苦言もしないはずだ。あの男は、この手のことには口を出さず、むしろ面白がつて傍観する性質だ。それは長い付き合いである将門が誰よりも良く知るところである。好立ならいざしらず、経明が尚子にちよっかいを出してくるとすれば、女性としての魅力を感じ、口説き落とす価値を見出した時だけだろう。将門がそうであるように。

(まあ、好立にはきつく、しかも直接的に言われただろうが。あの男は、我が一族至上主義だからなあ……)

それでも尚子ならば、心をへし折られることなく、自らの力で大輪の華を咲かすことができるだろう。その将門の思いは、もはや確信と呼べるものだった。

だが、と将門は再び緩んだ顔を引き締める。

経明は尚子をどのように扱うだろうか。正々堂々と戦えるだけの情報を与えるくらいは、甘やかすだろうか。それとも、いつさいの手出しをすることなく、我関せずを通すだろうか。

どちらにしても、邪険にしたり、妨害したり、排除するようなことはしないだろうが。

（経明は本当に面倒くさがりだからなあ……）

おそらく、経明が尚子を過度に甘やかすことは、皆無となるだろう。その上、尚子の身の危険や、降りかかる苦難を想定できても、言わないことがあるかもしれない。なぜなら、将門に対しても、経明は過保護になることはないからだ。

この自分ですら考え得るくらいの危機を回避できない者には従えない。命を預けることなどできない。そう経明は将門に明確に示してくる。言葉ではない。全身で、だ。

今までに何度となく、彼のその鋭い視線で、自分の心の臓を射抜かれたような感覚に襲われていた。

“俺の主であり続けたいならば、それだけの力を示し続けろ。俺はいつだってお前を見限り、他に寝返る。忘れるなよ”——と。

それでいい。そんな時、将門はそう思う。

厳しい顔で自分を監視し続ける経明の存在は、なんとも言えない緊張感を生み出した。

かつては、彼に恐怖心さえ抱いたこともある。全てを見透かされそうで。それに、好立の嫌味よりずっと堪えた。

だが、何より経明が側にいる間は、自分は、まだ大丈夫だ——まだ、“人”であると思えた。

今にして思えば、自分が自分で無くなり、権力という野心の闇の中に落ちていく恐怖と戦い続けてきた将門にとって、経明の存在は最後の命綱であったのかもしれない。

(それにしても……)

いっこうに表情が晴れそうにない尚子に、ついに将門は言葉を投げかけた。

「良き馬には出会えたか？」

「え？」

まるで自分がぼんやりと考え事をしていたこと自体に、気がついていなかったように尚子が声を上げた。

「経明と馬を選んでいたのではないのか？」

将門は前方を見据えたまま、背中の神経を尖らせる。

「経明は——……」

どこまで話したのだ？ という言葉が喉元まで顔をのぞかせたが、必死に飲み込んだ。すると、言い様のない苦みが口いっぱいに広がった気がした。

経明がどれだけ尚子を甘やかしたか、それを聞いてどうしようというのか。自分こそ、経明に甘えようとしているではないか。尚子は自力でもがいて道を開こうとしているというのに。

(……尚子のこととなると、俺もなかなか過保護になるようだな) 今までの女性関係ではありえないことだ。そう自覚し、将門はうつすらと笑みを浮かべた。

「この馬は馬具を付けているんだな」

「馬具？」

将門は、予想だにしていなかった問いかけに、不思議そうな表情を浮かべた。そして、首をひねり、尚子を振り返える。

「この国では裸馬にのると……」

尚子の声は、尻つぼみになっていった。

「ああ、経明に聞いたのか？」

「馬に選ばれる者だけが、乗れるのだと多治殿が言っていたが……」

なるほど。なんだそんなことを考えていたのかと、将門はそっと胸をなでおろした。

この国で生まれ育った将門にとっては、裸馬にまたがることは日常であるが、尚子にとっては驚くべき事だったのだろう。

「確かに、我が国では裸馬に乗る。父上の教えだ」

「良将叔父上の？」

「父上が以前、陸奥鎮守府將軍であつた時だ。多くの蝦夷たちを目にしたという。まあ、蝦夷はかの征夷大將軍によって滅ぼされたとはいえ、まだまだ残党は多く、その反乱も多くあつたから、当然といえば当然かもしれないが。その蝦夷たちは、馬たちに馬具をつけず、馬にまたがったまま戦いを挑んできたそうだ」

「蝦夷……？」

「なんだ、蝦夷を知らんのか？」

将門が、にやりと笑った。その顔に尚子が顔を引きつらせる。

「知りたいか？」

「な、なに？」

「知りたいんだろう？ 馬に興味があるんだろう？ 裸馬に自分も乗ってみたいのだろう？ 何しろ、蝦夷は女子供も馬に乗る戦闘民俗だからな」

うっ、と尚子は小さく唸った。

その姿に目を細めながら、将門はふと考えた。そもそも、尚子はなぜ牧へ向かったのだろう。何を思い、何を決意し、何を得るために、あの牧へたどり着いたのだろう、と。

「いいだろう。馬のことも、蝦夷のことも、お前が知りたいことは何でも教えてやる。だが、一つだけ約束してくれ」

「……………な、なんだ」

尚子が、心底嫌そうな顔をした。きつと、自分に相当不都合な条件を出されると思ったのだろう。今日一晩、夜伽の相手をせよ、とか。いや、もちろんそれはそれで申し出るつもりではあるのだが。

「尚子」

ずっと将門の顔に笑顔が戻る。

「どこへ行ってもかまわぬ。お前を屋敷に押し込めようとは思わないよ。でも、約束してくれ」

「何を？」

「決して一人では出かけないこと」

尚子の顔が、はっとなった。

「ここは俺の国ではあるが、まだまだ俺も把握しきれていない。屋敷の近くならば良いが、盗賊が出ないとも限らない。お前に従者をつけるから、次からは必ず、その者とともに行動するようにしてくれ」

将門が言い聞かせるうちに、尚子の顔は見る見るうちに叱られた子犬のようになっていった。それがまた、将門には愛らしく映る。もっと彼女のさまざまな表情を見たいという衝動に駆られるのは、何故だろうか。

「わかったか？」

将門が尚子の頭に、ぼんと手を置くと、尚子は上目遣いになった。そして、しぶしぶという表情で返事をする。

なんだか叱られた子犬を見ているような気分になってくるなあ、と将門は内心、舌を巻いた。

「……はい」

「わかればいい。それに、その格好も俺は好きだぞ」

そう言って将門が尚子に笑いかけたので、尚子が瞬時に頬を染める。尚子の姿は、いわゆる男装で、長い黒髪を一つに縛り上げているため、“深窓の姫”からはほど遠い。これでは、どこから見ても元服前の小童である。

「……その、馬に乗るには……この方が都合がいいから」

「そうだな。さっきも言ったが、その姿のお前も、好、き、だ」

わざとらしく、語尾を強めて言うのと、尚子がそれに再び反応するように真っ赤な顔で口をへの字に結んだ。

「な、何度も言うな!!」

「好きなものを好きと言って何がわるい」

「わかったからっ!! もう、前を向け!」

「そうか? 本当に分かったのか? 伝わっていないと思うがなあ、俺のこの気持ちは。うむ、そうだ、いい事を思いついたぞ!」

「……いいこと?」

疑心に満ちた尚子の目が、ぎろりと将門に突き刺さった。が、将門は気にしない。

「これから、俺がどれだけお前のことを思っているか、とくと語ってくれよう!! そうだ、それがいい!!」

「はっ!?!」

「三日間だ、三日間!! たっぷり、しっかり、どっぷり、分からせてやるから覚悟しろよ。わっはっはっはっは」

将門の高らかな笑い声が青空に抜けた時、屋敷の生垣が二人の前に姿を現した。

不意に尚子の顔が曇る。将門はそれに気が付かず、満面の笑みで馬を進める。

この時、将門はもう一度、考えを巡らせるべきであった。尚子なぜ馬を欲しがったのかについて。

屋敷の入り口に到着し、馬番が二人を出迎えた。

将門は、ひょいと馬から下りる。爽やかな笑顔で尚子を振り返り、手を差し出した。

尚子の手がそろりそろり、将門の手を取ろうと伸びてくる――が、寸前のところで、止まってしまう。

「どうした?」

「……すまぬ、今日だけは見逃してくれ」

何のことだ、と聞き返そうと思った瞬間だった。

尚子が手綱を奪う。そして、馬を翻す。馬が激しく嘶いた。

「さがれ!」

とっさの判断で将門が馬番に指示を飛ばす。

将門も馬番も、間一髪で馬から離れた。下手をしたら馬の前足の

強打を受けたかもしれない。

馬上の尚子の顔にも、二人を氣遣うような表情が見えたが、尚子はそのまま馬を巧みに操り、将門に背を向けた。そして、全速力で駆けだす。視線だけは、将門を追うようにしたままで。

「どこへ行く気だっ、おいっ!!」

「夕方までには戻る!!」

将門は、遠ざかっていく尚子の黒々とした瞳を、食い入るように見詰めた。

——逃げるわけじゃない。戦うために必要なことだから。だから、行かせて。

尚子の瞳から、そんな強い意志を感じ取った。だから、将門は、喉まで出かかった制止の言葉を、ぐっと堪えた。

それでも、行き場のない感情が出口を求め、体の中で暴れているのがわかる。

危ないから、行くな。

俺の目の届くところにいろ。

それと同時に、この思いが尚子から笑顔を奪うものであることも分かっている。

だからこそ、胸の奥が熱く激しく煮えたぎる。将門には馴染みのない感情で、ますますそれが彼を戸惑いの渦へと導いていく。

これが、人を思いやるということだと、言われてしまえばそれまでだが。だが、頭で理解できても、それを飲み込めるのかどうか、とは別問題である。

「よろしいのですか？」

振り返ると、いつから見ていたのか、好立の姿があった。

「好立か……」

「あのまま実家に逃げかえるなんて都合のいいことはもう望みませんよ、私も。むしろ、良兼殿が姫を返せと言ってきた時に、もう——」

「好立」

たった一言で、将門は好立の言葉を遮った。さすがの好立も言いすぎたと思ったのか、その表情自体も何か別の思惑があつてのことなのか将門には判断が付かなかったが、目を伏せ静かに謝罪の意を示したのは見てとれた。だから、それ以上将門は、追及しない。

好立が何を言いたかつたのかはわかる。もし、今後、上総の良兼が、娘の尚子を返せと言つてきた場合、尚子を遺体で返すつもりか。そんなところだろう。

娘を口実に、理不尽な要求を吹っかけてきたり、最悪、戦を吹っかけて来た場合、尚子を突き返すという選択肢もある。その時に、こちらの本位でなくとも、尚子が死んでしまつていては良兼にいい口実を与えてしまう。だから、大切な人質として、好立は丁重に扱うつもりはある、ということを案に言っているのだろう。

こはるまる
「小春丸」

将門は、馬番に向き直った。

「はっ」

それまで、二人のやり取りを静かに見守っていた若い馬番は、将門の意思をその表情から読み取り、深く頷いた。そして、馬小屋に駆け入り、ひらりと馬にまたがると、尚子の姿が消えた方へと馬を走らせた。

その姿を見送りながら、将門は口端をかすかに上げる。

「じゃじゃ馬は、風を切って走っている姿が一番美しいものだ。まあ、もともと屋敷に閉じ込めて置けるとは思っていないがな」

「乗りこなせる自信はお有りで？」

「乗りこなす？ 乗りこなすためにあの娘を連れてきたのではないぞ」

将門は、声を上げ短く笑うと、好立に不適な笑みを向けた。自信に満ちた、好立の大好きな表情だった。

「共に駆けるために、連れてきたのだ」

——お前や経明のように……。

ぽん、と好立の肩を軽く叩くと、将門は屋敷に戻っていった。一切の表情を変えることなく、好立もその後を追うのだった。一

・6・宝の山(1)

6 宝の山

どうしても気になることがあった。

尚子は再び牧へと馬を走らせる。だが、牧にはすでに多治経明の姿がない。馬でどこかに駆けていってしまったのだろうか。

(……あれはいいたい)

先ほどの、尚子の持ち合わせている常識では説明できない出来事を、彼とならば共有できると思っただけに、尚子の落胆は大きい。

悠然と牧を駆ける馬たちを、しばしの間、目で追いかけてはいたが、待っていても経明が現れることがないようなので、仕方なしに再び馬を進めた。

そうだ。最初の目的は、牧を眺めることでも、馬に見惚れることでもない。

自分は自分のできることをする。そのためにここへ来たのだった。それを忘れるところであった。

尚子はそつと心の中で舌を出し、小さく息を吐く。しっかりせねば。ここに、尚子を叱りつけてくれる老女官も、尚子の手足となつて走り回ってくれる従者もないのだから。

自分の身は自分で守る。

そして、自分の場所は自分で見つける。

尚子は静かに、胸元に手を当てた。着物の上から、堅い金属の感触が伝わる。母の形見である小刀だった。母はまたその母にもらったというから、いつも肌身離さず持つようにしていた。だから、着の身着のまま小次郎と逃げてきた尚子でも、これだけは上総から持ってくることもできたのだ。

(母上……どうか、お力を)

心の中で深く祈る。目を閉じ、息を整えた。再び瞼が開かれ、その大きな眼が輝きを増したかと思うと、尚子は澄んだ声で言った。

「行こう」

馬は軽やかな足取りで、牧を後にした。



尚子が思っていたよりも、状況は悪かった。

正直なところ、上総よりずっとひどい。他の国と比べようにも、上総の父の領地から外へ出たことがないので、狭く浅い見でしかないが、それでも十分だった。自分たち、いや、この領地の主、平小次郎将門が今置かれた状況の悲惨さに驚きを禁じえない。

沼地に囲まれた高台の牧は、確かに沼地が自然の柵と化し、馬たちは逃げることなくその牧で生き生きと暮らしている。立派な、誇れるものだ。

だが、その沼地は牧だけを囲むものではない。むしろ、このあたり一帯、ほとんどが沼地と言えよう。

川から染み出した水が土地をぬかるませ、耕地としては使い物にならない。多くの植物は、根ぐさを起こしたのだろう、不毛地帯と化している。それに、これほどの低地では、人も暮らせない。大雨や雪解け水で川が増水すれば、人家は濁流にのまれるだろう。

沼の向こうには、雑木が立ち並ぶ深い森に、その奥へ続く高い山が見えた。そっちの方は高台になってはいるものの、未開の地だ。開拓しなくてはならないだろう。

何より不思議だったのは、いくら馬を走らせても、村はおろか、集落と呼べるものすら見当たらないことだ。

この国の民はいったいどこへ行ってしまったというのだろう。驚愕とも焦燥ともつかない気持ちのまま、尚子は馬を走らせた。どのくらいたっただろう。やっと村らしい集落が見えてきて、尚子はほっとした。だが、ずいぶんと屋敷から離れている。一抹の不安を感じながらも、その集落へと足を進めた。

「邪魔をするぞ」

馬上の尚子を不審な目で見上げながら、民たちは尚子が集落の中に足を踏み入れることを黙認した。尚子は決して笑顔を崩さなかった。

同じような経験を、すでに上総でしていた。今でこそ心を通わせていた上総の村人たちではあったが、最初はこの集落の者と同じような反応をしていたのだ。だから、尚子は驚かなかったし、話せばわかりあえると信じて疑わない。例えどんな国の者であっても。

だから、尚子は爽やかな笑みをたたえ、ふわりと馬を下りると、農作業をする一組の夫婦へと近づいていった。

「このあたりの村はここだけなのか？」

尚子は問う。すると、村人たちが尚子からずっと視線をそらし、農作業を続けだした。答える気がないらしい。めげずに尚子は言う。「今年の収穫はどうだ？」

「あんたは誰だ？」

返ってきた声は背後からだった。反射的に尚子が体をひねる。声の主は、浅黒い顔の女性だった。高齢のせいか、腰がひどく曲がっていて、右手には杖らしき木の棒が握られている。尚子は、一瞬、祖国のかの村の老婆を連想した。姿かたちが似ているというわけではない。気迫が、いや、気高さが、というべきか。

「常陸か、それとも上総か」
ひたち かずさ

言葉が出てこない尚子に、再び老婆が問う。その質問に、何か胸がざわめき、それがきっかけとなり尚子の頭が再び回りだす。

「……下総の、平将門の屋敷からきた」

どうして、ここに常陸や上総が出てくるのだろうか。ここは下総

の、小次郎の領地だ。怪訝そうにかすかに顔をしかめながら、尚子は老婆の返事を待った。

「ふん。あのろくでなしの小僧のところか。何用だ。ここには、これっぽっちの米粒ものこっちゃいないよ」

「ちがう、税を取りにきたわけではない！」

尚子はあわてて否定した。

この時代、税金は米だ。米を領主に収め、その領主は代わりに他の者からの侵略から守ってやる、という構図になってる。表向きは、国の法律により、開拓した土地は自分のものにしてもいい、という事になっていた。これが日本史上でも悪法名高い、墾田永年私財法さいほうというものだ。それまで土地はすべて国のものであったが、この法により、開拓地は国の土地ではなく私有地とされて開拓者のものとなった。

土地の権力者である有力豪族はこぞって開拓を始める。もちろん農民たちも、自分の土地を守り拓くことに躍起になった。だが、豪族同士の争いや盗賊による略奪の絶えない坂東の地では、農民たちは自分の土地を守る手段がない。そこで、弱者である農民たちは、土地の有力者である豪族へ、土地を寄進した。豪族に、土地と自分の命を守ってもらい、安心して農作業をするために、だ。そのために、農作物の一部を護衛賃金として支払う、そのようなものだと考えてほしい。

が、その結果、寄進した豪族によっては、国の取り立てよりもはるかに厳しい重税が農民たちの肩にのしかかることになる。

もちろん、将門も、尚子の父である良兼も、そして、源護一族もこの有力豪族にあたる。農民たちを守る義務があり、農民たちは税を豪族に収める義務があり、その代価として税を徴収していた。…はずである。

「ならば、何をしに来たのだ」

「私は先日この国に来たばかりで、このあたりのことが全く分からない。だから教えてもらいたくて来たんだ」

「なんだ、旅人だったのか」

老婆は勝手に誤解し、表情を和らげた。訂正しようか、どうしようかと迷ったが、取り合えず話をしてくれそうな雰囲気になったので、あえて口をはさまなかった。

「ここから奥にも集落はいくつかあったが、みんな行ってしまったよ」

「行ってしまったって、どこに？」

「常陸のなんとかっていうお偉い方のところさ。先日、このあたりにお使者が来てね、そのお方の所領へ来いと誘いに来たのさ。米と土地をタダでくれるとあって、皆喜んでいっちゃったよ。この集落も、見ての通り。わしら家族しか残っておらん」

「常陸……源護か？」

尚子はぐつと唇をかんだ。強く噛みすぎたのか、血の鉄くさい味が口に広がる。

「そんな名前だったか。忘れたわい」

（あんの狸じいっ!!）

尚子は、あの源護ならばやりそうだ、と思った。

「タダで土地と米を貸してくれるといったのか？」

「ああ、言った。ただでさえ、このあたりは痩せた土地だ。今年はあまり収穫がよくなかったらか、なおのことさ。皆、飛びついた」米を貸して、その二倍から三倍の米を翌年の収穫時に徴収する。

そんな高利貸しのようなことも、豪族はしていた。もちろん、父である良兼も二倍の利息で貸出していたから、それを利息なしで貸すということがどれほど破格なことなのか、よくわかる。

「どうして、そなたは行かなかったのだ？」

「はっ！ タダだなんてあるわけがなからう。収穫の頃には、なんだかんだと上手いこと言って、がっぽりふんだくっていくに決まっている」

「……そうなのか？」

「ああ、土地代だとか、水代だとか、なんだかんだとな。わしには

常陸に妹がいて、その汚いやり方を聞いていたのよ。だから、皆を止めた、必死に止めたさ！　だが、聞く耳をもつ者はおらんかった」
「そうだったのか……」

「今に、痛い目にあって、ぼろぼろになって逃げかえってくるに違いない。わしはそう踏んでいる」

ふん、と老婆は鼻を鳴らした。そうなたら、自分が正しかったと皆に頭を下げさせるんだ、と息巻いている。だが、尚子はそんな老婆に苦々しい笑顔しか向けられなかった。

老婆に感謝の意を伝え、他の村のあった場所を聞いてから、再び馬にまたがった。

確かにいくつか、村の跡地と放棄された農地を見つけた。

これは大変なことになっているなんてものではない。完全に、沈没しかけている。沈みかけた船からは、鼠も逃げると言うが、虫すらもどこかへ引っ越してしまったのでなかうかと思うほど静かだ。尚子は半ば呆然としながら馬を走らせ続けた。どこにも希望のかげらを見つけることが出来ぬまま、気がつけば山に隠れ始めた太陽のせいであたりが暗く冷たくなっていた。しかし、尚子の顔は時間を追うごとに影っていき、屋敷に戻ったころには、尚子から笑顔はすっかり消えていた。



夕刻。

将門のところへ知らせが入るや否や、将門は尚子の部屋へと急いだ。その手前の渡り廊下で、両手いっぱい書物を抱えた女官のあやめと鉢合わせする。書庫から尚子の部屋へ運ぶ途中であったようだ。

「それは？」

「昨年までの米の収穫量を記した帳簿、それに川の水害の記録、それから……」

「尚子が？」

将門は眉をひそめた。いったい何を始めたのだろうか、突然。

「好立の許可は取ったのか？」

書庫や帳簿の管理は、好立の管轄である。勝手に持ち出せば、好立がまた拗ねるに違いない。それに、好立が素直に尚子へ情報提供するだろうか、とも思う。

しかし、事は将門の思惑とは少し違っていた。

「はい。事前に、どんなことでも姫の好きなように、と指示を受けております。それに、かの文屋殿とて、姫に見られて困るような物などありませんまい」

にこりともせず、淡々とあやめは言っていた。いつもこの女官は、感情が読めない。もう少し笑えばいいのに、と思わないでもないが、特に業務し支障があるわけでもないし、そんなことを理由に彼女を嫌ったり、手放すほど将門も馬鹿ではない。彼女は女性にしておくのがもったいないくらい、有能だ。

「それに――」

あやめが、言うべきかどうか迷っているといったそぶりを、かすかに見せた。将門はすかさず、言葉を促す。

「それに何だ？」

「恐れながら、文屋殿は姫の力を試すおつもりであられると推察いたします」

「ほう――それで？」

将門は、口端をかすかに上げ、あやめ続けさせる。

「文屋殿ほどのお方ならば、姫様に十分な情報を提供し、正々堂々の勝負を臨まれるかと——申し訳ございません、言葉が過ぎました」
静かに頭を下げる女官を、将門は軽快に笑い飛ばした。

「はっはっは。良い、良い。しかし、お前がそれほど好立を買っているとは思わなかったぞ」

からかうように、にやりと笑いかけたが、女官は眉ひとつ動かす様子もない。

実は、好立とこの女官ほど、似合いの者はいないのではないかと思いはじめていたのだが、何しろ二人ともに、まったく異性に興味を持っている様子がないので困る。無理やりにでも既成事実を作らせてしまおうかとも考えたが、好立をその気にさせることは、この国を日の本一の国にするより難しいに違いない。

「姫様」

あやめが部屋の中に声をかける。気もそぞろな返事がきたので、あやめと共に将門も、物音を立てまいと、部屋の中へ入り込む。部屋の内部には御簾が降ろされ、御簾越しに見える几帳に人影が写っていた。

「少しお待ちください」

あやめの囁きに従い、御簾の中へとはいっていくあやめを見送った。しばらくして、将門の存在を知らない尚子が話し始めた。

「そこに置いてくれ」

「かしこまりました」

「このあたりの川の水害は、本当にひどいものなんだな。だから、この国の民たちはみんな沼や川を離れ、高台に住んでいた。でもそうすると、田畑に水を引くのが大変なはずだ。あまり農耕が盛んではなかったんだろうか」

「……私にはわかりかねます」

「どこか交易があったのだろうか。それには名産が必要だ。何かこの国の名産があるのか？」

「……とくには……」

「そうか。では、やはりあの牧が何か重要な役割を果たしている
しか考えられない。つまり、名産は、馬ではないだろうか。軍馬だ。
あれだけの数の馬を保有していれば、都にいくらか献上しても、十
分お釣りがくる。献上品ほどではなくても、良い軍馬ならば、坂東
の豪族も喉から手が出るほど欲しいはずだ」

「姫様……」

あやめが何とか将門の来訪を伝えようとしているのが、将門には
痛いほどわかった。だが、尚子がそれを許さない。次から次へと湧
き出る疑問に、自ら抑えようのない探究心をもてあましているよう
だ。

「……………」

なぜか、将門は声をかける気にならなかった。

彼女の笑顔を見にきたというのに。やっと二人で話ができと思
ったのに。それでも、尚子の邪魔したくない、そう思ったのだ。だ
から、極力息を殺し、自分の鼓動さえも聞こえないようにと細心の
注意を払って、将門は尚子の部屋をでた。

外に出ると、冷たい風が将門の頬を撫ぜて行った。だいぶ冬が近
づいてきている。この冬を越せるだろうか。やらねばならないこと
は、山ほどある。

少し気の緩んでいた自分に、将門は気付かされた。

・6・宝の山(2)



二日後。朝から尚子は気合が入っていた。

将門は朝餉を食べ終わるや否や、尚子の襲撃にあった。予告なく、女官たちの制止も聞かず、部屋に飛び込んできたのである。

それを平然と見やりながら、将門は思う。乱入するのならば、夜にしてくれればいいものを、と。まあ、昼間でも誰に何を気にすることもないと言えはないのだから。

「つまり、仕事与えたらどうだろうかと思う！」

尚子は目を爛々と輝かせ、そう言った。

どうやら、自分を口説きに來たのでも、襲いにきたのでもないのだと再確認し、将門に明らかに落胆の色が濃くなる。

「朝からなんだ？」

「だから！！ 昨日一日ずっと考えていたんだ！」

「俺のことを？」

「違う！ この国のことだ！」

からかうような口調の将門に、いらだちを露わにした尚子は、ぐつと将門の襟元をつかんで、詰め寄った。

「……言ってみただけだ」

降参、降参、という様に、将門は両手を軽くあげる。それを見て、尚子はしぶしぶ手を離れた。

「順を追って話してみろ」

観念して、将門は尚子に向き直った。

（さて、二晩も俺をほったらかしにして、いったい何を考えていたのか説明してもらおうか）

心の中で、そうつぶやくと、自然に口端がにやりと上がった。

「つまり、この国に足りないのは人手だ。人手が欲しいが、食べ物もない」

「ないな。今、この国の倉庫はすっからかんだ」

「それでは民はこの国では生きていけない」

「現に、皆逃げだした」

その通りだ、という様に尚子は頷いた。

「だが、金^{きん}があればどうだろう」

「金？」

「つまり、食べ物は金で買える。行商を呼べばいい。その行商から食べ物を買って付けるんだ。そうすれば民は飢えることない」

「だが、金はどうやって手にいれる？」

「そこだ」

その言葉を待っていた、と尚子の瞳が輝きを増す。

「この屋敷が金を出す。もちろん、金だけを配るということではない。労働の代償として、金を支払うんだ」

「労働？」

「まず、堤を作る。川の水が少ない冬のうちに、民に堤をつくらせ、その労働の対価として金を払う。それから、春になったら農具を作らせる。先日、出向いた集落では、木製農具を使っていた。上総では鉄具を使う。その方が効率がいい」

将門は、思わず顔がほころんでいく自分に気が付いていた。だが、どうすることもできない。にやにやと、表情がたるんでいくのを止められない。それほどに、この場に好立がないことを、心の底から残念に思った。

「では、金はどうやって調達する？」

期待を込めて、将門は問う。

「馬だ！」

尚子は声を張り上げ、将門に詰め寄ってきた。黒々とした大きな二つの目が、まるで小さな太陽であるかのように輝いている。将門は、まぶしさに目を細めた。

（見ろ、好立。これが、俺の連れてきた女だ。お前と同じ答えに、たった二日でたどり着いたぞ）

将門の胸は、まるで幼子のように踊り高ぶっていた。

「では、金はどうやって調達する？」

含みのある笑いを浮かべる小次郎に、尚子は懇親の意を込めて言い放った。

「馬だ！」

どうだ、と胸を張りたい気持ちでいっぱいになった。

あんな宝石の山を持っているだけではもったいない。あれこそ、民のために使うべきなんだ！

「牧の馬を売る。あの馬たちは軍馬として高値で売れる。軍馬を欲しがるものなら、いくらでもいる」

一息で言いきると尚子は自信に満ちた顔をした。そして、静かに将門の言葉を待つ。

開け放たれた格子窓から、秋の終わりを告げる冷たい風が部屋を駆けぬけていった。

「そのようなこと、殿が考え付かないとも思っているのですか？」

尚子は声の方を反射的に見上げた。いつからそこにいたのか、好立が几帳の影に立っていた。

急に部屋の中が暗くなる。雲がかかったのは、空の太陽だけではなかった。

（やっぱり……）

今の彼の一言で、確かに自分の考えが正しかったと証明されたわ

けだが、先ほどの高揚感は完全に沈下し、鉛のようにならずしりと重たくなった心が序所に床にめり込んでいく感覚にとらわれる。

自分が二晩考えただけで思いつく案など、小次郎たちが気がつかないわけがない。そうは思っていた。でも、少しは期待していた、いやかなりだったのかもしれない。

自分が思っているよりずっと、よくやった、と認めてもらいたかったのだ。小次郎に、そして何より、この仏頂面の男に。

「なんだ、好立。いつからそこに居たんだ」

「失礼。お声が大きかったもので」

そう言うと、好立が尚子と小次郎に頭を下げる。

「姫は、行商を呼ぶとおっしゃっておられたが、どこの国から招くのですか？ また、軍馬を売るとなると、その国の勢力も左右しかねない軍事力強化につながりますし、やみくもに売るわけにも参りません。さらに、鉄具ですか。ごもつともですが、その鉄はどこから仕入れるのです？」

「……………」

氷の刃のような好立の言葉は、尚子の胸に深く突き刺さり、反論するための言葉を奪う。

「好立」

「事実を申したまでです」

「尚子はこの国に来てまだ日が浅い。大目に見ろ」

「いいえ。良く知りもせずに、口にすることが問題なのです。仮にも殿の妻として屋敷にいる以上、姫の言葉は殿の言葉として捉えられます。姫がまだこの国について勉強不足である、とか、姫一人の見解である、など、下々の者には関係のないこと。その自覚がお有りか？」

ぎろりと睨みつける好立の冷たい視線に、尚子の背筋が足先の先から凍りついていく。勝手に手が小さく震えた。この男に負けた悔しさでも、恐怖でもない。自分の無力さが、惨めだった。

その通りだった

それは、上総に居た時から十分に感じていたことだった。でも、それを面と向かって指摘する者が上総にはいなかった。だから深く考えもせずに来てしまっていた。

——自分の言葉には民の命を奪うだけの力がある。けれど、民を守るほどの力はないのだ、と。

尚子は何も言えないでいると、好立はもう興味が失せたかのように、尚子から視線を外し、小次郎に向き直った。

「例の件でお話がございます」

「ああ、わかった。尚子、すまないな」

小次郎が出て行くように、笑顔で促してくる。尚子は、素直にそれに従い、立ち上がった。もう、好立などは目も合わせようとしな

い。
わかつている。自分が嫌われているのではない。好き嫌いの問題ではないのだ。そんな幼稚なことと言わない。

今、この場に、自分の居場所はない。だから出て行く。この場においても役に立てないから。

彼らと同じものを見れるだけの背丈がない。背伸びをしても、到底届かない。

早く、早く、追いつきたい。

もっと、力が欲しい。

彼らの横に並んで歩けるほどの力が——。

すっかり肩を落とした尚子が、部屋を出て行ってしまうと、将門はにやりと笑った。

「お前、尚子が相手だと、ずいぶん、ムキになるじゃないか」
好立は、それをしれっと受け流す。

「どこがです？」

「鉄のことを持ち出したのは、尚子だけであつたぞ。正直、してやられたと思つたのではないか？」

「私は確証が持てるまでは、口にしません。姫のは、すべて理想論でしょう？ 希望や願望で国の行く末を語られても迷走するのが落ちです」

「そうか？ 二晩であれだけ考えだしたのならば、褒められるべきだと思うが」

将門は実に嬉しそうに、くくく、と笑つた。まるで、我が子をほめられた父親のようだ、と好立は思う。

意外に、この男は息子ができれば、溺愛する親ばかになるかもしれない。今以上に、目じりの下がった主を想像すると、吐き気を催すほど気味が悪い。できれば見たくない。……不可能だが。

「鉄ならば、北方と交易してはどうか？」

「簡単に言いますね」

「出羽、陸奥は古来から鉄の産地ではないか。その鉄を我が国の軍馬と引き換えならばどうだ。鉄具もいいが、かの地の刀は魅力だ。製法も知りたい」

「……願望を通り越して、妄想の域に達しましたね。鉄の精製法など、漏らすはずがないでしょう。どれだけ金を積んでも、教えてくれませんよ」

「やっぱりか」

「まったく、話を戻しますよ。まず、堤のことですが――」
将門が小さくため息を漏らした。



その夜、今度こそ、と将門は尚子の部屋を訪れた。前は少し来室時間が早かったのではないかと反省し、皆が寝静まった深夜に夜這いを決行することにした。その甲斐あってか、今回は部屋の入り口で鎮座するあやめに会おう。室内もずいぶん静かだ。

「もう姫様のお支度は、整っておいでです」

あやめはそれだけ言って頭を下げた。

つまり、夜着に着替え、敷布も引きそろえ、あとは寝るだけになっ
っているということだ。

「まだ起きているか？」

「はい。読書をしておいでです」

「そうか」

明らかにほっとした顔になって、将門は言った。せつかくこの時間まで待ったのに、すやすやと寝息をたてられてはかなわない。緩む顔をなんとか引き締め、尚子の部屋へと足を踏み入れようとした。が、その足が不自然に空中で止まる。

将門は、そうだそうだと言いながら、勢いよく女官を振り返りかえると、人差し指を突きだすようにして、こう言い放った。

「いいか、好立をこの部屋に通すなよ。何があっても邪魔するな、いいな！」

珍しく、ぽかんとした顔になったあやめをしり目に、将門はひとり気合いを入れ、尚子の部屋へといそいそと入っていった。

尚子は薄暗い室内で、小さな小さな炎の明りを頼りに、書物を読みふけていた。

すると。

——かたん。

木戸が鳴く。

「あやめ？」

書物から目を上げることなく、尚子は女官の名を呼んだ。

誰かが入ってくる気配があったが、いっこうに返事がない。あやめではないのだろうか。

でも、こんな時間に、自分の部屋に入ってくるような人物が他に思い当たらない。

（どうしたんだろう？）

まさか、あやめが声を出せないような状況にでも陥っているのだろうか。

書物から顔を上げたが、几帳が視界を遮っていて、御簾の向こうの様子がわからない。人の気配はある。近づいてくるのも感じる。

（誰？ あやめじゃないの？）

眉を詰め、もう一度女官を呼んだ。

将門はそつと御簾を上げる。まるで、初めて女の部屋に忍び込んだ夜のようだ。胸が高鳴って、鼓動がうるさい。

「あやめ？」

もう一度、尚子が問いかけてきた。返事がなかったので不思議に思っただろう。

一步。また一步。

几帳に近づけば、尚子の長い髪が床に棚引いているのが見えてきた。

手に変な汗が吹き出てくる。

勝手に呼吸が浅くなっていってるのもわかった。

(……今宵こそ、手に入れる。尚子のすべてを。自分自身の心を。

“人”の心を——永遠に手に入れる)

はやる気持ちを抑えながら、なんとか、最後の一步を踏みだした時、ついに几帳越しに、寝具にうつ伏せに横たえた姿勢で、こちらを見上げる尚子と目が合った。

「——」

反射的に半身を起した尚子の瞳は、見る見るうちに大きく見開かれていった。

・6・宝の山(3)

尚子は自分の心が凍りつく音を聞いた。
頭から、いっきに血の気が引いてく。

暗闇の中、几帳の上に顔を出したのは、尚子の想像していた女官ではない。明らかに男性だった。

「……………」

その姿が、いっきにあの赤い月夜の出来事を呼び覚ます。みるみるうちに、尚子の脳裏でその几帳の男性の影と、あの男の顔が重なっていく。

あの男。

憎らしい、あの男。

扶^{たすく}——！！

「あ……っ……」

尚子は小さく声を上げ、ガタガタと震えだした。そして、あつと言う間に、悲鳴を上げるところか息をすることすらできないほどの、強い恐怖に飲み込まれていった。

まるであの日を再現している感覚にとらわれる。

あの男の手が、尚子の体を無理やりに引き倒し。

着物を剥ぎ取り。

馬乗りになって。

ざらりとした不気味な舌で。

尚子のやわ肌を、心をぼろぼろに犯していく——。

(いやああ、助けてっ！！ 助けて——っ！！！)

何か様子がおかしい。将門はそう思った。

「尚子？」

将門の声がかすれる。気づけば、喉がからからに乾いている。返事がない。

油さしの小さな明りでは尚子の表情がここから確認できない。小さなさざ波を心に感じながら、ゆっくりと足をすすめ、寝具に座りこむ尚子の隣に腰を下ろした。

「尚子？」

やっと確認できた尚子の顔は、完全に凍りついていた。

（俺が何をしに来たかわかったってことか？ そんなに緊張するなよ……）

心の中で独りごちながら、将門の顔に笑いがこぼれた。

この屋敷に尚子連れてきてから、尚子が自分を男として意識をしている印象がなかったので、若干焦っていたところもあった。でも、こんな尚子の様子を見れば、尚子には申し訳ないとは思いつつ、ほっとする。

「尚子……」

尚子をなだめようと、そっと手を伸ばそうとし、はっとする。

（——泣いてるのか……？）

一瞬、そんなに自分と夜を明かすのが嫌なのか、と思ったが、すぐに、明らかな異常を尚子から見て取った。

がたがたと大きく震える肩に、虚ろな瞳は見開かれ、大粒の涙がぼろぼろとこぼれていく。

これは、明らかな拒絶。一つ救いなのは、自分を拒絶しているのではないということ。なぜなら、尚子は先ほどから自分を一度も見ようとしなない！

「尚子……どうした？」

将門は、尚子を覗き込む。

ゆっくりと尚子の焦点が自分に合ってくる。

「あ……」

「そうだ、俺だ。わかるか？」

「小次……郎……」

後から後からあふれてくる涙に、尚子は上手く言葉が紡げない。

「そうだ、俺だ。俺だから、落ち着け。泣くな」

「ほんとに……小次郎？」

（なんだ？ 誰だと思ったんだ？）

思わず聞き返しそうになった。だが、まずは尚子を落ちつかせるのが先決だと考え、将門は素直に頷いてみせた。そして、そっと尚子の右手を両手で包む。

「俺だから、安心しろ。どうして泣いてるのか言ってくれ。俺まで泣きたくなってくる」

少しおどけた様子で将門がいうので、尚子はかすかに泣き笑いになる。

「うん……」

「突然、泣きだすから、俺はかなり傷ついたぞ」

「……ごめん、もう大丈夫だ」

将門を安心させようと思ったのか、やわらかに笑って見せた。その笑顔に、将門は心のざわめきを覚える。その不安を払拭させるために、自分も尚子にやさしくほほ笑みかけた。

「もっとそばに行ってもいいか？」

「――」

「お前に触れてもいいか？」

返事がないのを、了承と受け取った将門は、そっと尚子の頬に手をのぼす。指先が少し触れたとたん、尚子がびくりと体を震わせた。

「怖いかな？」

尚子はぎゅっと掛け布を握りしめたまま、動かない。

（やっぱり……そうなのか？ あの男なのか？）

先ほどの胸騒ぎが、将門の脳裏に、あの赤い月夜の記憶がよみがえらせていく。

あの男。常陸の豪族である源護が息子、みなものたすく源扶。

尚子は上総の自分の部屋で、意にそぐわない相手——扶に組み敷かれ、喉から血がでるのではないかと思うほど必死に泣き叫び、助けを求めていた。心が裂けて粉々に壊れてしまうのではないかと思った。それほどの悲鳴に、将門は助け出すことができた自分を褒め称え、間一髪間に合うことができた運命に、心から感謝したい気持ちでいっぱいになったものだ。

だが、尚子はその時にはすでに大きな心の傷を負っていたのだ。全然、間に合ってなどいなかった。だから、こんなに怯えているのではないだろうか。

（俺でも……駄目なのか？俺も拒絶するのか？）

将門は、胸をぎゅっと握りつぶされたような痛みにも襲われる。

「俺はお前に触れていたい。嫌か？」

自分も尚子に拒絶されるのが怖いかもしれない。自分だって、男だ。このまま尚子の体を自分のものにすれば、尚子は心を失ってしまうのではないだろうか。そんな不安と焦りが将門を幾度となく襲う。

「尚子？」

だが、将門の願いに反し、尚子の瞳から大粒の涙が再び落ちてきてしまう。それを見た瞬間、将門の胸は、どんな矢で打ち抜かれた時よりもずっと、激しい痛みに押し潰されそうになった。

「尚子……泣くな。お前が望まないことを俺はするつもりはない。だから泣くな」

将門は、そっと尚子の腕を引っ張った。尚子のか細い体は硬直したまま、腕の中にぽすりと収まる。ついに尚子は泣きじゃくりだしたので、いよいよ将門はどうしていいかわからなくなった。

「どうした。泣いていてはわからないぞ。言ってみろ」

子供をあやすように、ぽんぽんと背中をさすり、将門は問う。

「俺が怖かったか？」

尚子が首を横に振る。

「俺とこうしているのは嫌か？」

再び尚子は首を横に振る。

少しほっとした。

「じゃあ、嫌なことを思い出したか？」

少し間があって、尚子はこくりと首を縦に動かした。

（やはり――）

やはり、あの晩のことが、心に深い深い傷となっているのだろう。あの男が尚子を襲った状況と、今の状況がどこか酷似していたのかもしれない。あの男は、こうやって夜遅くに突然尚子の部屋へ訪れ、乱暴を働いたのかもしれない。

（くっそう……）

湧きあがる怒りをどこへぶつければよいのか。

（尚子に心の傷を負わせた罪、そして、今この俺の幸せな家族計画を邪魔する罪。どうしてくれようか）

脳裏に焼き付いて離れない、憎らしい男の顔を、どうにか消し去ろうと将門は試みた。だが、消そうとすればするほど、深く刻み込まれていくような気がする。

それにしても、もう一発、股間を蹴り飛ばして、使い物にならないようにぶっ潰してやればよかった、と悔やまれて仕方ない。

将門はすべてを吹き飛ばすように、大きく息を吐いた。

「もういい。今日は何もしないから、こうして枕を並べて朝まで一緒にいよう」

「……？」

そっと尚子から体を引き離し、いたわるような口づけをその臉に降らす。

「俺はお前と一緒にいたただけだ。だめか？」

尚子は、じっと将門の顔を見上げた。その大きな瞳に吸い込まれ

そんな自分を、必死で抑えながら、将門はやわらかくほほ笑む。

それでやっと尚子も安心してきたのか、ひきつった笑顔を見せた。
「誓って、何もしない。な？」

将門は、尚子から、ぱっと手を離し、これ以上は何もしないと強調するために両手を上げる。

「だめか？ 俺とは一緒にいたくないか？ あ、まて。そんなことはつきり言われたら、俺はぐれるぞ。よく考えて答えろよ？」

冗談交じりに将門が言うので、尚子はずいずいいつもの太陽のようなまぶしい笑顔になった。そして、ゆっくり首を横にふる。

「私も一緒にいたい」

その笑顔に、将門の心がほんのり温くなった気がした。それで、十分だと思った。

今は、これでいい。

この笑顔が、自分の生きる理由であり、自分が一番守りたいものなのだから。

「よし、では朝まで一緒にいるとしよう」
が。

どうしたことか、いつもの調子を取り戻した尚子がにやりと笑って言った。

「何もしない、そう言ったよな？」

「な、なにに？」

言葉を失っている将門に、尚子はたたみかける。

「男に二言はないよな」

「……………」

「返事」

誰だ、さっきまでめそめそ泣いていたのは。将門は、してやられた気分になりながら、渋々答えた。

「ああ、いいだろう。今日は何もしない！ お前が俺を望むまで、助平な気持ちでお前には触れない！ これでいいかっ！！」

もう、やけくそだ。腕を組んで、ふんと鼻を鳴らす将門に、尚子は満足そうな笑みを浮かべた。しかし、将門も負けっぱなしで黙っていられる性質ではない。

（最後に笑うのはこの俺だ、わかったか尚子）
にたりと尚子に笑いかける。

「だがな、尚子」

「ん？」

「俺の唇を拒むことは、絶対に許さん」

「え……—わっ！」

将門は、ぐいっと尚子の顎を上に向かせ、唇を奪った。

長い、長い口づけ……。

名残惜しそうに尚子の唇を解放すると、わずかに呼吸が乱れ、ほんのり頬を染めた上、潤んだ瞳で自分を見つめる尚子に、身震いがした。

早くも後悔している。

（何もしない？ ……拷問だ）

もう笑うしかない。

・6・宝の山(4)



翌日、尚子はいつもの尚子だった。昨夜のは何だったのか、別人ではないか？ と将門が舌を巻くほどのじゃじゃ馬ぶりを発揮した。まず、朝から牧へ向かい、経明を手伝って裸馬の世話をする。それが終わると屋敷周辺の散策に出かけたようだった。

尚子には馬番の一人である小春丸を従者として同行させるようにきつく言っただけからそれほど心配はしていなかった。その甲斐あってか、二人は屋敷の馬にまたがり、どこかへ連れだって消えていった。

夕刻になると尚子は将門の部屋へと顔を出した。そして、目を爛々と輝かせ、あれやこれやと質問攻めにする。

馬はどれほどの値打ちがあるのか。

馬を育てるまでには、どれほどの年月と資金が必要なのか。

馬の価値を一番高く評価しているのはどの国か。等等。

(軍馬、軍馬と――まったく経明めっ!! あいつの領分じゃないか!)

尚子にばれないように、将門は舌打ちする。

ひとつ答えれば、倍になって質問が返ってくる。だから、答えるのが面倒だと、経明が「小次郎に聞け」とでも言っただけで、丸投げしたに違いない。その気持ちもわからないでもないが。

(よし)

将門の顔が、ニタリと歪む。尚子は一瞬、その不気味な笑みに後ずさりした。

「尚子」

「な、なに？」

明らかにおびえた様子の尚子は、すでに負けを認めたようなものだ。

将門は、じりりと尚子との間を詰める。当然のように尚子が座ったまま、後退した。

だから、また仕方なく、ずいっと間を詰める。それはもう自然の流れというやつで。尚子が逃げるから、追うだけだ。だが、間を詰めるながら、おや？ と思った。

（おびえ方が昨日と違うな。どうやって攻めればいいか、いろいろ試してみるのもいいな）

へっへっへ、と、いかにも悪人しそうな笑い声を上げ、将門はまた少し尚子の方へと詰め寄る。すでに四つん這いになり、まるで獲物を狙う狼のような体制だった。尻餅をついた姿勢のまま後ずさりする子ウサギ、もとい、尚子は顔をひきつらせている。

「ちょ、ちよっと！ 真面目な話をしていたじゃないか、何なんだ急に！」

「お前、失敬だな。これが不真面目な顔に見えるか？ 俺は大真面目だ。それに、昨日言っただけだ。唇は拒むことは許さない、と」
まるで、真っ赤な夕日を浴びたように、尚子の顔が一気に染まった。

「そ、それとこれとは話が――」

「違わない」

四つんばいのまま、じわりじわりと距離を詰める将門の目は、尚子を捉えて離さない。わざとらしく、まるで飢えた獣のように舌舐めずりした将門に、尚子の顔がいよいよ青ざめる。

「小次郎、待って、落ち着いて」

「俺は落ち着いている。それから、俺のことは将門と呼べ、いいな」

そう言いながら、また少し前進した将門から逃れるために、尚子が再び後退した時だった。尚子が、はっと後ろを振り返える。背中に柱を感じたらしい。ついに追いつめた。

「こ、小次郎！」

「将門だ。将門と呼べといったろう」

将門の顔が尚子に近づく。尚子の喉がごとりと音を立てた。ゆっくりと、尚子の唇へ自分の唇を近づける。触れそうになったのと同時に、尚子は覚悟を決めたようにぎゅっと目をつぶった。

（まるで、俺に噛みつかれるとも思ってるみたいだな……いいだろう、俺の唇を自分から求めるようにさせてくれる、これからじっくりと、な）

将門は、自分の唇をそのまま尚子の耳元へ移動させた。

「もういい加減、観念しろ。そう簡単に俺から逃げられると思うなよ」

将門が耳に息を吹きかけるように、低い声で囁くと、尚子はびくりと体を震わせた。

（ほう……なんとも、喜ばしい反応をしてくれるな）

将門は尚子から一時も目を離せなくなっていた。明らかに一つ一つの反応を楽しむように、確かめるように、それでも内心ではおっかなびっくりであるのを必死に隠して。

「こ、こんなことしている場合じゃないだろう？」

「こんなこと？ まだなにもしてないが、例えばこんなことか？」

将門はニヤニヤとしながら、片手を尚子の胸元へ伸ばそうとする。

「い、いやっ！」

慌てて胸元を両手で隠す尚子。それとほぼ同時に将門の心臓が跳ね上がった。

（—————）

頬を染めて、胸元を隠す尚子に釘付けになる。

何かが将門の中で、音を立ててはじけ飛んだ気がした。

「ほう……」

しばらく宙でぴたりと止まったままの将門の手が、ふたたび尚子の頬へと伸びていく。

触れたい。

もっと触れたい。

尚子をすべて自分のものにしたい。

そんな衝動を、まるで紙のように薄くなってしまった理性で必死に丸めこもうとした。

が、将門の熱を帯びた視線が、尚子のぷっくりとして、やわらかそうな紅色の唇から、どうしても離れてくれない。

「なかなか上手く煽ってくれるじゃないか」

口から出てくる言葉で、なんとか自分を取り繕ってはみたものの、体の奥底から込みあげてくる何かが体温をあっという間に上昇させていく。

まるで引力が働いているかのように、将門の顔が尚子に近づいていく。すると、ぽっと尚子の顔が染まった。

尚子の服の香か、それとも匂い袋でも持っているのか、ふわりと甘い香りがした。

ふと、尚子が恥ずかしそうに目を伏せる。

(……………)

将門の喉がごくりと鳴いた。

色っぽい。

普段は子供っぽさが目立つ尚子だけに、たまに見せる色気が特に強調されて見えてくるから、たまらない。

あぐく、尚子はどうにか将門を押し戻そうと、腕をいっぱいに伸ばして将門の胸に触れてきた。

——限界だった。

尚子の潤んだ瞳。

高揚した頬。

少し開いた柔らかそうな唇。

白くか細い腕。

全身から薫る甘い香。

尚子のすべてが、どれほど将門の男としての本能をくすぐり、自制心を破壊するか、尚子は何一つわかっていない。

「煽ってなんかっ——」

将門は、尚子が無言抗議しようと口を開いた瞬間、かなり強引にその小さな唇を奪った。

「んんーっ!!」

驚きからか、恐怖からか、尚子が自分の腕の中で小さな抵抗をみせたが、全く気にならない。氣にしている余裕がない。

まるで、一週間ぶりに食事にありつけた獣のように、頭を真っ白にして、尚子の口内を味わった。

不思議だった。

いくら、むさぼっても足りない。むしろ、飢えは増していくようで——夢中で堪能した。

「……っ」

尚子から小さな息が漏れる。

気がつけば、尚子自身もこの熱い感情の渦に飲み込まれてしまっているようだった。

（尚子——）

もう、このまま尚子を組み敷いて、自分のものにしてしまおうか。何をためらうことがあるだろう。

この手で快楽の海に沈め、この尚子への思いで溺れさせてしまえばいいではないか。

将門の口づけがいつそう激しく、息もつかないほどになった時、ついに尚子が悲鳴を上げた。

「いやっ、こ、小次郎っ!!」

はっと我に変えると、小刻みに震え、身を堅くする尚子が目の前にいた。

どうしたことか。

自分を制御できなくなるほど、女に夢中なるとは。しかも、口づけごときで。

明らかな動揺が将門の瞳を揺らす。

(おいおい……)

自分でも信じられない現状に、こみ上げてきた。こんなところを好立や経明に見られたら、この先十年は軽く酒の肴にされかねない。(この俺が、こんな小娘一人に……冗談だろう)

尚子にこの動揺を悟られては不味いと、ちらりと尚子を盗み見た。が、その直後、あっという間に修復中の理性をすべて正常化することができた。なぜなら、将門よりよっぽど尚子の方が切羽詰まっていたからだ。

尚子は決して動揺を隠さない。いや、隠すまで頭が回っていないようだ。両手で口元を覆うようにして、放心状態になっている。頭で何が起きたのか理解する前に、体が反応してしまい、どう対応しているかわからないのだろう。

夕日よりも真っ赤になった尚子の顔を眺めているうちに、将門の顔に余裕の二文字が完全復活を遂げる。同時に、胸の奥の温度が、それまでの煮えたぎるような熱さから、心地よい陽だまりのような暖かさに変っていくのがわかった。その心の変化に心地よさすら覚え、勝手に口元が緩む。

——愛しい……。

自然にその言葉が浮かんだ。

「将門だ。わからんやつだなあ」

おどけた口調になって、将門は尚子を引き寄せた。そして、今度は軽く唇を吸おうとする。だが、尚子は先ほどのことがあってか、首を左右に振って嫌がった。

「往生際が悪いな」

将門はそっと尚子の耳もとでささやくと同時に、両手首をつかみ、背後の柱へ押しつけるようにした。逃げ場がないところまで追い込むわりに、優しい、本当に、心から慈しむような短い口づけを降らす。

何度も、何度も。

啄ばむように、そっと。

「わかった、わかったからっ！！ 待って話を聞い——んんっ……」

唇を開いた尚子が悪かった。

これ幸いと、将門は文字通り尚子の口を塞いだ。

今度は、長く、長く。でも、先ほどのすべてを奪うような激しさはなく、心を与えるような暖かい口づけを——。

ふいに、尚子の両腕から力が抜けた。

それに気づき、顔を上げた将門は、頬を真っ赤に染めた尚子を満足に見下ろした。本当に嬉しそうに。

「お前は俺のものだ」

将門は尚子の耳もとで囁いた。

——覚悟しておけよ。

お前が、俺を欲しがるようにしてやる。俺と居なければ息もできないほどにしてやる。

それまで、口説きに口説いてやるからな。

そんな含みのある笑いを浮かべたのだが、尚子は頬を染めるところ

ろか、見れば眉間に皺をよせているではないか。

「…………え？」

将門は予想外の展開に、思わず小さな声を上げた。

（あれ？）

何かが、おかしい。確かに、尚子は気分を害しているように見えるが。

変だなあ、と将門が首を傾げている余裕はあまりなかった。

「私がいつお前のものになったー！ーっ！！？？」

尚子の叫び声と共に、強烈な蹴りが男の股間に炸裂する。

「……………」

声も出せずに悶絶する将門の手を振り払って、尚子は立ち上がった。

「真昼間から何考えてんだ、大馬鹿野郎ー！ーっ！！」

尚子は沸騰寸前という顔で吐き捨てると、大股で部屋の入り口まで行き、力の限り木戸を押し開け、派手な音と共に部屋を出て行ってしまった。

「つ……………い、いてえ……………」

後には、実に情けない格好で、股間の痛みに打ちふるえる可哀そうな男が残るばかりであった。

・1・崇り村

1 崇り村

「どうかされましたあー？」

その一言で尚子は我に返った。自分は、また牧に見惚れていたのだな、と小さな笑みがこぼれる。

声をかけてきたのは、尚子と同じくらいの年齢の男、小春丸だった。先日から、どこへ行く時も、へらへらとした笑みを浮かべて尚子の後をついてくる。その表情が、どこか軽薄な印象を与えていたが、悪い男ではなさそうだ。受け答えに、心がこもっていない点を除けば。

それにしても、将門には舌を巻く。はじめは、どうしてこんなにひよろひよろっとした頼りなさそうな男を自分の護衛に付けたのだろうか、と眉をひそめたものだ。

だが、すぐにこの男の特性に気づかされた。カンがいい。頭の回転が速い。だから、臨機応変に動き回る。特に、苦を回避すること、手を抜くことにおいては、驚くほど知恵が回るらしい。

使い方次第だな、と尚子は思う。そして、使いこなせるだろうか？ という小次郎の憎たらしい顔も見え隠れする。

それに、このあたりは馬無しでは何もできない。だから、尚子はどこへ行くにも、まず厩うまやに寄る。

と、当然そこで目付役の小春丸に見つかる。つまり尚子の見張り役として、馬番が適任ということだ。

「どうもしない——いくぞ」

「へいへい」

尚子は馬の頭を北へ向かせ、腹を蹴った。

「——で、今日はどちらへ？ まさか、また集落廻りですかあー？」

勘弁してくださいよお」

もううんざりだと、こちらまで脱力しそうな声で小春丸が訴えてきた。

「……」

尚子は返す言葉を懸命に探してみたが、無理だった。

よく考えれば、初めてかもしれない、と尚子と思う。これほどに、自分の伴を嫌々行う者を見たことがない。

上総に居た時、“姫様”として自分に使えていた従者も女官たちも、皆、それは渋々だったこともあっただろうが、決して顔には出さなかった。誰一人として、だ。

それなのに、この下総に来てからというものの、仏頂面の冷血漢、文室好立を筆頭に屋敷の者の反応が薄い。まるで尚子がそこに存在しないような振る舞いをする事だってある。

自分に対してだけ、つれない。そう感じる毎日だった。

が、それでも、彼ほどはつきりとした“なんでこんな女のお守を自分がしなきゃいけないんだ”という態度で尚子に接する者はいなかった。

でもどこか憎めないのはなぜだろう。少しだけ考えて、尚子は一
人納得する。

（自分がごまかせないのかもしれないな、この男）

言葉と腹のうちが違うよりもずっといい。今の尚子には、清々する
ような気持ちすら湧いてくる。

（このくらい思っていることが顔にでる男の方が、今は気が晴れる。
誰も私に本当のことを言おうとしないからな）

邪魔だ。

なんで下総（しげ）にいる。

とっとと帰れ。

屋敷の人の笑顔の下に、そんな言葉が隠されているような気がし

てならない。

「今日は、牧からもっともっと東北へ向かう」

尚子は自分の下向きな気持ちを振り切るように、遠くに見える山を指差した。かなり大きな山だ。その山を中心に未開の森が広がっている。樹海と呼ぶにふさわしい。

「向こう……ですか」

明らかに嫌そうに、顔をひきつらせると、小春丸はがっくりと肩を落とした。

「遠いし、あっちは何もないっすよ。それに、あの山の方は殿さまの領地じゃないですぜ。行くならもっと西とか南にしましょうよ。遠出がいいなら、相馬なんてどうです!？」

森とは反対側の南の方角を指差しながら小春丸が早口で言いたてる。どうにかして尚子の気を変えようという作戦らしい。

「相馬……？」

相馬という言葉に尚子が反応したので、小春丸は顔を輝かせた。だが、尚子の顔はなかなか晴れない。

（相馬……小次郎の母君のご実家があったはずだ）

「そうです! 殿さまは相馬の方の守谷ということにもお屋敷がありますよ!」

「そうなのか？」

「殿さまの母さまがそちらにお住まいのはずです。そちらは香取の内海が近くて、ついでに船でも見てきましょうよ! ねっ! ねっ!」

前のめりになりながら小春丸が尚子を覗き込んでくる。

「……船か」

当時、現在の利根川下流、霞ヶ浦、印旛沼、手賀沼などが、広大な内海となっていて、『香取の海』と呼ばれていた。もちろん、尚子は上総のお屋敷近辺しか出歩けなかったので、海を見たことがない。大きな商船や交易船を見たい。そんな誘惑に駆られる。

「それに――」

わざとらしく言葉を切って、小春丸が意味深なため息を漏らす。迷いが見え隠れする尚子に、だめ押しをして心変わりさせようという魂胆だろう。

「あの辺には、昔から犬神様が住むって有名なんですわ。人が足を踏み入れればタタリが起きるっていう言い伝えがあるんです」

「タタリ？」

「そうなんですよ。あのあたりの土地は肥えてて、殿さまを含めてここら一帯の豪族は皆狙ってるんです。でも、未だに誰も手に入ることができないでいる。なんでだと思います？」

尚子はあえて返事をせず、小春丸に続けるように促した。

「それは、言い伝えのせいです。崇り村^たの話しりません？」

「崇り村……？」

「オイラも大ババ様に聞いた話です。大昔、あの森の入り口にある村の男が、森の木を斬り倒して田んぼにしようとしたそうです。ところが、突然の疫病になり死んでしまった。そればかりか次々に村人に疫病が感染しはじめ、ばったばった、と死に始めたから、さあ――大変」

尚子はその凄惨な村の情景を想像して、思わず眉をひそめた。それをうけて小春丸の語り口調にますます熱が入る。

「このままでは村が全滅すると思った村長^{むらおさ}は、犬神様の怒りを沈めるために若い娘を生け贄に捧げたそうです」

「それで、疫病はおさまったのか？」

「そうなんです！ 生け贄を捧げた次の日、疫病はコッゼンと姿を消したそうです」

たった一日で疫病が終息するとは考えにくい。きっと人伝の上、尾ひれが二、三枚ついているのだろう。

それよりも、尚子には気になることがあった。

（肥沃な土地――それを手に入れることができれば）

今まで誰も手にすることができなかった、未開の土地を開拓できれば、米の取れ高は増え、必然的に国力増加につながるはずだ。

どうにかして、手に入れる方法はないだろうか。

（いや、まずは使える土地か視察するのが先だな）

静かに、ひとり結論に達した尚子は小春丸に声をかけた。

「その話は、何年前のことだ？」

「知りませんよ、そんなこと！　とにかく、そんな恐ろしい森に行くなんてやめましょうよ」

「つまり、そうやってほとんどの人が噂を信じて、あの森に手を付けずにいたわけだな」

「だって、だって、犬神様ですよ！！　祟りですよ！！　そらあゝうちの殿様だって、やめとけって言うにきまつてるじゃないですかっ！！　さ、さ、帰りましょうっ！　ええ、帰りますとも！！」

尚子は小春丸を振り返る。そして、擦り切れるのではないかと思うほど、手をこすり合わせる小春丸に、にっこりとほほ笑みかけた。「小春丸、いいことを教えてくれた。森に行くぞ」

「ええゝ！！　今の話の流れだと、どう考えても行かない方向ですよね。恐ろしいから、やめましょう。そういう方向ですよね。なのに、なんで真逆の結論になるんですう？　さっっぱり理解できないなあゝゝ」

「お前の言うように、村の疫病がおさまったのなら、今もちゃんと村は存続しているかもしれないだろう？」

「そんな在るか無いか分かんないような村に何の用があるっていうんです？」

「グダグダ抜かすな、男のくせに！　ほら、行くぞ！」

問答無用で尚子は馬の腹を蹴った。馬が駆けだす。

小春丸は、がっくりと肩を落とし、仕方なく尚子の後にくしくしかなかった。

こうして、尚子と小春丸が乗る二頭の馬は、一列になって小道を

進んでいた。

行けば行くほど道は細くなっていく。その両側では広く枝を伸ばした木々が立ち並び、小道から徐々に光を奪い、同時に二人の心に覆いかぶさるように立ち込める恐怖感が口数を減らしていた。

気がつけば、遠くに見えていても大きく見えていた山が、今では二人を威圧的に見下ろしているかのようだ。

もう、どのくらい来ただろう。

人の住んでいる気配などいっさい感じられない。

「もう帰りましょうよ」

後ろからついてくる小春丸の懇願を尚子は一瞥で切り捨てる。

少々、川から離れていくが、奥に行けばいくほど高台になっていくようだ。もう少し進めば、嵐の時も洪水を免れることができる魅力的な土地にたどり着くかもしれない。それに、小春丸のいうように、そこが肥沃な土ならばこれを見逃す手はない。

「もう少し道なりに行こう」

そう言うてからふと思った。

（そうだ、道！）

道があるということは、そこを通る者がいるという証拠ではないか。どうして気がつかなかったのだろう。

村があるのだろうか。

その疫病で滅び損ねた、古い古い村が。この道の向こうに。

（……もしその祟り村があったら、それならそれでいいじゃないか。人手だって欲しい。小次郎の力になってもらうように、説得すればいいだけだ）

自分に言い聞かせるように尚子は心の中で呟いたものの、口の中がからからに乾いていることは隠せない。

緊張しているらしい。

カサカサと風に揺れる葉が奏でる乾いた音が、ますます尚子の恐怖心を煽っていった。



匂う。

少女はぴくりと眉を動かした。

この匂いには覚えがあった。忘れようと思っても出来ない。

だが、ありえないことだ。

どう考えてもありえない。

「どうした？」

後から声がした。驚きを顔に出すことなく、少女は視線だけ動かす。すると、いつの間にか背後にいた長兄が心配そうに少女を覗き込んできた。

表情に出した覚えはないし、そもそも背後からだというのに、長兄は妹の僅かな心のさざなみを敏感に感じ取ったようだ。

いつも長兄は少女を気にかけてくれている。それは分かるが、時にはそれが息苦しく思うこともある。だが……。

(……………)

一人で泉にくることも出来ないとは。ゆっくり水浴びを楽しもうと思っていたのに。

少女はうんざりしながら答え、泉から上がる。

「なんでもない」

軽やかな水音が、水面を流れるように跳ねた。日の光が波紋を滑り、キラキラと光りながら少女の透き通った肌を撫でていく。

「この匂いのことか？」

長兄の低い声に少女の瞳孔がかすかに広がった。

(やはり……)

長兄も気がついていたのか。ならば、気のせいではなかったよう

だ。

少女は兄を振り返ることなく、衣服を身につけた。すると布が少女の肌の上で鳴く。

が、すぐに少女の手が止まった。

また誰か来た。そう悟った少女は、ふうと息を吐かずにはいられない。

「泡雪であるはずがない。妖気も気配もないのに、匂いだけなんてどういうことなの？」

長姉の声だった。

少女は、また過保護なのが現れたと思ったが、すぐに意識はだんだんと強くなる匂いのほうへ持っていかれた。

「近づいてくる」

少女たちは一斉に、南西の方角を向いた。目を凝らしたところで、深い森の向こうに何が見えるというわけでもない。

「あの山猫を食い殺した妖か？ それならば匂いがついていてもおかしくはあるまい」

「それには、妖気を感じない。泡雪ほどの妖を狩れる妖ならば、何かしら気配を感じるはずだもの」

姉が腕を組み直しながら、兄に反論した。

「いや、それほどの妖ならば、我らに悟られぬように気配を殺すことなどたやすいだろうよ」

「……そんな……まさか臍を……」

姉の声が震えたような気がした。一呼吸置いて兄が口を開く。

「ああ。臍を喰らいに来たのかもしれないな」

兄が唸るような声でそう言うのを聞きながら、少女は思った。本当にあの泡雪が死んだのだろうか。

「泡雪を殺せるほどの妖……」

少女の静かな呟きに、兄と姉が少女を振り返る。

そんなものが存在するのだろうか。

あの森に住まう、大きな大きな猫の姿をした——幻覚を操る

妖。恐怖や快樂で、どんな生き物も支配することができる。何百年生きる少女たちの母が、唯一苦戦した好敵手。いや、友と呼んでもよい相手なのかもしれない。

そんな強大かつ聡明な妖に勝るものが、本当にいるというのだろうか。

「行こう」

兄が少女を促す。少女は返事をするかわりに、兄を振り返った。

ふいに強い風が周囲に巻き起こり、木々がざわめく。その風の力を借りて一枚の葉がひらひらと舞い、波立つ泉の水面に静かに着水した、その時——もう、その場には誰も居なかった。

・2・最強の男

2 最強の男

さすがの尚子も、落胆するしかなかった。

「ほらあり、だから何にもないって言ったじゃないっすか！」

主人に対する不満を飲み込むという慎みの心を全く持ち合わせていない男が、尚子の背中にため息を吐きかけてきた。

「……………」

尚子も返す言葉が無い。

細くとも、なんとか続いていた道は、ついに行き止まってしまった。馬で進めるような道は無い。そう、馬では。

黙ったまま、なおも前方を見つめている尚子に、小春丸がたたみかける。

「まさか、そのケモノ道を進もうとか、ホザきなさるんじゃないかないでしょうねえ。まさかね、だって馬どうするんです？ 放置ですか？ そんなことしたら、あっという間に山犬だとか、山猫だとか、熊だとか、そろもう牙も爪も、ぴっかーんと光ってるような恐ろしい――」

「まだ行ける」

まくしたてる小春丸を一言で尚子は黙らせた。そして、迷うことなく馬から降りると、小春丸を振り返る。小春丸は文字通り言葉を無くして、口をパクパクとさせていた。

「なんだ？ いやならば、お前はここで待っていてもいいぞ」

「あ、本当ですか？ なーんだ、それならどうぞ、ご勝手に行っちゃってください」

「うん。夕暮れまでに帰ってこなかった、一人で屋敷に帰っててい

いから」

「承知しました。一人で帰ります——って、そんなわけいくわけないでしょうがっ!! 姫さまを一人で置き去りにして帰ったなんて、殿様に殺されます。ええ、そろもう、ボコボコにされてギツタンギツタンに切り刻まれて、鳥の餌にされちゃいますよっ!!」

「あはは。まさか、そこまではしないだろう」

「いやいやいや!!」

突然、小春がは大きな声で尚子の言葉を全否定したので、尚子はびくっとなった。そればかりか、小春丸は、ひょいと馬から飛び降りて大股でこちらに歩み寄ってくる。どうやら、ずいぶんお腹にため込んでいたらしい。

「姫さまは、あの殿さまを全然わかってないっ! 確かに、ぱっと見、爽やかで男前で、腕も立つからモテモテですけどねえ、あんなドS男は見たこと無いっスよ」

「モテモテ? どうえす?? 初めて聞く言葉だが、下総の国言葉か?」

「てゆうか、姫さま!!」

パチクリと、目を丸くする尚子の肩に、がしりと両手を置いたかと思うと、真剣な顔になって小春丸は言った。

「は、はい」

「悪いことは言わない!! あんなエゲツナイ男はやめて、国に帰んな。何も苦勞してまで、ドS男の餌食になることないって!」

「え、エゲツナイ?」

「まったく、ほんと納得いかないんだよね! なんだってあの男ばっかりいい女が寄ってくるかなあ? 金か? 権力か? 結局、女ってのは、そういう分かりやすいものに弱いんだよねあ。たく、俺だって好きこのんで貧乏な馬番やってるわけじゃないっつうのっ!」

「……こ、小春丸?」

「ああん?」

「お前……いったい、小次郎に何されたんだ？」

それまで、どこで息継ぎをしているのかと心配になるほどしゃべり散らしていた小春丸の口が、とたんに動かなくなった。

「……………」

「……………小春……丸??」

「……………」

ついに、小春丸は何かおぞましいものが地の底から這い上がってくるような、深く重たいため息をひとつ吐いた。

「わ、悪かった。もう聞かない……聞かないから、もう思い出さなくていいぞ……」

「ご配慮、痛み入ります……俺、姫さまに、な、ら、お仕えできるような気がしてきました。あんまり姫さまが優しいので、俺、できる限りお供しちゃおうかな、とか思っちゃいました、今……」

心なしか、『なら』が、えらく強調されているように聞こえたのは、尚子の気のせいだろうか。

「それはよかった。じゃあ、先に行こうか」

「それは、また別の話っス。さあ、帰りましょうか」

「お前、なかなか面倒なやつだな」

そして、なんか話していると、若干の苛立ちと疲れを感じる気がする。でもどこか憎めないのは、正論を述べているからだろうか。それとも、小次郎にさも酷い目にあわされたのだろうという同情心からだろうか。どちらにしても一筋縄でいかない、心のつかめない男であることは確かだ。

とその時だった。

（――！）

尚子は、はっとした。

「良く言われます。ついでに、なかなか使える奴だなとも言われるっス。だから期待しちゃってくださいね――って聞いてます？」

「今何か聞こえなかったか？」

「だーかーらー、俺ってば、なかなか使える男だからー……もがっ」

再び小春丸が何かほざこうとしたところで、「ちょっと黙ってろ」と、尚子の手が小春丸の口を塞ぐ。

と、同時に尚子の全身を、ざわざわと波立つような悪寒が走った。

(……何か——いる!?)

カサカサと草木が騒ぐ。注意してみれば、二頭の馬もどこか落ちて着かない様子で、耳をピクピクと動かし、周囲をうかがっているように見えなくない。

(野犬?)

小春丸も何かを感じたのか、周囲に視線を走らせている。次の瞬間。

「————!」

尚子は、はっきりと聞いた。悲鳴だ。

「こっちだ!」

弾かれたように、尚子はけもの道へと駆け出した。

今のは絶対に悲鳴だった。若い女性の、死に瀕したような、恐怖に満ちた、助けを呼ぶ声だった。

「あ、ちょ、姫さまっ!」

後ろから、小春丸が付いてくるような気配もあったが、構ってられない。伸び放題になっている、草や枝を掻き分け、必死で進んだ。勝手に奥歯に力が入る。

(もう、誰も——)

この手からこぼれおちてしまった、守れなかった村人たちが尚子の頭をよぎる。

尚子と一緒に、笑い合って過ごしていた故郷の民は、一日にして盗賊に命を奪われてしまった。何もできなかった後悔が。なんの力もない自分の無力さが、今も尚子の心に深く刻み込まれていて、何かの拍子にこうして何度も何度も、あの日の記憶に引き戻されていく。

真っ赤な血の海に沈む、動かなくなった村人たち。

人も、家も、人々の希望さえも、全てを炭へと化した恐ろしい炎。

（もう二度と――誰も失いたくない）

不意に視界が開けた。尚子の目に飛び込んできたのは、一匹の山犬に追い詰められて今にも噛みつかれそうになっている若い娘の姿だった。

「――っ……」

娘が尚子に気付き、唸りながら牙を剥く山犬から、一瞬目をそらしたその瞬間、山犬が娘に飛びつこうとするのを感じ取った。尚子はとっさに叫んだ。

「やめろっ！！」

とたん、山犬がビクリと体を震わせて硬直させたのが、はつきりと見て取れた。そして山犬は、まるで雷に打たれたかのように、固まって動かなくなった。

いまだ、と尚子は、山犬と娘の間に自身の体を滑り込ませることに、なんとか成功する。

「……………」

山犬と尚子の静かな睨み合いが数秒続いた。

秋風がすぐ近くの木を揺らし、サワワと囁いた時、勝負は決した。

（――！！）

なんと、山犬がその場で頭を垂れ、伏せたのだ。いったい何が起きたのだろうか。

これでは誰が見ても、尚子の目の前にいる山犬は、尚子の命を待つ忠犬にしか見えない。

（――いったい、どうなっているんだ？）

尚子の脳裏で、先日の牧場で起きたことと、今のこの状況が重なって見えた。あの時も、尚子の言葉に馬たちが一斉に動きを止め、命令に従ったのではなかったか？

「おゝい、姫さま？ どこですかゝい、っと」

と、なんとも気の抜ける男の声が、その場の空気を一瞬にしてぶち壊した。尚子も、ズルリとずっこけそうになるのを必死でこらえる。

「……小春丸、こっちだ」

山犬から目をそらさずに、小春丸を呼んだ。間もなく、ある意味、無敵な男がひょっこりと、姿を現わした。

「うん？ 何してんです？ うわ、何、その犬！ でかつ、こわっ……というわけで、じゃ俺はこの辺で……」

「オイこらっ！ ちょっと待て、どこへ行く！」

と、今登場したばかりだというのに、すっと踵を返して、さっさと撤収しようとする、これまた、ある意味強気な男を慌てて尚子は引き止める。

「いやだって、姫さま。俺ってば、頭脳派で、肉体労働はお呼びじゃない、ていうか無理？ そもそも丸腰だし俺。まあ、剣とか弓とか持たされたところで、使えないけど」

「いいからっ！！ 黙ってそこに居ろ！！」

「あ、そうなの？ 見てるだけなら、かなり得意っスよ。俺の得意技かも、みたいないな？」

「……………」

「でもこの場合、見てるだけって、いないのと同じじゃ？」

尚子は思わず、ギロリと小春丸を睨みつけた。

「……黙ってろって言うのが聞こえないのか」

「へーい。……あっ、でも」

「もう、うるさいっ！！ ちょっとでいいから黙ってろ」

「いや、でも姫さま？」

「だからーっ！！」

「……犬いないっスよ？」

「――！？」

言われるままに視線を前方に戻すと、忽然と山犬は姿を消していた。

（本当だ……いない……）

もう、気配すら感じない。

いったい、どうなっているんだろう。

何が起きたというのだろうか……？

（でも、もう気のせいだとは思えない。あんなの二回も起こることじゃない。あの犬と馬たちが特殊である、偶然、特殊であるとは考えにくいし……）

尚子は、しばらく静かに、山犬が先ほどまで鎮座していた場所を見下ろしていた。その横で、高らかに『最強』男は笑う。

「俺ってそんなに威圧的に見えたんスかね？ 明らかに俺を見て、尻尾巻いて帰りましたよ？ いや、俺何にもしてないんですけどね、はっはっは」

この日、確実に尚子の中で、『最強』の定義が書き換えられたのは、言うまでもない。

・3・使える男

3 使える男

なかなか立ち上がろうとしない娘に、尚子は優しい笑顔を浮かべながら、手を差し出した。

「立てるか？」

同時に、娘に怪我がないか、ざっと観察する。

大丈夫そうだ。出血や骨折があるようには見受けられない。

しかし、声をかけられた娘は小さく震えながら、遠慮がちに首を横に振った。野犬に襲われた恐怖から、娘は完全に腰を抜かしてしまったらしい。

よく見れば、娘は尚子とそう変わらない年頃のようにだ。健康そうな小麦色の肌に、混じりけのない黒い髪を長くのばし頭の高い位置で一つに結んでいた。だが、全体的に細身で今にも折れそうな手足が、儚げな目元をより一層強調する。

「――だそうだ」

間髪いれずに、くるりと体の向きを変え、尚子は背後の男を眺めやる。

「……はいはいはい。背負えばいいんでしょう、背負えば」

「さすがに“使える”男は違うな。実に主人の気持ちを汲むのがうまいじゃないか」

尚子は、にやりと口端をあげて、大げさにほめちぎってやった。「うっわ、誉められてる気が、全然、全く、これっぽちもしないのはなんでだろう」

「気のせいだ」

そう言って、小春丸が娘に背を向け、負ぶさるように娘を促した時だった。

再び、自体は一転する。

「―――！」

気配を察知したのが、一步遅かった。尚子のはつと周囲に目をやった次の瞬間、四方から現れた数名の男たちに取り囲まれてしまった。

とっさに、尚子も腰の短剣に手をやり、身構える。

男たちは無言で尚子たちを睨みつけ、じりじりと距離を縮める。明らかに殺意を感じた。

（盗賊か！？）

尚子は、首を動かさずに、目だけで素早くあたりを見回した。前方に二人、後方に一人。右に一人。

とても戦える人数ではない。何しろこちらは戦力になりそうもないヤサ男と、尚子だけだ。いくら尚子が普通の姫君とはかけ離れたお転婆ぶりを発揮したとしても、男四人を相手にできるわけではない。どうする？

逃げる？

いや、この娘を置いて逃げるわけにはいかないし、かといって娘を連れて逃げるのは不可能だ。

何か良い考えはないかと、かすかな望みを込めて左隣にいる小春丸に視線を投げかける。と、早々に、彼は両手を上にあげて投降の意を表しているではないか。

（……………）

おかげで、尚子は一気に脱力感が押し寄せ、闘争心を削がれた。顔をひきつらす尚子の視線に気がついた小春丸は、じつとこちらを見つめてくる。そして、何かを尚子に訴えようとしている。目が必死だ。

『戦うなんて問題外、無理無理、勝てるわけじゃないじゃん。とりあえず、おとなしく捕まっておいてから、隙をみて、とんずらしましょ

う』

あまりの目力に、尚子はそんな幻聴すら聞こえた気がした。

……確かに投降せざるを得ないが……。

自分やこの娘ならば、どこかに売り飛ばしてしまえば金になるから、すぐは殺さないかもしれない。ならば、隙を見て逃げだせばいい。

(……でも、最初から相手が殺すつもりで近づいてきたのなら?)

そもそも、明らかに使い道のなさそうな小春丸なんぞ、有無を言わずに、ここでバツサリと切り殺されて終わりではないのか?

尚子が考えあぐねていると、背後から気の抜けた声がしてきた。

「いやあ、すいませんね、僕たち道に迷っちゃって」

振り返ると、小春丸が、自分に任せておいて、というように片目をつぶって合図してきた。

(ふ、不安だ……。自分だけ助かろうと、私を売り飛ばしたりしな
いか、すっごく不安だっ!!)

尚子にまったく信用されていないことなど知る由もない小春丸は、得意顔で続けた。

「いやね、常陸の国から親戚を訪ねて来たんですけどお、道に迷
っちゃまって。あ、これうちの妹なんです。ちよっと気が強いんです
けど、結構、美人でしょう?」

小春丸が、へらへらと笑いながら一歩足を前へとすすめた。その
瞬間、男たちがぐっと刀をこちらに突き出してくる。それ以上近づ
くなどとも言うように。

「おおっと、お兄さんたち物騒だなあ、俺は丸腰ですよ、ほらね」
降参、降参と両手を上げる小春丸を、男たちは穴が開くほどに睨
み続けた。ほんの少しでも、おかしなそぶりを見せたらその場で切
り殺す、と言わんばかりの緊張感が、尚子にも痛いほど伝わって
くる。それでも小春丸は笑顔を崩さなかった。

尚子は小春丸の背中を、じっと見守った。ひよろひよろとした
小春丸が、これほど心強く思えるのが、不思議だった。そうか、い

ざという時は、なんだかんだ言っても、こうして尚子を守ろうとする男だったのか。なんとなく、のんきにそんなことを考えてしまい、うっかり見直してしまいそうになった。

ついに観念したのは、盗賊の方だった。

「お前たちはとんでもないことをした」

前方で小春丸と対峙していた男の一人が口を開いた。どうやら、この男がこの盗賊団の長おさなのだろう。

「とんでもないこと？」

「その罪は、自分たちであがなえ」

どういうことだろうか？　と思わず小春丸と顔を見合わせたのと、長が顎で他の男たちに指示を出すのが、同時だった。

「わっ、えっ！」

あつという間に尚子たちは後ろ手に縛りあげられ、猿ぐつわまでされてしまう。

「ひょっひょう！　みひにまひょっただへだへばく！」

小春丸が最後まで何かを叫びながら抵抗していたが、背中に刀を突きつけられ、あえなく観念した。そして、促されるままに、道なき道を歩かされる羽目になった。

（でも、とりあえず殺されずには済みそうだな……）

ふと、娘を心配に思った尚子は、ちらりと背後を盗み見る。そして思わず眉をひそめた。

（……縛られていない）

娘は、尚子たちのように縛られることなく、刀で脅されることもなく、うつむきながら黙々と男たちと共にについてくる。逃げようともせずに、だ。

（……盗賊の一味の娘だったの？）

ならば、娘を助けたのだから、こんな扱いをされるのもおかしい。理不尽じゃないか、仲間を助けたのに。娘も娘で、尚子たちを庇おうとするそぶりくらい見せてもくれてもいいようなものだし。

それに、娘は明らかに居心地の悪そうな様子で、男たちに挟まれ

るようにして同行している。男たちと親しいなかというようには見えない。

まさか、女奴隷として男たちに酷い目にあわされていて、ちょうど逃げ出したところで山犬に襲われたのだろうか？

でもそれならば、男たちも、再び逃げるのを恐れて縛って連行しそうなものだ。娘を縛らないということ自体が、“娘が逃げることは想定していない”』という意味なのだから。

ということは、同時に、娘を連れて逃げることは考えなくてもいいということだろうか？

答えの出ない疑問が、次々と尚子の頭を旋回する。

頭が痛い。この下総に来てからというものの、理解できないことばかりだ。

・4・見えない道

4 見えない道

尚子たちが男たちに連れられ、けもの道をしばらく進むと、不意に道を外れ雑木林の中に入り込んだ。葉をかき分け、さらに奥へと進む。

いったいどこへ連れていかれるのだろうか。

道はない。しかし、男たちの足取りに迷いはない。きっと男たちにはわかる、何か目印があるのだろう。

尚子にはただの生い茂った雑木林にしか見えないのに、道が見えているかのような男たちの振る舞いに、不安はいつそう募っていた。

間もなく、驚くことに、人の手で整備された道へと出た。

方角的に尚子たちが来た道とは違う小道であることは明らかだ。

しかし、どこをどう歩いたのか、全くわからなかった。

尚子は足を止め、背後の雑木林を振り返る。

(――……)

もう何処から自分が出てきたか分からない。

(参ったな、無事に帰れる気がしない……)

わざと外界からの道とはつながず、間に他者を阻む雑木林の“道”を挟むことで、この先にあるものを隠そうとしているのは明らかだ。

盗賊だから、追手を巻くために、というのは分かるが。

それにしては、隠れるというより……。

(……何かを恐れているみたいだ)

男たちに先を促されながら、尚子はそんなことを考えていた。

小道を進むと、小さな村にたどりついた。それは、尚子の想像をはるかに上回る立派なものだった。

村は生垣で囲われ、その外側を用水路が一回りしている。透明度の高いこの水路の水は、湧水と言われてもそんな色のないもので、きらきらと光を反射しながら村の中央を通って奥へと続いていた。

不思議なことに、それまで喉の渴きを感じていなかったのに、その美味しそうな水を見た途端に、尚子の喉は、焼けるようにヒリヒリと痛み出した。

いつ殺されるかわからない緊張の中、歩き通しだったのだ。当然かもしれない。

今にも駆け寄って、喉を潤したい衝動を必死で抑え、尚子は村の内部に視線を運んだ。

ざっと見たところ建物は二十戸。建物の隙間から、村の奥の方に田畑が在るのが垣間見えた。

どう考えても、昨日今日で出来上がった村ではない。

（まさか、これがあの『崇り村』なのではないか？）

尚子が小春丸に目配せしようとした瞬間、小春丸のすぐ前にいた男が彼のみぞおちを強打した。

短いうめき声をあげて、小春丸が崩れ落ちていく。

「！！」

反射的に、尚子は彼のそばへ駆け寄ろうと地面を蹴った。が、身動きした瞬間、両脇を二人の男に掴まれてしまう。

そればかりか、そのまま尚子だけを別の場所へと引きずっていくとする。

尚子は焦った。

このままでは、小春丸と引き離されてしまう！

「んんーっ！！」

彼の名を叫んだつもりだったが、猿ぐつわのせいで上手くいかない。

なんとか首をひねって、どこか別の場所へ運ばれていく小春丸の姿を目で追ったが、ついに尚子自身も小さな納屋の中へと放りこまれてしまった。

「――っ!!」

まるで米俵のように放りだされたおかげで、尚子はほこり臭い納屋の床に全身を強打した。

激痛に一瞬、息ができなくなる。縛られているおかげで、体を起こすこともできず、床に倒れ込んだまま、息を整えるしかなかった。そうこうしている間に、背後で納屋の戸が閉められる音がした。

あたりに静寂と、暗闇が訪れる。

(とりあえず私は殺さないということか？ 待って……じゃあ小春丸は!?)

自分の出した答えに、背筋がぞっとした。

一刻も早く、小春丸を助けねばならない。

なんとかして、この納屋からなくては。

まずは、両手両足の自由の確保だと、尚子は縛られた腕や手首を動かし必死にもがいた。縄はびくともしない。

それでも、ジタバタと腕を動かしてねばったが、上半身を起こすのが精いっぱいだった。おかげで納屋の中が見渡せるようになった。

古い納屋は、外からの光がこぼれていて、十分に見渡せた。同時に、尚子は息を飲む、

目の前にうず高く積まれているのは、米俵だ。そして、今、尚子が寄りかかって座っているのは、干した大根。他にもさまざまな種類の野菜が、しかも数多く並んで積まれているのに気づく。

これが盗んだものでないならば、この村はよほど広大な耕地を持っているということになる。

（もしかして、この村の奥にはとんでもなく大きな開墾地があって、ここの住人が田畑を耕しているのか？ それとも、強大な盗賊団の村で、全部近隣の村々や行商から盗んだものなのか？ ……それにしても——）

かすかに尚子の眉が寄った。どうしても腑に落ちない点があったのだ。

もしも、この村が盗賊の村だとしたら、女である尚子は女郎なりに売り飛ばすとしても、男の小春丸はその場で殺されたはずだ。村までわざわざ連れてきたからには、小春丸にも何かをさせようということなのだろうか。

（いや、その前に……本当にここが祟り村なのだろうか？ それに、あの男たちが言っていたことも気になる）

男たちは尚子たちが罪を犯したと言っていた。そして、その罪を自分たちで償えとも。

いったい、尚子たちに何をさせようというのだろう。

（どっちにしても、さっきの娘はこの村の住人に違いないだろうが……無事かな……）

——ガサ……。

尚子のはっとした。

今、何かの気配を感じた。

首をひねってあたりを見回す。……誰もいない。

もしかして、あの娘が助けにきてくれたのでは、と淡い期待を抱いたのだが、そう上手くことは運ばないようだ。しかし、何か気配がしたのは確かだ。

ふと、尚子の脳裏に四つ足動物の名前が浮かんでくる。

（……ネズミ？）

これだけの食糧があれば、一匹くらい入り込んでいてもおかしくない。一見しては分からないが、この納屋のどこかにネズミの巣穴

があるのかもしれない。

と、その時、尚子の中に、ひとつの突拍子もない考えが浮かんだ。まさか。

そんなことができるわけがない。

でも、二回もその起こるわけないことが起きたのも確かだ。

（猿ぐつわが邪魔して声がうまく出るか心配だけど……やってみる？）

尚子は、ごくりと生唾を飲み込んだ。

もしも、今、自分が思っていることが正しいならば――――。

「ほよっひにほひ」

ゆっくりと、一音一音を大切に『こっちに来い』と発音したつもりが、猿ぐつわのせいで、やはり美味しく発音できない。

それでも、かすかな期待を込めて、尚子は気配を感じた方向を見つめた。

全神経を、目と耳に集中させる。

どんな物音も聞き逃さないように。

かすかな動きも見逃さないように。

（さあ、出てこい……ネズミ！）

自分が立てる鼓動や呼吸の音がやけに大きく聞こえた。

尚子の頬を、一滴の汗が流れていく。

そういえば、暑くもないのに背中も汗でぐっちりと濡れている。

それで、はたと自分の滑稽さに気がついてしまった。笑いさえこみ上げてきた。

（……やっぱり、そんなはずはない……動物と言葉が通じる、なんて……）

何を考えていたんだろう。

そんな非常識なことが起こるはずないのだ。

さっきの野良犬ことも、先日の馬のことも、不思議な偶然が重なっただけで。

（自分の言葉を、意志を動物たちに伝えられるなんて、そんな夢みたいなのがでるはずが——…）

嘲笑を浮かべながら、尚子が目を反らそうとしたその瞬間。

「——っ!？」

尚子は目を見張って息を呑んだ。

・5・売られてたまるか

5・売られてたまるか

意識を取り戻した瞬間に、小春丸は全身の激痛に襲われ、目を覚ましたことを真剣に後悔した。

いや、その前にあのお転婆姫に従って、こんな所まで素直に付いてきてしまった自分の素直さを呪うべきだろうか。命があつてこそその忠義だというのに。

（ああ、俺ってバカ……いい人すぎ、頭良すぎ、かつこ良すぎ。なのに嫁さん来ないってどうなの？ あー、そうだよ、これから嫁さんを貰って、あーんなことや、こーんなことを毎日する予定だったのにどうしてくれるっていうんだ、ええ！？ まてまて、そんなことより、逃げるか。そうだ、逃げなきゃ！）

小春丸は、心の中で怒濤のボヤキを繰り返すのに飽きると、即座に行動に移した。

とはいえ、両手両足は縛られ、猿ぐつわに目隠しまでされていては、できることは限られていた。現在、自分がどんな状況に置かれているのかすら、ろくに把握できない。

妙に肌寒いから、屋外に放り出されているんじゃないだろうか。それに、頬に粒のそろっていない石ころを感じるのが、何よりの手がかりだった。

もっと情報はないかと、何とか首をひねってみる。少し身動きするだけで全身を切り刻まれるような激痛が走った。

（くっそお、ちょー痛え……）

それでも、必死に顔を反対側へ向けようと試みた。

と、その時。

「今、ほどこから」

天の助けだ、と小春丸は小躍りしたい気持ちになった。だが、どこかで聞いたことがある声だ。はて、どこだっけ？

その答えはすぐに出た。だが、にわかに信じられない。

「……姫さん？」

声の主は、小春丸の質問に答える代りに、声をひそめ、口早に言った。

「他に誰がいる。さあ、人が来る前に逃げるぞ」

徐々に自由になる両足と、復活した視界全面に見慣れたお転婆姫の顔が飛び込んできた。

自然と、ほっとした。

無事だったようで、それはそれで良かった、とは思う。しかし、自分と同じように縛られていたはずなのに、何だってこんなに自由に歩き回れるのだろうか。

（まあ、何でもいいか、逃げられれば）

小春丸はこれ以上深く考えないように決めた。

「急いで!!」

姫の背後から別の娘の声が飛んできた。暗くてよく見えないが、これまたどこかで聞いたことがある声だ。

（ん？ 暗い？）

それで初めて小春丸は周囲を見回した。

そこは洞くつに見えた。だが、出口はすぐそこにあるようで、光が差し込んでいた。そのわずかな光で、暗闇に慣れた小春丸の目には、白黒であっても、周囲がはっきり見渡せる。逃げるには十分だ。「呆けてる場合じゃない。足の縄を外せば走れるだろう？ 後は逃げてからだ!」

そう言うど姫は小春丸の体を起こす手助けをし、付いてくるようにという仕草を見せた。

「もがっ!？」

てつきり、自分の口を塞いでいる忌々しい猿ぐつわも外されて、思いのままに愚痴が言えると思っただけに、愕然となる。

「ほら、急げ!!」

呆けていた小春丸を、再度、姫が促した。

（へいへい！ 言われなくても逃げます、逃げますとも。けど、酷くない？ その前に手と口を開放してくれてもよくないっすか？）
必死にモガモガ言いながら不条理と理不尽を訴えたが、姫の次の一言で小春丸は今までの人生において一番の俊敏な動きを見せることになる。

「いいか。お前は捕まれば、蝦夷に売り飛ばされる。生きて家に帰りたければ走れ！」

「ふがんがっ!？」

なんだって!？

それはまずい。

非常にまずい。

売られる？ 俺が？ まじで？

（ムリっ!!）

「ふぬっ!!!!!!」

小春丸は、最大級の気合いを入れて、すくっと立ち上がると、脱兎のごとく走り出した。突如、本気で走りだした小春丸に、一瞬びくりと驚いた姫だったが、慌てて自分の後を追いかけてくる気配を感じる。

洞くつの出口で、さっき野犬から助けた娘とすれ違った気がした。しまった。小春丸は舌打ちする。
すべての元凶はあの娘に出会ったのだから、文句の一つや二つ、いや百個ぐらい言ってやればよかった。

今は、それどころではないのも事実。覚えていろ。次に会った時は、容赦なく非難の雨あられを、嫌よやめて、およしになって、と言われるまで、浴びせてやる。

イヤラシイ笑みで勝手な妄想を始めた小春丸は、ふと、顔を引き

締める。そして、すぐ横を追いかけてくるお転婆姫に冷たい視線を投げかけた。

(……違うな。災厄を連れてきたのはこの姫さんだ)

(とりあえずここまで走れば大丈夫だろう)

村が見えなくなっただけでしばらく走ると、汗を拭いながら尚子は足を止めた。息苦しさに耐えながら、小春丸を振り返る。尚子よりも息があがって、尚子が走るのをやめるのを今か今かと待っていた様子の馬番と目があった。

小春丸は、尚子のそばまで何とかたどり着くと、すぐさま、仰向けに倒れ込んでしまった。

その疲労ぶりに、尚子は思わず声をかけずには居られないほどだった。

「大丈夫か？」

「ふへ、ふへ、ほへっ」

「なんだ？ 何が言いたい？」

すぐさま言葉を使うことを諦めた小春丸は、猿ぐつわを指さし、口の自由を必死に訴えてくる。

「ああ、すまない」

尚子は猿ぐつわをそつと外す。と、小春丸の口から、今まで我慢に我慢を重ね満杯になっていたドス黒い不満が、一気にあふれ出るような叫び声が上がった。

「どああああああああ」

「ちょ、ちょっと、さ、叫んだら居場所がばれるじゃないか！」

慌てて尚子は小春丸の口を塞いだ。

「ここはまだ、奴らの領域だ。油断できない」

そつと尚子の手を口からずらしながら、小春丸が反撃に移る。

「あのね。猿ぐつわしながら全力疾走ってしたことある？　ないよね？　死ぬよ、マジ死んじゃうから。苦しいったらありやしない。姫さん、俺に何か恨みでもあるわけ？　ああ、今日だけで俺の寿命がどんだけ縮んだかわかんねえ……」

「す、すまない。気が付かなかった」

「ええ、そうでしょうよ。姫っていう人種は、たいていそうなのよ。自分の無知でどんだけ下位の者を苦しめているか分からない、残酷な生き物なわけ。しかも、『知らなかったの、ごめんなさうい、えへ』で済まそうっていう最悪最強、極悪非道な人種なんだ。分かった。分かってたんだ。分かってたくせに、なんで付いてきた、俺。ああ、俺ってなんてバカなんだ」

「ちょ、ちよつと落ち着いて」

「落ち着け？　俺は、ちょー冷静ですよ？　冷静沈着、容姿端麗、

頭脳明晰。これ全部、俺のこと」

「……とにかく」

「あ、スルーするんだ、いいけどね。俺ってそういうキャラだし？　そういう扱い方には慣れてるしい？」

尚子はこの時そつと後悔した。そして、本気で悩んだ。

この男から外した猿ぐつわをもう一度はめてやろうか、と。

「と、に、か、く、！」

もう一度仕切り直し、尚子は小春丸に向き直る。

「日が暮れるまでにこの森を抜けねばならない。夜になると、我らに命はないそうだ」

「なぬ？」

やつと小春丸が、尚子の言葉に耳を傾けた。

「この森は、随分と野蛮な住人がいるらしい。昼間の野犬とは比べ物にならないほどの」

「マジッスか」

「……さっきから、何なんだ、その“まじ”とか“ちょー”とか」

「いいから、スルーしちゃって。俺の国の言葉だから」

「す、するう？」

「キニシナイ、キニシナイ。んで、何がいうんです、この森に？」

「神だそうだ」

小春丸が目を見開く。

「……………まさか」

尚子は答える代りに、深く頷いた。

「森の守り神。ここはヒトの背丈を遥かに超えた、犬神が住む森だそうだ」

ごくりと、小春丸の喉が鳴るのが聞こえた。

「あの娘に聞いたんですか…………？」

「そうだ。我々が助けたあの娘が、ここまでの道を教えてくれた」
じっと小春丸の瞳を見つめる。その瞳は明らかに説明を求めている。

尚子の表情に迷いが浮かぶ。今は、夜明けまでにこの森を抜けることが先決だ。だが、何も説明しないまま走れば、小春丸の不安は増長されていくに違いない。人一倍、臆病な面を覗かせる彼のことだ。不安に押しつぶされて奇怪な行動をとられても面倒を起こさなくても困る。

尚子はもう一度、小春丸の瞳の奥を覗きこんだ。その瞳が、一瞬だが、かすかに揺れるのが見えた。

「……………わかった」

尚子は観念して、ことの経緯を話すことにした。

・6・ 琥珀色の殺意（1）

6 琥珀色の殺意

「とにかく、歩こう。歩きながら話す。このままここにいては、危険だ」

尚子は立ち上がると、小春丸を促す。

「どこに行くんです？」

「泉だ。ここを真っすぐ進むと、森の中に泉があるという。そこに、しばらく身を潜めていろと言われた」

「言われたって——あの娘にですか？」

「そうだ」

「信用できるんですか？」

返事をする前に、尚子は足を進める。

「あの娘が、私たちを助けてくれた。それだけは事実だ。ならば、それを信じるしかないじゃないか」

「それはそうッスけど……でも、先に娘を助けたのはこっちッスよ？　なのに、命の恩人である俺ら売り飛ばすとか、意味わかんないッスよ」

「……」

押し黙った尚子の顔を、小春丸が覗き込む。

「何か知ってるんだったら教えてくださいよ」

「……どうやら私たちは、禁を犯してしまったようだ」

「禁？」

「私たちがあの娘を助けた場所は、禁足地だったそうだ」

「禁足地？」

「いわゆる、聖域だな。この森には犬神が住んでいる。あの村の者たちは、代々、その犬神が生活する領域に、何者か入りこまなように見張っているのだという」

「番犬の村だったんすね」

「そう言うな。その使命と、大上村という名を、村人たちは誇りに思っているようだ」

「ふーん——でも、俺たちが、禁足地に入ったのは不可抗力じゃ！？ あの娘が先に入ってたんすよ！？」

「そうだな」

小春丸がはっとした顔になる。

「——だから、あの娘は自分たちを助けたっていうんですか？」

「そうかもしれないな」

「……………」

「見ろ、あれじゃないか？」

尚子が進行方向を指差した。

きらきらと、日光を反射した水面が、木々の間から微かにのぞかせていた。

近づくにつれ、その全貌が明らかになる。

「けっこう大きいな」

泉を前に、尚子は呟いた。

泉は直径が二十メートルはあろうか。森林において、そこだけぽっかりと青空が見えるので、まるで異世界にたどり着いたような明るさを感じた。

水の透明度も高い。

青空が写り込んだ水面を、小魚が泳いで行く。

まるでそこには水が存在しないかのように見えて、思わず手を差し込んでみる。

——冷たい。

手首まで入れてみたが、水底に届く気配はない。案外深いのかもしれない。そう思うと、急に、吸い込まれそうな泉の美しさが怖くなってきた。

「奥にまだ道がありますね」

顔を上げ、小春丸が指差す方を見た。確かに、泉をはさんでちょうど反対側に、けもの道が続いている。

周りを見渡しても、泉の反対側へと続く道はない。ということは、この泉を泳いで渡るしか、あのけもの道へはたどり着かないということだ。

「ここは、本当に安全なんスか？」

「あの娘の話では、ここならば村人は追ってこない、とのことだ」

「追ってこない？」

「ああ」

「それって——」

「何だ？」

「……だって、ここまで来るのに、ちゃんと道があったじゃないですか」

「ああ。一本道だった」

「なのに、追ってこない？」

「何が言いたい？」

「わかんないんですか！？ 道があるけど、追えない。追ってはいけない」

「――禁足地か」

「そうですよ！！」

「だから、この泉にしばらく身を潜め、村が落ちついたところを見計らって、来た道を引き返せと言ったのか」

ならば、やっぱりここは安全なのだ。

あの娘は、自分たちを助けようとした、それだけは間違いないということだ。

信じてはいたのだが、どこかほっとしている自分がいる。

尚子は、そっと苦笑いを浮かべた。

だが小春丸は、いっそう切羽詰まった声を上げる。

「何落ち着いてるんです！！」

「むしろ、何を慌ててるんだ？」

「禁足地ですよ！！」

「そうだと言ってるじゃないか。ちょっとは落ちつけ」

「だって！！ 姫さま、忘れたんじゃない？ 祟りですよ、のろいですよ、疫病ですよ！！ ほら、結局、さっきのおっきな犬に俺らは食べられちゃう運命なんですよ！！」

「……飛躍しすぎだ」

「うがああああああ。俺の桃色の人生！！ カンバークックッ！！」

立ち上がって、小春丸を振り返った。
その時だった。

——ざわわ……。

尚子はその草木の、微かなざわめきに、はっ、となった。
視線を感じて、勢いよく振り返る。
琥珀色に輝く瞳とぶつかった。

「——」

少女が泉の対岸に立っている。

さっきまで、誰も居なかった。それは確かだ。
いつからそこに立っていたのだろう。何の気配も感じなかった。
たった一人で、年端もいかない少女が、じっとこちらを見据えている。

小春丸の息を飲む音が、背中越しに聞こえた。
再びそよ風が、草木を揺らす。

「——おまえだ」

鳥が鳴いたのかと思うほど美しい声で少女は言った。

「おまえから泡雪の匂いがする」

美しいが抑揚のない声だった。

まるで人形のようなだな、と尚子は思った。

腰まで伸びた、絹のように艶やかにきらめく黒髪。

小ぶりで、少女には不釣り合いなほど鮮やかな紅色の唇。

それに、雪綿のような白い肌には、藤色の着物がよく映えていた。
その姿を見る限り、裕福な貴族の、大切に育てられた幼い姫君の
ように思える。

——この場所が、村人もほとんど足を踏み入れることのない深い

森であることと、その大きな琥珀色の瞳を覗けば。

「そなたは何者だ？」

尚子は、少女から目を離すことなく問う。

少女は答えない。

「あの村の者か？」

再び問う。

「――」

少女はこちらの質問に答える気がないようだ。

とたんに、少女の美しさが恐ろしいものに思えてきた。尚子は、食道と胃のあたりをすーっと氷水が通ったような、そんな寒気を感じ始めていた。

少女は、いっさい瞬きをせず尚子を凝視したまま、静かに足を前に進めた。

「！」

尚子は目を見張った。

すー、すー、と足を繰り出し、少女は近づいてくる。

「う、うあっ！ 歩いてる！！」

その少女の様子を指差し、小春丸が腰を抜かした。無理もない。尚子だってその場から逃げ出したいほど驚いている。なぜなら、少女は泉の水面の上を“歩いて”いた。

だか、その驚きよりも、少女の視線が、まるで金縛りにあったかのように尚子の足を動けなくしていた。

（な、なに……？）

少女は、異常なほど自分だけに関心を示しているのが、はっきりと見てとれる。

関心。

興味。

そんな、なま易しいものではない。

感じる――。

全身の肌がびりびりするほど感じる。

隠す気もない、まるで獲物を見つけた獣のような――これは殺意だ。

逃げろ。

逃げるべきだ。

尚子の全身の毛が逆立つようにして、危険を告げていた。

少女が、また一步、前に足を出す。そのたびに、水面が波紋を作った。

尚子の喉になる。

「おまえ、泡雪を殺したのか？」

少女は言った。

微かに少女の目が妖しく光ったような気がして、ぐっと息を止めた。次の瞬間、少女は、どうやったのか、あっという間に尚子のす

ぐ目の前へと移動した。

突然のことに、尚子は悲鳴をあげることができずに、ただ、驚きに目を見張った。

すぐに、その驚きは芽生えていた恐怖を増長させ、自分ではどうすることもできない震えが指先を襲い始める。それでも懸命に少女を見据えた。

相手から目をそらしたら負けだ。そんな自然界の掟に本能的に従っていた。

「間違えない。おまえから、泡雪の匂いがする」

一瞬何を言われたのか分からなかった。完全に恐怖に支配された脳は、うまく働いてくれない。ただ、その場にへたれこみそうなのを必死に耐えていた。

「……あ、泡雪……？」

やっと出た声は、勝手に上ずる。

「殺したのか？」

言いながら、少女の琥珀色の瞳が徐々に上昇していった。自然に尚子の視線もそれを追う。ついに尚子の顔の高さと少女の顔の高さが揃う。

少女の背が急激に伸びたのではない。少女は空中に浮いていた。尚子は背中を嫌な汗が流れていくのを感じた。

（ア、アヤカシか……！）

ごくりと尚子の喉が鳴った。

「それにしておかしい。おまえに、それほどの力があるとは思えない。どういふことだ？」

「……」

妖しげに輝く琥珀色の瞳が、尚子の体中を舐め回すように上下に走る。生きたまま切り刻まれ、その肉片の一つ一つ、細部まで覗かれているような気分だった。

最後に、少女の瞳が、尚子の怯える瞳を捉え、微かに赤く光った。全身が瞬時に氷つくような殺気に、尚子の心臓が飛び出そうなほど、強く脈打った。

——喰われる！

そう思った。

人間によく似たこの美しい異形のモノは、彼女の縄張りを侵した自分を喰らいに来たのだと思った。

瞬もできないほどの緊張——。

息の仕方も思い出せずにいると、意外にも、少女は、すーっと目をそらした。

「——立ち去れ」

それだけ言うと、こちらに背を向けてしまう。

「えっ……」

訳がわからず、尚子の目が泳ぐ。

「————泡雪は朧が唯一、認めた相手。ゆえに、おまえを生かそ

う」

「ま、待てっ!!」

少女がそのまま消えてしまうような気がして、尚子は慌てて引き止めた。少女は少しだけ尚子を振り返った。

「……何のことだかわからない！ 泡雪とはなんだ！ 朧とは――」

「――立ち去れ」

ふわりと風が巻き起こった。尚子の長い髪が揺れる。

まるでその風に、かき消されたかのように、少女の姿は消えていた。そこに確かに存在していたという事実さえ、残さぬように――。

ふいに、どこかで鳥が囀った。

柔らかなそよ風に、木漏れ日が揺れた。
明らかに、泉は日常を取り戻していた。

「――」

緊張のあまりからからに乾いた口の中を潤そうと、唾を飲み込もうとしたが、唾なんて出てきそうにない。

（助かった……のか？）

ほっとした。

ほっとしたら、体中から力が抜け、へなへなとその場にへたれ込んでしまった。

ほぼ同時に、背後でドサツという音が聞こえた。小春丸も腰が抜けたらしい。

——『泡雪は朧が唯一、認めた相手。ゆえに、おまえを生かそう』

“生かす”いうことは、やはり、あの娘は自分を殺そうとしていたのだ。

体中を無数の羽虫が這うような悪寒が走る。

脳裏に焼き付いて離れない、あの琥珀色の瞳。

あの少女はきつと、アヤカシに違いない。あんな妖しい色の瞳を持ち、宙に体を浮かせる人間を、尚子は知らない。

尚子は少女が先ほどまで立っていた場所を見やる。足跡一つ残されていない。

唯一、残されたのは、少女が自分に投げかけた言葉。

——『泡雪を殺したのか？』

少女の声が、生々しく思い出された。

（泡雪……誰なんだ……）

尚子は、じっと、泉の対岸を見つめたが、答えは返ってくるはずもなかった。

・ 6 ・ 琥珀色の殺意（2）



「なぜだ」

左前方の木陰からの声に、少女は足をとめる。その声の主が長兄であることはすぐに分かった。

彼は常に、少女を見張っている。もちろん、心配という名の善意からだ。

「なぜ、殺さぬのだ」

長身の青年が木陰から姿を現した。優雅な足取りで少女の真正面に立ち、切れ長の銀色の瞳で何かを探るように、見下ろしている。

年は、二十代前半だろうか。木漏れ日が反射して輝く銀髪は、朝露にきらめく蜘蛛糸のように、妖艶な雰囲気を持つ。その完璧までに整った顔立ちの彼の前では、少女の美しさも霞む。誰もが一瞬にして目を奪われ、感嘆の息を漏らすに違いない。

「臍を殺しに来たのだろうか？」

兄の問いかけに、少女は明らかに面倒臭そうに、息を一つ吐いた。「いつから見ていたの？」

「お前が、あの“淡雪の臭い”を追って、駆け出したから、私もそれを追った」

つまり、兄はずっと自分の後を付けて、あの娘と自分が対峙するのを見ていたということになる。

「てっきり、お前は、あの者を殺すのだと思った」

「殺そうと思っていた」

「ではなぜ？」

「殺そうと思って、あの娘に近づいた——でも、できなかった」

長兄の眉がかすかに寄る。

「あの者は、どう見ても、タダの人間だった。我らのような妖でも、術を使う陰陽師の類いでもない。何の力も持たぬ、タタビトであった。それがなぜ——？」

「淡雪の……」

少女はそっと目を伏せた。その表情には、戸惑いが見え隠れしている。

長兄は少女を気遣うように覗きこんだ。その瞳がほんのり優しさに包まれる。

「淡雪は死んだ……ほんとに死んだのよ……」

「見えたのか？」

少女はこくんと頷いた。

「——そうか」

「あの娘を殺そうとした瞬間、淡雪が見えた。あの娘の命を——守ろうとしていた」

「守ろうと？」

「なぜかは、分からない。なんだか、急に——ここが変になった」

あの泉でのことを思い出して、思わず少女は胸のあたりを両手で押さえた。

（ここが——すごく変だった）

それは少女の感じたことがない、感情だった。くすぐったいような、きゅうつと掴まれているような。

（日向ぼっこをしている時みたいに、ここのあたりが暖かくなった）この感情を表す言葉知らない。

わかるのは、敵意でもなく、殺意でもない。勿論、食欲でもなかった。

ただ、どこか心地よい——。

この感情は明らかに淡雪のものだ。

淡雪は、死した後も、強力な妖力を娘の体に宿らせるようにして、守ろうとしている。

（でもなぜ、あの娘を？ 自分の命を犠牲にしてまで、あの娘を守る理由はなんだというの？）

少女たちの母、朧が唯一認めた妖猫。幾度となく死闘を繰り返し、それでも勝敗が決することがなかった。その淡雪を服従させるような何か特別な力が、あの娘にあったというのだろうか。

（信じられない——あの娘、ただの人間ではないのか？）

少女は、娘の顔を懸命に思い返していた。

確かに、あの時は、淡雪の妖力に包まれていたから、娘自身の妖力を感じ取り損ねたのかもしれない。あの娘が、強大な力を持つ大妖怪である可能性は、無いわけではない。

だが、淡雪を役するほどの大妖怪であったなら、この朧の森へ足を踏み入れた理由は、一つしかないはずだ。少女たち朧の一族を喰らい、自らの妖力を高める——そのために来たことになる。

（でも、あの娘は朧の名は愚か、淡雪の名も知らないように見えた。いったいどうなっているの？）

いつしか、少女の眉間には深い皺ができていた。

「どうした？」

黙ってしまった妹を心配した長兄が、少女の肩に手を置いた。

「——なんでもない……」

「淡雪が、あの娘を生かしたのならば、我々が手を出せる問題ではなくなる。朧が戻るまでは、様子を見るしかない」

「でも……」

「朧に任せよう」

長兄は静かに、そして、強く言った。

不意に、微かな風に乗って、嗅ぎ慣れた長姉の臭いがした。少女と長兄は同時に、一点に視線を集中する。

「朝霧。あさぎり何があったの？」

これまた、華麗な美女が姿を現した。白銀の絹糸のようなつややかな髪を、頭の高い位置で一つに縛っているためか、気の強そうな印象を受ける。年は青年とさして変わらないように見えた。

「咲木」
さきぎ

「先詠や炎刈^{ほがり}たちが、不安がっているわ」

「大事な。我々も戻ろうとしていたところだ」

「本当に淡雪だったの？」

「いや——淡雪の妖気を纏った人間が、この森に足を踏み入れただけだ」

それを聞いた長姉も、信じられないことを聞いたというように、顔をしかめる。

そんな兄たちの会話を人ごとのように聞きながら、少女は吸い込まれるように背後に視線を送った。

「もうよい——戻ろう。弟たちが心配しているのだろう？」

「……そうね」

少女は、まだ、視線の先にあるはずの泉に思いをはせている。

（ただの人間に見えた）

でも、自分をずっと凝視していた。

普通の人間は、自分を見ると脅えたように悲鳴を上げ、逃げまどう。

あの娘は、違った。

まっすぐこちらを見ていた。

（あの娘は——何者なの？）

「小夜」

名を呼ばれ、はっとして兄たちを振り返った。

「ゆこう」

「……」

少女は、もう一度だけ泉の方を振り返って、兄たちの後ろに続いた。

・7・ その命で(1)

7 その命で

「そのくらいにしておけ、死んでしまうぞ」

「死んだって構うもんか、こんなヤツっ!!」

「そうだ、こいつがヤツラを逃がしたせいだっ!!」

最後の男の声と一緒に、痛恨の一蹴りが、娘の脳天を直撃した。その衝撃で、地表を半回転し、そのまま背中に着地した。受け身を取れぬまま着地したため、激痛が全身を駆け巡り、一瞬、息が出来なくなる。目の前がチカチカして、意識が遠退きそうになった。

「ああ、もうこの村はおしまいだ」

「なんていうことだ」

「おしまいだ。皆、殺されてしまう。犬神様は絶対に我らを許したりしない」

「ああ、殺される！ 皆、殺される！」

仰向けのまま動けないでいる娘の頭上で、無数の男たちが口ぐちに騒ぎ立てている。

「むらおき村長に報告しろ。村長ならば、何かいい案がおりかもしれん」
「そうだな、村長に報告だ！」

「俺がいく」

「俺もだ！」

遠ざかっていく数人の男の足音が、右耳近くで聞こえた。それでも、娘は指一つ動かすことができないでいた。

どのくらい殴られたのだろう。

もう、途中から記憶がない。意識がもうろうとしていた。

お腹やら背中やらを、集団で殴られ、蹴られ——かろうじて生きている。呼吸ができている。

そんな状態だった。

「お前のことは、可愛がってやっていたつもりだった。それが——とんだ裏切りだ」

吐き捨てるように、聞きなれた声が頭のすぐ上から降ってきた。視線をやつとの思いで動かし、顔を確認する。

(……大助さん……)

だいすけ

娘と視線があった大助は、ばつの悪そうな顔で、目をそらした。確かに、大助はこの村の男たちの中では、親切だった。だが、その理由は不純なものであることを、娘は知っている。

「お前の母さんの立場を考えてやれ」

大助は小声で言った。

その、引きつった顔を見て、娘はやっぱりな、と思った。

大助は母が好きなのだ。だから、その娘である自分に優しい。それだけのこと。

自分のことを大切に思ってくれているわけではない。むしろ、邪

魔に思っているに違いないのだ。

そう、思っていたが、どこかで自分のことも、実の娘のように思ってくれているのではないだろうか。そんな微かな期待を消しきれなかったのは確かだ。

それが証拠に、今、胸が切り裂かれるように痛む。

——微かではなかったらしい。

(……大助さん……)

娘は、ぐっと唇に力を込めた。

「大助、村長が来たぞ!!」

「おお、村長だ!」

「村長っ!!」

男たちは、まるで、すぐる子供のような、情けない声を出して、老人を迎えた。

「話は聞いた——大変なことをしてくれたな」

村長が、背筋が凍るような冷たい目で娘を見下ろした。

憎悪。

侮蔑。

とても、同じ人に向ける視線ではない。

「しかたがない。——おまえが、その命を持って、すべてを償え」

いっせいに、その場にいた者が息を飲んだのが分かった。恐ろしいほどの静寂があたりを包む。

「そ、それはつまり」

誰かが問う声も、もう娘には、遠くの方で聞こえる人事に思えてきた。

「この娘を、犬神様に捧げるしかなからう」

「そ、それで我々は助かるのですか!？」

「本当に、森に入り込んだよそ者でなくても、犬神様のお怒りは鎮まりますか？」

期待から声が上がする男たちに、村長は深く頷いた。

「大丈夫じゃ。かつて、同様なことがあったが、犬神様はこの村をお許しになられた。だから、村は今日まで、存続しておったのじや」

「おお!!」

「助かった!!」

「信じられぬ!! 我らは助かるのか!!」

もはや、娘の命を心配する者など、誰もいない。泣きながら、抱き合いながら、大喜びする村人たちを、娘は、仰向けのまま、視界の端で受け入れた。

——空が、青かった。

『命を持って償え』

つまり、自分は生贄にされるのである。

犬神が住むと言われる森に足を踏み入れた者は、犬神の怒りを買

う。怒った犬神は、森の生き物という生き物を食べつくしてしまうという。森の美しい湧水も、川も枯れ果て、森はあつという間に死してしまうという。

今日、娘は野犬に追われ、いつのまにか禁じられた森へと足を踏み入れてしまっていた。そこを、よそ者の娘と男に助けられた。

あの者たちが、なぜ、あの場に居合わせたのかは分からない。

でも、自分には、あの者たちが生贄となるのを黙って見ていることは出来なかった。

第一、よそ者が森に侵入しただけで、森の守り神たる犬神が、森を殺すなどというのもおかしい。ただの言い伝えにすぎないのではないだろうか。

だから、二人を逃がした。

自分のために、必要かどうか分からない生け贄として、彼女たちを見殺しにすることはできないから。

(これでいい――)

娘はそつと目を閉じた。

自分は間違ったことをしたとは思っていない。

村人を裏切り、あの者たちを助けた自分を、母ならば、きっと許してくれるはずだ。

(だって、これは母さんが、いつも、いつも、私に教えてくれたこと)

『我らは、誇り高き民族。たとえ倭人やまとに捉えられ、俘囚ふしゅうと呼ばれ、奴隷のように蔑まされようとも、心まで犯されることはあるまいよ』

母はそう言っていた。

自分の心を信じよ。

自分に恥じぬ生き方をせよ。

それが、我ら——気高き北方の民族——だと。

（だから、私は私の心に従う。私の命を救った人たちが——私を助けたせいで殺されるのを黙って見てなどいられない。これが私の強き心）

だから。

これでいい。

たとえ、生きたまま、生贄として崖から突き落とされようとも。

その死した体を、野犬が食い散らし、鳥が啄ばもうとも。

自分は後悔しない。

（私は、私の心に恥じることはしない——でも……）

娘は小さく息を吐き、重たいまぶたを押し開いた。

すがすがしいほどの青空を、もう一度だけ、目に焼き付けようと思った。

——きっと、もう見ることでできない、母の笑顔の代わりに……。

・7・ その命で(2)



泉を包む、はりつめた空気を一掃したのは、小春丸の呟きだった。

「……何だ今の……うそだろ……」

呆然としていた尚子も、はっとしたようにこちらを振り返った。
その、尚子の青ざめた顔が、すべて現実に起きたことだと告げていた。

「……待て待て待て!! ありえないだろう。だって水の上を歩いてたぞ!」

しかも宙に浮いていた。目は、怪しげな黄色から、燃えるような血の色に変化した。

それにこの背を流れる汗。尋常じゃない。まるで滝のようだ。体が本能的に命の危険を訴えているとしか考えられない!

「人間じゃねえ……」

声が震えた。信じられないものを見たという驚きよりも、恐ろしさが勝っていた。

「化け物だ……化け物がっ……」

殺されるところだった――。

そう思ったとたんに、ぞくりと寒気が走った。

（だから俺は止めたんだ!!）

なのに、なんでこんな目に!?

自分は、命の危険とは無縁の、むしろ別次元で、のほほんとしながら、美人の妻とムフフな生活を送っている予定なのに!

（おかしい! ありえない! 何がどうしてこんなところで、こんな色気のないじゃじゃ馬と、死にそうにならにゃーいかんのだ! 俺の完璧な幸せ人生設計はどこで狂った!?)

独り、論点がずれてきた小春丸は、ついに頭を抱えて項垂れてしまふ。

「妖の子供……」

ふいに尚子が真っ青な顔のまま、呟いた。

再び尚子の顔をすぎるように見つめると、その大きな瞳が小刻みに揺れているのに気がついた。何かを思い出した、といった表情だ。

小春丸は胸の奥底から、じわじわと込み上げてくる嫌悪感に必死に気づかないふりをしながら、口を開く。自分の嫌な予感によく当たる。

「……姫さま、まさか……」

「私は何も……本当に泡雪なんて名前……」

尚子は、頭をふりながら、懸命に声を絞り出しているようだった。

（泡雪？ そうだ！ 思い出した！）

あの化け物が何度も口にしていた名前だ。その泡雪とかいう人物を尚子が知っているようなことを言っていた。

（いや、待てよ）

小春丸は腕を組み、顎をさすった。頭をこれ以上ないくらいフル回転させる。

（そもそも、あの化けもんは、姫さまを探してたみたいだったじゃないか？ ———つまり、もともと姫さま一人を狙ってたってことか？）

「まじかよっ！ 冗談じゃねえぞ！！」

自分のたどり着いた結論に、思わず立ち上がり叫んでしまった。その大声にびくりと反応した“災厄の塊”を、冷ややかに見下ろしながら続ける。もう我慢も限界だった。

「やっぱり、あんたのせいだ。全部、全部、何もかも、あんたが元凶だ」

普段、本心を見せない小春丸の言葉の、一言一言に力が入る。

「小春……」

「だいたいあんたは、何がしたいんだ？ なあ、教えてくれよ、お

美しい隣の国のお姫さまに、いったい何ができるっていうんだ？」

「――」

「何にもできないくせに何だってこんなところまで来てるわけ？」

隣の国のことに、首、突っ込んでんじゃねえーよ。殿様に見初められたんだろ？ 何もしなくても、うまいもん食って、綺麗な着物来て、笑って生きてられんだろ？ 殿様の機嫌とって、子作りでもしければいいじゃねーか！！」

「落ち着け、小春丸」

「俺は落ち着いてる。俺は正気だ、まともだし、普通だっ！ 普通じゃないのは姫さま、あんたなんだよっ！ 普通、刀もろくに使えない女が、犬に食われそうになってる女を助けるか？ 運よく犬が逃げたからよかったものの、そうでなければ今頃――……ちよっと待てよ」

小春丸の眉が寄せられる。

「犬が、しかも、餌を目の前にした野犬が……尻尾巻いて逃げるか？」

信じられないモノをみるような小春丸の視線が尚子に降り注ぐ。

「それに……あんたも俺と同じように、縛られていたはずだ。どうやって逃げ出したんだ？ 本当にあの女が逃がしたのか？」

「――何が言いたい？」

睨み返す尚子の目が揺れた。今までのような、人を射抜くような、息をのむ凄みが、その瞳にはない。

だから、小春丸は続けた。迷いもなく。遠慮なく。

「あんた、本当に人間か？」

尚子の目が見開かれていく。

「なっ……」

「だってそうだろう？ 普通の人間は、あんな化け物に探されたりしない。あんた、あの化け物の仲間か？」

「違うっ！」

「その証拠は？」

「証拠……？」

「あんたが、化け物じゃないっていう証拠だよ。さっきの小娘も、見た目は人間だった。どっからみても人間のガキだった。浮いたり、水の上を歩いてなけりゃ、俺も気づかないさ。つまり、あんたらは人間に化けるのが得意なんだろう？」

「――」

尚子は、言葉を探すように視線を彷徨わせてから、目を伏せた。

（ほら、言わんこっちゃない）

皆、この容姿に騙されているに違いない。

自分は人畜無害ですっていう顔で、今日一日でどれだけの害を自分に被らせたことか。

「殿様も間抜けだな。化け物に騙されて、骨抜きにされてよ。あー、やってらんねえ」

とつとつ、こんなところから、退散しよう。化け物の娘を護衛しろなんて、そんな命令聞いたこともないし、守る義理もない。

（むしろ、ここに捨てて帰るのが、世のため、殿さまのため、俺の

ためつてもんじゃないか!? そうだろう。どう考えても、こんな天然危険物、持ち歩くもんじゃないし!!」

そうだ、そうだ、と自分で自分に相槌を打ち、尚子に背を向けた。だが、すぐさま、腕を掴まれる。

「待て! 本当に違うんだ!」
「放せよ」

心の蓋から溢れた嫌悪感からか、力一杯振り払ってしまい、尚子の体が簡単に吹っ飛んだ。

一瞬、しまったと思った。相手は、仮にも姫の姿をした女性だ。女性に優しくをモットーとして生きている小春丸の顔に心配の色が浮かぶ。

(いかん、いかん。これは化け物だ)

くそう。人間の、いや、男の心の弱いところを上手くついて、美人に化けるなんて、なんて性悪な化け物なんだ。そう思うと、だんだんと、腹が立ってきた。

痛そうに腕を押さえながら体を起こす尚子に、ますます嫌気がさし、舌打ちせずにはいられない。

今度は痛い素振りか?

そんな嫌みすらも、言う気が失せる。

「おまえになんと言われても、本当に……わからないんだ。泡雪という名前にもまったく覚えがない!」

「じゃあなんで、あんたを探しに来る? 俺だって化け物の世界はよく知らん。でもよ、ヤツらは、何の関係もない、ただの小娘をわざわざ探しに来るほど暇なのか!」

「もしもっ！」

小春丸の容赦ない罵声にも臆することなく、尚子が腹のそこにズシンと響くような太い声を出した。そして、自分の心を静めるように、深く息を吐いてから、再び口を開いた。

「もしも、妖の少女が私に会いにきたのだとすれば、私が過去に妖の子供を助けたことと関係があるのだと思う」

「妖の子供？」

「その子供も、先ほどの少女のように、外見は何一つ人間と変わらなかった。育ての親だろうな、家族を村ごと焼かれ、自らも死のうとしていたところを、屋敷に連れ帰った」

思い出しているのだろう。尚子の顔が、徐々に穏やかな、柔らかな笑顔になっていくのがわかった。

その表情に、小春丸はなぜか懐かしさを覚えた。なんでだろう。こっそり自問自答する。

「よく働き、よく笑う、普通の子供だったよ。ひとつをのぞいて」
「――」

「ある日、火の中で眠ってるその子を見た」

「火の中って、ごうごうと燃える炎の中か？」

思わず話に聞き入り、聞き返した小春丸に、尚子はこくりと首を縦に動かした。

「それで、すべて合点がいった。だから、村人が全員焼け死んだその村で、火傷一つすることなく、あの子は生き残ることができたのだと」

「火の化け物なのか？」

「おそらく——今となつては確認しようもないけれど」

「死んだのか？」

尚子は目を伏せ、顔を歪めながら首をふった。

「わからない。でも、この国に来る途中で、彼の本当の姿を見た。挨拶に来てくれたんだ——こんなに小さくて、でもちゃんと暖かくて……」

胸の前で、両手をお椀のように広げながら、尚子は微笑む。

「『一緒にいけない。後のことは心配らないから幸せになれ』と背中を押された。それが皆の願いだから、と」

小春丸は、なぜかその時、尚子は泣いているのだと思った。顔は笑っている。本当に、柔らかな自然な笑顔なのに、それを見ていると、自分の胸が痛い。

この姫は、実はとてつもなく強い女性なのではないだろうか。自分がどんなに泣きたい時も、心配させまいと笑顔を見せる。そんな女性なのではないだろうか。

不意に、尚子と視線が交わる。心臓が、どきり、と跳ねた。

尚子の顔から目を離せなかった自分を隠すように、ぼりぼりと頭を掻きながら、視線をずらし、言葉を絞り出した。

「ふ、ふーん……化け物にもイイヤツがいるんだなあ……」

もしかすると、人間と同様に、妖怪の世界にも良し悪しがあり、生活があるのだろうか。野山に生きる動物たちが、そうであるように。

「でも、本当にそれが泡雪とかいう化け物なのか？ 火の化け物なのに“雪”って変じゃねえ？」

「わからない。だが、他には思いあたらないし、あの少女は、泡雪が私を助けたと言っていたから、あの子供の妖のことだとしか考えられない」

「ふーん。じゃーさー、その助けてたっという泡雪みたいに、さっきの小娘の姿した化け物も姫さまの味方なんすかね？」

何も考えずに、口から出たのだが、それを聞いた尚子はくすりと笑みを溢した。

「な、なんすか？」

「口調が戻ったな」

「……………うるさいっスよ」

そう言えば、怒りも嫌悪感もいつの間にか鎮火していた。いや、鎮火させられたという方が正しいだろう。

自覚している。自分は美人に弱い。特に、気の強い美人と、意思の強い美人には、めっぼう弱い。最弱だ。

（あ、あれー！？ もしかして、これって、殿さまにハメられたってやつ？ ていうか、なんであの人は俺の女の好み知ってんのー！？ マジありえねーし！！）

ちらりと尚子に視線を送ってみた。頬笑み返される。

（うっ。何この、前にも増した、信頼切った目）

「わかってくれれば、それでいいんだ。私はお前を失いたく無い」

（失いたくないって……あーた、照れるからやめて）

「お前の頭の回転の良さは、さっき立証済みだ」

（ああ、俺の“頭が”必要なのね）

「森を抜けるには、小春丸、お前が必要だ。一緒に帰ろう」

（―――）

小春丸の息が一瞬止まる。

（わ、わざとやってるのこの子！？　ねえ、わざとなの！？）

心臓の音がだんだん大きくなっていくような気がした。勘違いであってほしい。

だが、不覚にも“お前が必要だ”という単語だけが厳選され、頭の中で、ぐわん、ぐわん、共鳴し続ける。

（やめてよ、やめてよ！　ほんとやめて！　何この展開！　要らない、ほんと、要らない！！　ラブコメのライバル的な役どころは、別の人にして、ほんと、いやーっ！！）

主人に対する『してやられた感』とその他諸々の雑念を払拭するために、頭をぶんぶん振り回し、さらに、髪をワシヤワシヤと掻き毟ってみた。

「ど、どうした？」

「……………」

無理。全然、払拭されない。

「小春丸？」

かくして、がつくりと、肩を落とした小春丸は自分の輝ける未来が、すでに鬼畜な屋敷の主に握られていたことを知った。

・7・ その命で(3)

＊

小春丸が一人、敗北の白旗を上げた頃、尚子はまったく別のことを思案していた。

――『あんた、本当に人間か？』

その質問を浴びせられた時、一瞬言葉につまった。なぜなら、誰よりその答を一番知りたいのは、尚子自身だからだ。

小春丸は野犬のことしか知らない。

もう何も言わないところを見ると、あれは偶然だったのかもしれないと思ったのだろう。

でも、尚子にはそれは無理だ。

二度も、“普通考えられないような偶然”が重なるというのは、それこそ、普通では考えられないというもの。だからあの時――村の古い納屋に閉じ込められていた時、尚子は確かめようと思ったのだ。自分には動物と意思を通じあう能力があるのかどうか。

でも、ネズミだと思った小さな物音は、人の仕業だった。尚子が助けた、あの娘だ。

あの納屋の木製の壁は、所々いたんでいて、大きな穴が空いていた。その穴の修理は、外から大きな板を一ヶ所打ち付けただけの手

抜き修理だったようで、そこを支点に板がぐるりと回転し、簡単に出入りできてしまう。おかげで、娘が尚子を助け出してくれたというわけだ。

娘の顔を見た瞬間、正直、拍子抜けしたのと同時に、ほっとした。自分が“普通の人間ではない”と確定しないで済んだ。そう思った。

でも、その疑惑自体が晴れたわけではない。靄のように、今も尚子の脳裏にまわりついて離れようとしなない。

確かめるのが怖い。このままでもいられない。

自分自身が何者なのか。人間なのか――自信がない。

そんな、もやもやとした不安を小春丸に悟られまいとするのが、今の尚子の精一杯の強がりだった。

だから尚子は、異変に気づくのが少し遅れた。

「――！」

ぼーっとしている尚子の腕が強い力で引っ張られた。突然のことに声をあげそうになったが、それも小春丸の掌が許さない。強引に雑木林へと引きずり込まれ、頭を押さえつけられるまま、地面に伏せた。

ところが、口を被う馬番の手をひっぺがし、何事か、と問う前に、人の気配を感じた。開きかけた口をゆっくり閉じる。

がさっ。

がさっ。

道を彩る落ち葉が、音を立てている。その音がゆっくり近づいていた。

一人じゃない。かなりの人数が歩いてくる。

（どうということ？）

思わず小春丸の顔を見る。ギロリと睨まれた。

『やっぱり騙されたんじゃない？ 助けるふりをして、あの娘にハメられたんスよ！』などと、空耳まで聞こえてきそうだ。

もう脱走がばれたのだろうか？

しかし、追っ手だとしても、今さら逃げることもできない。ここから村までは一本道だった。

息を潜めてやり過ごすより他にない。

しかし、自分たちを追ってきたにしては、様子がおかしい。足音は、落ち着いているように感じる。

二人が、尚子の膝がすっぽり隠れるほどの背丈の草から、じつと様子を伺っていると、ついに数十名の男たちが二列にあらんで歩いてくるのが見えた。

その整然とした歩みは、異様だった。

泉に到着した一行を首を傾げつつ見守っていると、数名人の男が大きな荷物を担いでいるのがわかった。

（あれは――）

尚子と小春丸の眉が同時に寄る。

男二人は巨大な盥たらひを持っていたが、最後の一人は違った――人だ！

（あの娘だ！）

心の中で叫びながら、いっきに頭から血の気が引いていくのを感じた。

担がれていた娘は体中、傷と土まみれで、所々血が滲んでいた。顔も赤黒く腫れ上がり、痛々しい。腕は折れているのだろう、不自然な角度で曲がり、だらりと垂れ下がっていた。男の歩く振動で傷が痛むのか、たまに呻き声を上げている。あまりの酷さに、尚子は直視できなかった。

（なんてことを……私のせいか——私たちを逃がしたから……）

胸がぎゅっと締め付けられる。

村人に暴行され、泣きながら助けを請うたに違いない。
どんなに痛かったろう。
どんなに苦しかったろう。

また——私のせいで。

悔しさと。

申し訳なさと。

情けなさと。

言葉にできない感情が、ぐちゃぐちゃと混ざりあい、行き場を求めて、涙となって込み上げてくる。

泣くものかと思った。

泣いて何になる、と思った。

目を見開いて、現状を頭に焼き付けろ。

結局己のしたことは、この娘を更に苦しめたにすぎないじゃないか！

「――っ」

齒を食いしばって、滲んでくる視界に抵抗した。

「俺と大助が行く。皆は先に戻れ」

リーダーらしい、体格のいい男が言った。見覚えのある顔だった。尚子たちを捕らえた男だ。

泉に、男たちが運んできた盥が二つ並べられ、その一つに娘は乗せられた。その後、二人の男が、それぞれの盥に一人ずつ乗った。他の村人から、^{かい}櫓（※オールのこと）が渡され、二つの盥は対岸へと進みだした。

残された村人たちは、その盥が向こう岸にたどり着くまで見守っていたが、やがて、もと来た道に戻っていった。

再び泉に平穏に戻る。優雅に落ち葉が舞い、着水した音が、尚子の耳に聞こえた気がした。

尚子は立ち上がり、向こう岸を見る。

「生け贄ですかね……」

小春丸の声がかすれた。普段、テキトーで軽口ばかりの小春丸もこの時ばかりは、動揺を隠せなかったようだ。

「――」

尚子は無言で向こう岸を睨み付けたまま動けない。その瞳には、もう涙も弱音もない。

――助けたい！

きっと、こうなることを、知っていて、それでも自分たちを救ってくれたのだから！

このまま、屋敷にもどって、のうのうと暮らすことなど私にはできないっ！

ぐっと拳を握りしめ、決意の表情で小春丸を振り返る。

小春丸は何も言わずに尚子を見つめ返した。そして、肩をすくめ、やれやれと言うように首を左右に振る。

「止めたって無駄なんでしょ、どうせ？」

尚子は、こくりと頷いた。

「俺は、手を貸しませんからね。何があっても」

「かまわない。だが――」

にやりと口端を上げてから、尚子は続けた。

「――知恵は貸せ」

小春丸は顔をひきつらせ、密かに思った。尚子は殿様に似てきてないか？ と……。

・ 8 ・ せざるを得ない理由（1）

8 せざるを得ない理由

「知恵を貸せっっていわれてもねえ——姫さま泳げるの？」
「わからない」

真顔で答えた尚子の顔を見ながら、小春丸は頬をひくつかせた。
思った通りだ。

だが、尚子は、深さもわからない大きな泉を目の前にしていると
いうのに、平然と続けた。

「泳いだことがない。だからわからない」

「そうですよね。泳いだことがないから、わかりませんよね。で
も、それを人は泳げないと言うんですよ？」

「ならば、泳げない」

「はっはっはっ。素直なことで」

（居直りやがったな）

思わず、小春丸は舌打ちした。

きっと、教えてもらえれば、なんとかなるだろう。そう思っ
てのことではない。

実際、尚子の運動神経の良さは、祖国の家臣たちから定評があった。だから、初めてだって、このくらいの泉は泳いで渡れるにちがいないと思っていた。だって向こう岸はすぐそこに見えてるんだから、と。

だが、そんな浅はかな考えは、小春丸には全部お見通しだ。

（おおかた、乗馬の練習で、「姫さまは女にしておくのが惜しいですな！」とかなんとか誉められまくったんだろうよ）

祖国の家臣が誉めるのは当たり前だ。家臣なのだから。自国の姫を「なんて不器用な姫様なんだ、まるでなっていない」なんてけなす家臣なんて聞いたことがない。

それに気がついていないということが、甘い。

所詮、“箱入り”の姫。どんなにお転婆で、じゃじゃ馬で、無鉄砲だとしても、箱の外を知らない。

箱の中で自分がいかに、危険から、悲しみから、傷つけられないように手厚く守られて生きてきたか知らないのだ。

（それを、どーやって俺ひとりで守れって？）

地の底まで沈み込みそうな深いため息をついて、わざとらしくしやがみ込んでみせた。

「姫さん、顔洗うくらいで、水に顔つけたことないだろ」

「ない」

「水の中って息できないの知ってるー？ 苦しいんだよー？」

「ばかにするな。そのくらいは知っている」

「……………今は秋。水も冷たいよー？」

「……………耐える」

「着物は水を吸って重い。泳ぎなれてても溺れることだってあるー

「わかってんの、姫さま？」

さすがの尚子も、言葉が出なかった。

「それでも――」

そこで言葉を切ると、小春丸はまっすぐに尚子を見た。

「それでも行くんすか？ 向こう岸に泳ぎ着いても、男二人を相手にしなきゃなんない。それでも助けにいくわけ？ たった一人で、そうまでして、行かなきゃなんないの？」

畳み掛けるように質問を浴びせた。現実を突きつければ、諦めてくれるのではないかとちょっとは期待していた。だが、尚子の瞳は、一つ、また、一つ、問いかける度に力強く輝いていく。

「それでも、だ。――あの娘も、自分の命を危険にさらしてまで助けてくれたのだ。放置することなどできない」

「……」

尚子に表情には迷いが感じられなかった。

迷っているのは小春丸の方だ。ぽりぽりと頬を指でかきながら、視線を反らした。

確かに、この姫の度胸には感服する。馬鹿でもない。むしろ聡いほうだろう。

しかし、自分が命を懸けて守るに値するかと問われれば、全力で首を横にふる。こんな無鉄砲な主君の護衛など、命がいくつあってもたりない。無事に屋敷に帰りついたら、何がなんでも、明日からの護衛を辞退させてもらおうつもりだ。

でも――。

（姫さまの言ってることも、今回だけは、ありかなあーとかも思うんだよなあ。あんなにボコボコにされたところ見ちゃうと、後味わるいし。かわいそーだなあーとか思う。思うけど――それでまた俺が死にそうになるのはごめんだし。俺以外の誰かが、あの娘を助けてくれれば、なーんも言うことないんだよなあ）

独りごちながら、ちらりと尚子の顔を見る。その眩しいほどの目の輝きに、負けた。

「わかりましたよ……」

この姫は、本当に、助けに行くつもりだ。本気も本気。きっと何か作戦があるわけでも、勝算があるわけでもないに違いない。ただ、助けたいという思いだけの、無謀な賭けだ。

（でも――）

もし、本当に一人で娘を助けて帰ってきたら。

（――そしたら）

そこまで、やりとげられたら、それはすごいことなのではないだろうか。同時に、そこまで無鉄砲で怖いもの知らずを突き通し、わがままに生きて、生き抜く力があるということは、実に素晴らしいことではないだろうか。

「……わかりました。溺れないで向こう岸に渡れる方法を考えましょーかね」

でも、と小春丸は思う。何だかんだ言って、自分は単に、この姫に仕えるための言い訳を自分にしたいだけかもしれない、と。



そよ風が木々の間をすり抜けていく。その風の中心には、常人の目に留まらぬ早さで駆け抜けていく3つの人影があった。

先頭を行く二つは後ろに続く小柄な影を気遣うように道を選んで進んでいく。

不意に、小柄な影の足が、ぴたりと止まった。

先頭の二人も足を止め、背後の妹を振り返る。寝ぐらにしている洞穴は、すぐ目の前だというのに、妹は来た道をじっと見つめたまま動かない。

「――行こう」

「……」

「小夜」

兄には、妹が後ろをしきりに気にする理由がわかっていた。

先ほど、泉にいた人間とは別の人間の匂いが近づいてくる。匂いは3つ。泉を渡り、こっちに向かってくる。

でも、それは珍しいことではなかった。

人間たちは、たまにあの泉を渡り、こちら側に侵入する。だが、ここまでたどり着いたものはいない。

何故なら途中の崖に用があるからだ。人間の身長3人分の幅の崖で、自分たちには軽く飛び越えられる距離のものが、そこに彼らは自ら飛び込んで死んでいく。正直、理解に苦しむ。

落ちた死骸を、低級な野良犬どもが騒ぎたて、食い荒らし、こちらの縄張りを汚すのもいい気がしない。

人間たちが何をしたいのか、さっぱりわからない。

「小夜」

もう一度、促すように妹の名を呼んだ。

「あの娘が……まだ泉にいる。なぜ立ち去らないの？」
「娘？」

「待って……こっちに来ようとして……いる？」

「小夜」

「やっぱり、近づいてくる」

兄には、何故それほどに、妹があの人間を気にするのか理解できなかった。

「どのみち、泉を渡っても、崖から先には進めない。心配するな」
「でも」

「小夜。おかしいぞ。どうしたというんだ。泉にいたのは人間だったのだろう？」

「人間だった」

いい終えて、初めて妹が兄を振り返った。

「でもただの人間ではない！ 妖気を纏った人間だった！」
「妖気を纏っていても、人間は人間。我ら妖とは違う」

言った瞬間、妹の瞳が刃物のように鋭く光った。

「そう。あの娘は、人間の器に妖気を宿していた。だから——確かに、朧や朝霧たち妖とはちがう！ 人間でも妖でもない、私みたいに！」

少女の兄と姉の顔が、同時に、はっとなった。その隙に、もと来た方へと少女が駆け出す。

「小夜！」

兄と姉の声が重なった。

・ 8 ・ せざるを得ない理由（2）



そよ風よりも速い速度で、妖の少女が再び自分たちに接近していることなど、まったく知らない小春丸たちは、泉を前にすでにお手上げ状態だった。

泳げない尚子をも、向こう岸に渡す方法を考えに考えたが、手ぶらな状態では、できることなど限られている。

とりあえず、運べそうな倒木はないか近辺を探すも、世の中、そんなに甘くない。

ならば、落ちてる枝でも集めるか？

村に戻って何か探すか？

さすがの小春丸も、自分の命がかかっていないからか、妙案が浮かばない。

尚子がこのまま諦めてくれないかな、という思いが捨てきれないままだから、浮かばないのも当然かもしれない。

次第に、尚子に焦りの表情が見え始めてきた。

このままでは、いたずらに時間だけが過ぎ、助けられるものも助けられなくなってしまう。そう思ったのだろう。

ふいに、尚子は、意を決したように、泉に向き直り、言い放った。

「もうよい。泳ぐ。簡単に、泳ぎ方を教えてくれ」

「は？ 無茶苦茶なこと言わないで下さいよ。無理無理」
「やってみなくては、わからないはずだ」

小春丸は、なんの冗談かと、尚子の言うことをまったく、本気にしなかった。

だが、次の瞬間、ぎょっと目をはる。

「ちよっ！！」

叫び、慌て尚子に背を向ける小春丸。

小春丸が驚くのも無理はない。尚子が突然、自分の着物を脱ぎ始めたのだから。

「ななななにやってるんですかっ！」

「だから泳ぐのだ。着物は泳ぎの妨げになるのであろう？」

そう言う間も、背後ではするすると絹の擦れる音がしていた。小春丸の心臓は破裂しそうなほど、脈打っている。

（なんだこれ！！ ヤバいつて！！ 見ていいの？ 見ちゃっていいの？ いやいやいや、バレたら絶対殿様に八つ裂きにされて鳥の餌にされるって！！ 耐えろ俺！！）

頭をぶんぶん振り回して、煩惱を振り払おうとしていると、じゃぼん、という水音がして、我に返った。

「えっ？」

ぐるんと、体ごと首をひねる。

まず脱ぎ捨てられた着物の脱け殻に目がいく。そして、その中身

は、すでに水中に膝辺りまで浸かっていた。

形のよい尻、そこからすらりと伸びる足に釘づけになり、小春丸は思わず息をすることを忘れた。

頭も真っ白だ。

そんな小春丸のことなど、眼中にない尚子は、背を向けたまま、艶かしい真っ白な肌を、滑らすようにして、ずんずん進んでいく。一足ごとに尚子の体は水中に飲み込まれていった。

「けっこう深い……」

すでに、尚子の体は肩まで浸かっているのだが、向こう岸は遠い。

「歩ける深さはここまでのようだな」

そう呟く尚子の声が聞こえたようなきもした。
それどころではない。

今、何が起きてるんだ？
夢でも見てるのだろうか。
自然と小春丸の喉がごくりと鳴った。

「小春丸、泳ぎ方を教えてくれ」

「――」

「小春丸？」

呆然となった小春丸は、返事をすることもできなかった。

なんなんだ、この姫は。
本当に姫なのか？

普通の姫は、人前で素っ裸になるものなのか？

いや、誰かに聞くまでもない。

そこらの村の娘だって裾がはだければ恥じらいを見せる。

その前に姫という生き物は、素っ裸どころか、指先やその素顔ですら人目にさらすことを拒むものだとして認識していた。

確かに姫の知り合いは、他にいないから比べられない。だが聞いた話では屋敷の奥の奥で、沢山の布で姿を隠し、扇で顔を覆っておほほ、と暢気に笑っているものであるはずだ。

それなのに、裸体で目の前にいるなど、あり得ない！

「あんたって……」

声が掠れた。

身分とか、女であるとか、恥とか、自尊心とか、そんなものより、彼女にとっては、今、あの娘を救うことの方が大切なのだ。

助けたい——ただその心に従い、そのために着物と一緒に“姫”という身分をも脱ぎ捨てた。

ただの一人の人間として、自分の受けた恩を返す——いや、それすら考えていないかもしれない。

目の前の消え行く命を助けたい。本当にそれだけなのかもしれない。

（なんてやつだ……）

心の中で呟いたら、ゾクゾクと身震いしそんな寒気を覚えた。

何がそこまで、この姫を突き動かしているのだろうか。
ただ者じゃない。

ただの無鉄砲で世間知らずな姫じゃない。

この姫なら、何かを変える力を持っているかもしれない。不可能を可能にする力を。

知りたいと思った。

この華奢な体に秘めた強い意思の源を。

自分の知る支配者とは、どこか優先順位の違う価値観を持つこの非力な娘の向かう先を。

ふっ、と小春丸の顔に笑みがこぼれる。

（参った。参ったよ、殿様——あんた、たいした男だ。こんな色気のない小娘に惚れた物好き扱いして悪かった）

この時、小春丸は、女性である尚子ではなく、同じ人間として、惹かれ初めていることを、はっきりと自覚した。

「あーあ、負けたよ。完敗だ」

言いながら、小春丸は、するすると自分の着物を脱ぎ始めた。

今度は、ぎょっとしたのは尚子の方だ。戸惑ったように目をそらしてから、間を置かずにくるりと背を向けた。

「そうそう。そのままこっち見ないでね——それから、姫さま、そのまま泉を渡るつもり？」

「……そうだ」

「もし、向こう岸まで泳げたとしてさ、素っ裸であの男二人の前でるわけ？」

「……しかたあるまい」

「そんなことしたら俺が殿様にぶっ殺されるんだけど、いいわけ？」

あの娘は助けて俺は見殺し？ ひどくねー？」

ついに糸纏わぬ姿になった小春丸は、泉にじゃぼじゃぼと入り込み、水面を波立たせた。

思った以上に、泉の水は冷たい。つい、声を上げそうになった。

「まったく、そこんどこ考えてねーだろう？」

にやりと含み笑いを浮かべながら、ついに、小春丸は尚子の隣に並んだ。ため息混じりでそう言い終えたのに、勝手に顔が緩んでしまう。むしろ、尚子には嬉しそうに見えたかもしれない。

「そんなことは、私がさせない。お前に罰を与えるなど、私が言い聞かせる」

「甘いよ。そんなんで殿様は納得したりしない」

小春丸は、ふっ、と優しく笑いかけ、尚子をじっと見つめた――胸元は見ないようにして。

（どっからどう見ても、まだまだ発育途中のガキなんだけどなあ）

「あんたがイイ女に育つのを側で見てたくなった」

「え？」

「いや――…姫さま、よく聞いてくれよ」

すーっと笑顔を引っ込め、小春丸は真顔になる。

「俺は、期待されたり、あてにされるのは嫌いだ。そーゆー態度は、イライラするし、他力本願な奴を見てると、胸糞悪くて吐き気がする」

「――」

「けどな、自分の限界をぶち破って何とか前に進もうともがいてる奴は、嫌いじゃない。――正直、俺はあんたの生き方は、本当に不気味で愚かだと思うし、真似したいとは思わない」

尚子の顔が徐々に陰っていく。それでも、目をそらすことなく小春丸の声に耳を傾け、見つめ返すその瞳は輝きを失うことはない。

「誰だって損得勘定で、動くのが普通だろ？ でも、それを軽く凌駕するほどの、意思の強さと行動力は、誰でも持ち合わせてるものじゃない。――だから、これは俺の意思だ。次を期待するなよ」
「意味がわからない。何が言いたい？」

「つまり、こうだ。――俺は泳げる。俺が、さっきあいつらが乗り捨てていった盥を、向こう岸まで取りに行つてやる。姫さまはそれに乗って向こう岸まで渡ればいいってこと」

「えっ!？」

「だから、さっさと岸に上がって服を着ろよ。姫さまの裸体は、あんたが思ってるより、貴重なんだぜ？ 何てったって俺の首がかかってんだからな」

言い終わるが早いか、小春丸は泳ぎ出した。

泳ぎながら、自分も甘いと思う。

でも、この自分に、ここまでしてやろうと思わせるというのも、一種の才能であろう。

唯一、男として負けたと思ってる将門にだって、命令されたこと以上のことをやろうとは思わないのに。

しかたない。

ここまでさせる、してやりたいと思わせる、何かが尚子にはあったのだから。

背後で、尚子がちちらをしばらく眺めてから、岸へと引き返し始めたのが水音でわかった。

尚子も小春丸も、肌を撫でていく水が、氷のように冷たくて、すでに足の先が冷えきっていたが、それを打ち消して余りある暖かさと喜びを胸の奥で感じていた。

・ 9 ・ 飛翔（1）

9 飛翔

尚子が、どうにか泉を渡り終えた頃、村の娘を生け贄に捧げようと、二人の男が崖を目指して獣道を進んでいた。

ふいに、全身の痛みで、娘は意識を取り戻した。

まず、娘が見たのは誰かの大きな背中。なんとか首を動かすと、天地がひっくり返って見えた。自分が俵か何かのように、片肩に担がれているのだとやっと理解した。

ゆらりゆらりと、男が歩くたびに自分の体が揺らされ、骨が砕けるほどの痛みを感じた。

ふと、自分を担いでいた男が足を止めた。

「ついたぞ」

思いの外、丁寧に、地面に下ろされた。娘は村人たちに殴られて腫れ上がった脛を、少しでも持ち上げる。そこで初めて、担いでいたのが大助だと気がついた。

無表情だった大助の瞳が揺れる。

可哀想だが、仕方がない。わかるな？　そう、言ってるような気がした。

草木がざわめいた。男たちがビクリと体を震わし、辺りを見回す。

それなのに風は感じなかった。

「……急ごう。気味が悪い」

一緒に来た小六が、大助を促す。

大助の視線が再び娘に注がれる。目が合った。もう、大助からは、迷いも、哀れみも感じ取れなかった。

大助が、そっと娘の体を持ち上げた。その手の平から、敬意が感じられた。

さっきまでのように、ぞんざいな扱いではない。緊張が伝わってくる。この地の神々に対峙している、そんな畏怖からくるのかもしれない。

崖から、冷たい風が駆けあがってきて、娘の髪を揺らした。

——ああ、私はこの崖から投げ捨てられるのだ。

まるで人ごとのように思えた。

怖くはない。

悲しくもない。

ただ……思うのは、母のこと。

閉じた瞼の裏に、凜とした母の顔が浮かぶ。

自分に輪をかけて気が強い母。泣き顔を見たことは一度もない。弱音や愚痴一つ溢したこともない。

——母さんは、泣かないだろうか……

悲しまないでほしい。

私は、あなたの娘に生まれてきたことを誇りに思う。

あなたの教えを胸に、このまま大地に帰る。

寂しくなどない。

私の体は草木となって、魂は風となって、あなたの元へ帰るのだから。

ずっと側にいるのだから。

ただ――一緒に笑い合うことはできない……それが、心残りだよ、母さん……。

娘の頬を、一筋の雫が伝う。

大助が、娘を高々と掲げた。

「森の犬神たちよ。怒りを鎮めたまえ――」

その瞬間、森を風が駆け抜けていった。まるで、木々が大助の声に答えたように……。

その頃、尚子は全力で走っていた。

泉から崖は、人一人がやっと通れるほどの獣道で繋がっていた。

尚子は両脇から迫る木の枝を分けながら、全力で走っていた。

走りながら、ぱっと目についた太めの木の枝を素早く拾う。

足を止めることなく、棒の感触を確かめた。ずっしり、重い――

使えるかもしれない。尚子の瞳に強い光が灯る。

作戦なんてない。

男二人を相手に、勝てる自信もない。

でも、助きたい!!

助けて見せる!!

唇を噛みしめた時、目の前に生い茂る木々がいつきに開け、獣道が終焉を迎えた。

(――っ!!)

目に飛び込んできたのは、筋肉質の男が、娘を天高く持ち上げている光景だった。

何も考えずに、尚子は地面を蹴る。男だけを目指して、駆けた。

まるでそこだけ、時間の流れが遅くなったように、一瞬一瞬が止まって見えた。

一歩近づく度に、男の腕がゆっくり下ろされていく。

尚子は握りしめた木の棒に、力を込め、振り上げた。

尚子の気配に気がついた二人の男が、体ごとこちらを振り返ろうとした。しかし、その時には、尚子の振りおろした棒が、大助の頭部に直撃していた。

強打された大助の体がぐらりと揺れる。娘を抱えたまま、尻もちをつくようにして崩れ、そのまま気絶した。

「お、お前は!!」

もう一人の男、小六が叫び、後ずさりした。

その瞬間、小六の体が崖の方へ大きく傾いた。足場が崩れ落ちて、

小石がカラカラと音を立てた。

尚子は反射的に小六の腕を掴み、自分の方へ引いた。

小六が地面に転がるのと、その反動で、尚子が崖の方へ吸い込まれていくのが同時だった。

前傾姿勢のまま、ついに、尚子の両足が地面から離れた。

「――」

翼のように、尚子の着物の袖がはためく。

飛んでいる。

空を飛んでいる。

崖の下から吹き上げる冷たい風を、全身に浴びてそう思った。

自由落下が始まる直前。

「姫さまっ!!」

悲鳴のような小春丸の声を聞いた気がした。

尚子の体は、崖へと引き込まれていった。

・ 9 ・ 飛翔（2）

尚子の聞いた声は空耳ではなかった。確かにその場に小春丸はいた。

尚子が無事に対岸に渡した後、ぶつぶつと不満を垂れ流しにし、自分に可能な限りの言い訳をしてから、結局、冷たい泉を再び泳ぎ、追いかけてきた小春丸は、崖にたどり着いた瞬間凍りついた。

尚子が赤の他人を助けるために、崖から転落しようとしている、まさにその瞬間だったからだ。

「姫さまっ!!」

間にあうわけもないのに、崖の淵に駆け寄って、手を伸ばした。

小春丸の右手が、落ちて行く尚子の長い黒髪の手をかくす。

はら、はら……。

まるで舞うように、ゆっくりと黒髪が落ちていくのがはっきり見えた気がした。

「――――」

空を切った自分の右手を見つめたまま、小春丸は動けなくなった。

（――――え……？）

何が起こったのかわからなくて。

ただ、無言で自分の右手の平を見つめた。

（――うっそだろ!?）

落ちた。

尚子が落ちた!!

尚子が死んでしまう!!

その現実を受け入れたのとはほぼ同時に、頭から氷水を浴びせられたような衝撃が全身を駆け抜けた。

崖の向こう側から、突風が吹いたのはその時だった。

その強烈な風圧に、思わず目を瞑りそうになるのを、何とか堪えて、目を凝らした。

（――!?）

突風かと思えば、違う。風の中心に紫色の大きな影があり、まるで尚子を追いかけて崖を落ちていくように見えた。

ついに、影は尚子に重なった。そして、そのまま兎のように跳ねながら、崖を上がりはじめたかと思えば、あっという間に、対岸の崖の上へと軽やかに舞い降りる。

影が静止したことで、やっと小春丸にもその影の正体を視野に捉えることができた。

紫色の影――狼だった。人の三倍の体高はある、大きな大きな狼だ。

「――」

唾を飲み込もうと試みたが、できなかった。

恐れと畏れが同時に、洪水となって押し寄せてきて、小春丸は、ぺたりとその場に座りこんでしまう。

「……………犬神様……………犬神様がいらした……………」

はっとして声の方に首を回すと、すぐ隣で、尚子に命がけで助けられた男——小六が、がたがたと体を震わせながら這いつくばるように、逃げようとしていた。

小春丸だって恐ろしい。悲鳴を上げて、全力でここを離脱したい。だが、その極度の恐怖より、驚きが僅に勝ってるから、そうしないだけだ。

再び視線を崖の向こうに戻すと、どこから現れたのか、狼の横に少女が立っていた。あの、泉で出会った妖の少女だ。

少女は、そっと狼の顔に手を差し伸べた。すると、狼はそっと口を開け、加えていたモノを地面に下ろす。

———姫さま!!

小春丸は思わず腰を上げた。

尚子は、異変に気がつき、頑なに閉じていた瞼を開けた。確かに背中に地面を感じた。わけがわからず、答えを求めて視線が彷徨う。

———いったい何が起きた？

体を起こし、どこも痛くないことを確かめる。

（私……崖から……落ちたはずでは……）

首を傾げながら、手を開いたり閉じたりしてみる。やはり痛い。

どうということだろうか？　と思っていたら、頭上から声が降ってきた。

「お前は、何者だ」

反射的に声の方を見上げる。琥珀色の円らな瞳が尚子を見下ろしていた。

「そなた……先ほどの……」

泉で出会った妖の少女だった。と、認識すると同時に、彼女の顔越しに獣が見え、尚子の顔が強張る。

光の加減で藤色にも銀色にも見える毛並みは、絹糸のように滑らかで柔らかそうだ。風で揺れる度に輝き、目を細めなくなる。

だが対照的に、黒い舌、裂けた口、少女の頭ほどの大きさをした赤い目が、尚子を縮み上がらせた。

見上げていたら、狼の血走った目がギロリと尚子を睨み付けてきた。

一瞬で息ができなくなるほどの恐怖が襲ってきて、嫌な汗が吹き出す。

————おまえなど、いつでも殺してくれる。

そう言われた気がした。

「答えよ。お前は、何者だ」

少女が再び口を開いた。

「――」

巨大な妖を前にした緊張と恐怖で、尚子はごくりと喉を鳴らすのが精いっぱいだった。

汗が脇を伝う気持ち悪い感覚。からからの喉。足元から全身の毛が逆立つようにして、全身が警告している。

「答えぬ気か」

しびれを切らしたのか、少女の眉尻が微かに上がった。

無言のまま、少女の真っ白い小さな右手が、尚子の方に伸びてくる。尚子は動けなかった。

ただ、近づいてくる、少女の指先を目で追った。

少女の人差し指と中指の二本の指が、尚子の額に接触した瞬間。

（――！！）

雷に打たれたように、激しい衝撃が全身を駆け、尚子の体がびくつき、硬直した。

硬直し続けながら、徐々に体から力が抜けていくのがわかった。めまいを覚え、頭が朦朧としてくる。

まるで魂が奪われているのではないかと怖くなってきたが、どうすることもできない。急速に忍び寄ってくる死を感じた。

途切れ行く意識の中で、尚子の脳裏に浮かぶのは、あの男の顔。

子供のように無邪気で、荒々しい男。

——『この国をおまえにやる。俺はこの国を大きくする。民が生きていることに絶望し、生まれてきたことを悔やむような国にはしない』

あの男は言った。この国の悲惨な有り様を目にした上で、そう言った。

あの時は自分に自信があるから、だと思った。あの黒々と光る瞳に惹かれ、あの男なら実現できるかもしれないと思った。

本当にそうなのだろうか。

あの悲惨な村を見て、心が折れずに再建を民に約束できるほど、あの男は強い男なのだろうか。

——『おまえの力が必要だ』

これこそが、あの男の本心ではないだろうか。

側にいてくれ。

再建する理由になってくれ。

諦めるなど尻を叩いて、最後までやれると励ましてくれ。

——そうでなければ、心が折れそうだ。

それが本心ではないだろうか。

(こじ…………ろ……)

帰らなきゃ。

あの男の元へ。

他の誰もが自分を疎んだとしても。

あの男が私を必要とするかぎり、私はあの男と共に生きる――。

突如、「――何!？」と少女が驚きの声を上げたような気がした。
ついに尚子の意識が途切れる瞬間、尚子は常人には見えない眩しい光に包まれていた。



人間の娘が放った眩しい妖気に飲み込まれた小夜は、気がつくと靄もやの中にいた。

わかっている。これは、あの娘に残された泡雪の力だ。

幻影を見せ、心を喰う妖——泡雪。

ここは、泡雪の作りだした幻影の世界なのだろう。きっと、娘の身に危険が及んだことで、泡雪の力が爆発し、この世界に取り込まれたのかもしれない。

これで、はつきりした。

泡雪は確かに、この人間の娘を助けようとしている。

「泡雪……いるのか」

小夜は、四方を見渡した。どこかに泡雪の思念が残っているに違いないと思ったのだ。

すぐに小夜の視線が、靄の濃くなっている場所を目ざとく見つけ出した。

「泡雪」

小夜は確信を持って呼びかけた。

「面白いものが喰えたと思うたら——この匂い……隴の娘か？」

徐々に隴は人型を成していく。

「それに、お前にはヒトの血が流れているな。ヒト臭いわ。——血迷うたか、隴も。ヒトを喰わずに、子を成すとは」

ついに、若い男が姿を見せた。腰まである銀の絹糸のような髪を一つに束ね、真っ白な着物を着ている。その中性的な美しさには、どんなヒトも一瞬で目を奪われてしまう。実際、泡雪がヒトを“狩る”時、ヒトの女にも男にも、むしろその相手の望み通りの姿に自在に姿を変えることが出来た。

「隴を侮辱するな」

小夜がギロリと睨む。男は、口端を上げた。

「泡雪——お前こそ、人間に肩入れしているではないか」

「気になるのか？」

くっくくく、と泡雪が笑う。そのたびに、柔らかそうな銀の髪が、煌めきながら肩から滑り落ちた。

「……………この娘は、ただの人間なのだろう？」

「そうさ。ただのヒトの子よ」

「ならばなぜ——」

泡雪が、ふわりと優しく笑った。だから、言葉を続けられなかつ

た。

「なぜだろうな」

「……………」

「ヒトは弱く愚かな生き物よ。単独では何一つできぬ。我らならば、ちよつと指先でつittedただけで、殺すことができよう。それに、我ら妖に比べたら、ヒト命は実に短い。あつと言う間に、死んでいく」

泡雪はどこか一点を見つめたまま、どこか寂しげに続けた。

「だが、私は、ヒトがうらやましく思えたのだ」

「…………うらやましい？」

ふつ、と口元を和らげ、泡雪が頷く。

「これを、寂しいとヒトは言うのだろうか。私は、ヒトを喰らううちに、ヒトに近づき過ぎた。いつのまにやら、私がヒトに喰われていたのやもしれぬ」

ヒトの心に触れるうち、自分にも芽生えた心——……。

寂しさや、悲しさや……愛しさ……。

泡雪は、胸元を抑えながら静かに目を閉じた。

「朧の娘、お前もここに感じるのだろうか？　ここが熱くなったり、痛くなったり、苦しくなったり、ざわつくことがあるだろうか？」

小夜はぎくりとなった。

確かに、小夜は感じていた。

あの娘に出会ってからというもの、胸がざわついてばかりだ。

「凶星か。その、ざわつきはヒトのものだよ」

「――」

「ヒトはその心が邪魔をして、時に考えられぬ行動をする、実に面白い生き物だ。見ていて飽きぬぞ？」

「――」

「腹が減っているのに、拾ってきた白い野猫に食い物を与えたり、泣きながら飼い猫に、夫がどうの、新しい妻がどうのと、愚痴り続け、泣き疲れて寝たり――怒って泣いて、また笑って……実に忙しい生き物よ」

再び、くくくと泡雪は笑いだした。なんだか嬉しそうだ。

だが、すぐに泡雪から笑顔が消え、何かを思い出したように、遠い目になった。

「……やっと子を成して、あんなに笑っておったのに、あっさり死によって……」

小夜は、はっとなった。

「あの人間の娘はまさか！」

「おいおい。私はヒトを孕ませる趣味は持ち合わせておらぬよ。あのヒトの子は正真正銘、ヒトの子よ」

「違うのか？ ではなぜだ？ ますます分からぬ。それほど、なぜあの娘に固執する」

「なぜだろうなあ。私にもわからぬよ。ただ……もう少し見ていたかったのう」

アレが笑っている姿を。

あの華のように笑う、アレの笑顔を――。

不思議と、小夜には泡雪がそう言ったような気がした。

「もしや、泡雪が執着しているのは、あの娘の……」

小夜の呟きに、泡雪は声なく笑っただけで答えなかった。その表情で、泡雪にはもうこの話を続けるつもりがないのだと悟る。

だから小夜は、黙って泡雪の顔から答えを探した。

泡雪があの子に肩入れするのは、その母親に執着しているからにちがいない。だがその理由がわからない。

妖の中には、親兄弟など関係なく、死闘を繰り広げるものも多い。力が全てであり、弱いものは強いものの餌食となる。小夜たち兄弟のように、群で生活しているのは希だ。

まして大妖怪たる泡雪が最弱の、しかも食餌である人間と共に生活するとは考えられない。

どこでどう人間の娘に接触し、その子供までも守ろうとするほど執着するに至ったのだろうか。

あの娘をよくよく観察すれば答えが見つかるのだろうか。

静かに泡雪を見詰めていると、ぱちりと目が合った。慌てて、怖くなって目をそらす。

泡雪の目は怖い。

透き通った泉の水鏡のように、美しすぎで怖い。
すべてを見透かされそうで怖い。

「なあ、臃の娘」

呼ばれてギクリとなるのを何とか堪えた。何事もなかったように、

どうにか泡雪の瞳をにらみ返す。

「お前は、ヒトの子か？ 妖の子か？」

「なっ……何を言う、私は朧の娘だ！」

「——質問を変えよう。ヒトの子として生きるつもりか、妖の子として生きるつもりか？」

胸のあたりを、鋭い牙でえぐられたような痛みが走った。

あまりに胸が苦しくて、痛くて——息が詰まる。

——『お前はヒトか妖か？』

泡雪の声が、脳内を反響し続けた。

自分はヒトでも妖でもない。

それは小夜にだってわかってる。

そして、それはここずっと小夜が抱き続けていた疑問だったのだ。

「お前たち妖狼は、仲間意識が強いからな。今のように朧のもとにいれば、他の妖に喰われることなく、その短い命を全うすることも出来よう。朧に守られて生きて行けばよい。だが——」

それは、同時にヒトの子として生きていくこともできるぞ——。

泡雪は、目でそう語りかけている気がした。

「そのお前の胸のざわつきを、本当のお前を、真に理解できるのは朧たちではないぞ」

小夜の瞳が泳ぐ。

「まあ、選ぶのはお前だ、朧の娘よ。好きにするがいい」

ゆっくり考えろ。

そう囁く泡雪の目が、どこか暖かくて。

今まで抱いていた、母の命を狙う危険な大妖怪という印象が、間違っているような気がしてきた。

母が泡雪の話をするときの目とどこことなく似ている。

泡雪が纏う気配は、殺意でも、敵意でもない。

何か眩しいものでも見ているような、心底安心している時のような――そんな瞳だった。

「そろそろ時が来たようだ」

「え？」

「お前の力に抵抗するのに、私の残り少ない力を使い果たした。だが、この娘ももう、自力で生きて行けるだろうよ」

「泡雪は……本当に死んだのか？」

ふっと泡雪は柔らかく笑った。

「言ったであろう？ ヒトがうらやましいと」

だから、泡雪は自ら死を選んだ。ヒトを喰らうことを止め、妖力が日に日に弱っていても、それでよかった。

「もう飽きたのよ」

「生きることには？」

「違うな。アレのおらぬ、この世界に……お前ならいつか解るやも知れぬな、この言葉の意味が」

「あの娘の側にいればか？」

「まあ、お前の兄、朝霧といったか、あやつが許さぬだろうが。ま

まったく誰に似たのやら———そうそう、朧に伝えてくれ」

返事の代わりに小夜は、微笑む泡雪を見つめ返した。

「『結局、お前ほどの“いい女”は居なかった』とな」

返事する間もなく、泡雪の周囲の靄が濃くなり、あっという間にその姿を飲み込んだ。

瞬きをした後には、小夜は現実世界に引き戻されていた。



「小夜？」

心配そうな兄の声で、小夜は我に返った。

慌てて尚子の額から自分の指を引き離す。すると、小夜の妖術から自由になった尚子が、力なく崩れ落ち、ぐったりと地面に横わった。

尚子は、かろうじて生きている、といったところだろう。尚子を包んでいた泡雪の妖力はとっくに吸いきり、尚子自身の生命力も残り僅かな状態だった。

自分でも気がつかないうちに、小夜はほっとしていた。

「どうしたのだ？」

かすかな異常を感じ取ったのか、兄が小夜をのぞきこんできた。泡雪とのやりとりを、兄に伝える気には、どうしてもなれなかった。

「……何もない」

兄の大きな瞳にちらりと視線を送ってから、その視線から逃げるように大空を仰ぎ見た。

兄の目は、泡雪の目に似ている。

「萌葱^{もえぎ}」

小夜の声に、どこからともなく、一羽のメジロが小夜の目の前に現れた。

「帰すのか？」

兄の問いには答えず、小夜は、ぱんっ、と両掌を胸で打ち鳴らした。体の妖気を自分の掌に集中させた。合わせた手の内が、しだいに輝き始めるのが、瞼を閉じていても分かる。

程良きところで小夜は、ぱちりと目を大きく開け広げ、合わせた手を丁寧に開きながら、そこに、ふーっ、と息を吹きかけた。

すると、まるで無数の蛍が飛び立つように、光の粒が舞い上がり、メジロに降り注ぐ。見る見るうちにメジロは何倍にも大きくなっていった。

それを見届けると、再び小夜は尚子を見下ろした。

「二度と我らの前に、現れるな。次は殺す」

言いながら、身動き一つしない尚子の体を妖力で空中に持ち上げ、巨大化したメジロの上に乗せてやる。その間も尚子は体中から力が抜けたように、手足がだらりとなって、なすがままに空中を移動した。

気絶しているらしい。それもそうだろう。あれだけ、生命力を吸い取ったのだ、並みの人間ならば、しばらくは起き上がれないはずだ。

目が覚めた時には、自分のことなど忘れているだろう。

いつもそうだ。

人間は、自分の理解を超えたことを目の当たりにすると、無かったこととして記憶から消去する。

(それでいい……忘れてしまえばいい)

そう心の中で呟いたら、口の中いっぱい苦いものが広がった。すると、その時少しだけ尚子の指が動いた。そればかりか必死に何かを訴えようと、声にならない声が漏れ聞こえる。

「っ……」

小夜は、尚子が気を失っていないことに、まず驚いた。たいした精神力だ。

無言で見下ろしていると、痙攣しながら尚子の人差し指が僅かに持ち上がっていくのに気がついた。尚子が何かを指し示そうとしているのは明らかだった。

小夜はそのまま指の先を目で追う。崖の向こうで、尚子を気遣うような表現を見せつつ、どうしてよいかわからずに棒立ちしている男と視線が交差した。

あの男も一緒に連れ帰れというのだろうか。

(——なんと呆れた娘だ。喰おうとした私に令ずるのか)

その図々しさに小夜は苛立つ気にもならなかった。

それをただ伝えるために、意識を手放さずに耐えているのだろうか。

それに——。

(私が、それに従うと本気で思っているのか?)

小夜はじっと尚子の瞳を見つめた。

眠くて仕方ないのだろう、瞼が半分降りているが、真っ直ぐにこちらを見つめ返している。まるで挑むように。

先に視線を反らしたのは小夜だった。

「……………この娘の意思に沿うてやれ」

小夜はメジロに命じると同時に、尚子に背を向けた。

「行こう」

兄がそう言うのと、待ちくたびれたように、先に走り出す。小夜も後に続こうとした。

その瞬間。

「……………ありがとう……………」

人間の何千倍もの聴覚を持つ小夜でも、やっと聞こえるほど小さな小さな声だった。

「————」

小夜の胸が一気にざわめき立つ。

小夜にはそれが、何を意味する言葉か理解できない。それでも、尚子の心が伝わってきた。

沁み込んできて、どんどん溢れて————飲み込まれそうだった。

だから、小夜は走り出した。

兄弟たちの待つ、自分の居場所に向かって、全速力で走った。

風が巻き起り、木々が葉を擦りあわせて鳴く。

息が上がり、心臓の音が大きくなってきた。

胸のざわめきなど、かき消えればいい。

もう二度と会わないのだ、あの娘の顔など巻きおこる風で記憶から吹き飛んでしまえばいい。

小夜は必死に走った――なのに……。

泡雪の言葉が追いかけてくる。

あの娘の心が飲み込もうとする。

――『ヒトの子として生きるつもりか、妖の子として生きるつもりか？』

おかしい。

足が鉛のように重い。

――『そのお前の胸のざわつきを、本当のお前を、理解できるのは朧たちではないぞ』

どうして、胸が苦しいの？

どうして？

「小夜？」

兄の声にびくりと体が震えた。
いつの間にか、足が止まっていた。

「小夜……」

狼から人型に戻った兄が、心配そうに小夜を覗きこんできた。

「朝霧……私……」

小夜は前方に視線を送り、直ぐに後方へ、そしてまた前方へと戻す。

兄と、このまま一緒に行けば今までと何も変わらず、妖の娘として生きる日々――。

でも、この道を引き返せば――。

「私は――」

小夜は必死に次に続く言葉を探した。

わからない。

何を信じたらいいのか。　　どうしたらいいのか。

自分がどうすべきなのか。

自分がどうしたいのか……。

（胸が苦しい……――）

小夜の頬を一滴の涙が伝った。



その頃、崖に残された小春丸は、魂が抜かれたように呆然となっていた。

怪鳥と呼ぶにふさわしい巨大なメジロが、崖の向こうから小春丸の前に降り立つのを、ぽかんと口を開けたまま見守ることしかできない。それが、常人というものだ。

今、目の前で起きていることは現実なのだろうか？ すんなり、全て飲みこむことは小春丸にはできなかった。

怪鳥は、そんな小春丸を理解し、そればかりか人の言葉を話はじめるのではないかという気味の悪い雰囲気まで醸し出しながら、じっとこちらを見つめている。薄気味悪さに鳥肌がたってきた。

間もなく怪鳥が動いた。まるで、『背中に乗れ』と言うように身を低くし、その姿勢で待機している。

お陰で怪鳥の背に、尚子が横たわっているのが目に飛び込んできた。

ぎよっとなって小春丸は息を飲む。

「ひ……姫さま？」

死んでるんじゃないかと思った。が、小春丸の声に反応して、尚

子の指が微かに動く。自分と呼んでいるように見えた。

（良かった、生きてる……）

そう思ったら、いつきに体中から力が抜け出ていくのを感じた。

（まったく……）

この姫の側にいると、いくつ心臓があっても足りない。

「……………あ……………も……………」

再び尚子が呻いた。

小春丸は、おっかなびっくり怪鳥に近寄って行き、尚子の口元に耳を近付けた。

「なんスか？」

「……………む……………め……………」

小春丸は、眉をひそめてから、背後を振り返る。確かに、“娘”と尚子は言った。

地面に横たわって動かない村の娘に視線を落としてから、再び尚子に戻した。

「連れて帰るっていうんですか？」

尚子の首が微かに縦に動いたような気がした。

「本気ですか？　本気ですよね？」

瞼を開けているのも辛そうなのに、その奥にある黒々とした尚子の瞳は力強く小春丸を見据えていた。だから、従わざるを得ない、そう思えた。

「はいはい……」

小春丸は、娘の近くで倒れている男が気絶しているのを用心深く確認してから、娘を抱きあげる。思ったよりもずいぶん軽い。

ついでに、もう一人の男を一瞥する。座ったまま気絶しているかのように、ぴくりとも動かない。だから、そのまま、再び怪鳥の元へもどると、尚子の隣に娘を寝かせてやった。

「……俺、高い所苦手なんですけど……やっぱりにこれに乗って帰るってことですよね？ てか！ ちゃんと帰れるんスか！？ 屋敷の場所わかるわけ？」

ぼやきながら、小春丸も怪鳥に登り、羽毛にしがみ付いた。

怪鳥は、一度、うっとおしそうに首をぶるぶると振ったが、次に小春丸が瞬きをした時には、大きく翼を広げて、大空高く舞い上がっていた。

さっきまでいた崖が、森が、眼下にある！

飛んでる……！

ありえないっ……！

てか、高い……っ……！

「……………いぎゃああああああ……っ……！」

小春丸の切羽詰まった叫び声だけが、青空に響いていた。

・1・ 金色の揚羽

1 金色の揚羽

「なんだと!？」

将門は、思わず腰を浮かせてしまった。

「姫様が、たった今お戻りになれましたが、全身にひどい傷を負われ、意識不明だそうです。先ほど、お部屋に薬師が呼ばれ、診察中とか」

表情を変えずにそう言ったのは、文屋好立である。彼とは対照的に、将門の顔は見る見る青ざめていく。

「なぜ、尚子が意識不明なのだ!」

「存じ上げません」

あまりに好立が涼しい顔で言い放つので、将門の苛立ちは、いきなり頂点に達した。

「ふざけるな、存じ上げませんじゃないだろう!」

言いながら大股で文屋好立に詰め寄り、胸ぐらを掴む。

「姫に関しましては、私の管轄外です」

噛み締めた将門の奥歯が、ぎりりと鳴いた。
好立には罪はない。解かっているが、体が勝手に動いた。

「話にならん！」

好立を突き飛ばし、荒々しく執務室を後にした。

（意識不明とはどういうことだ！）

足をふみならし、尚子の元へ急ぐ。

尚子にと用意した部屋の前にたどり着くと、あわただしく下位の女官たちに指示を出すあやめの姿があった。あやめは、将門に気が付き、恭しく頭を下げた。

「尚子は！？ 怪我はひどいのか！？」

「姫様は、今はゆっくりと眠られております」

将門の眉が寄る。

「大怪我を負って意識不明ではないのか？」

「いえ。姫様には、どこもお怪我はございません」

「では、誰が怪我をしたというのだ？」

「それが……」

あやめが言葉を濁らせた時、低いところから声がした。

「殿」

尚子の部屋の前の廊下から見下ろすと、地べたに這いつくばるよ

うにして平伏す男の姿があった。尚子の従者に付けた、馬番の男だ。

「姫さまは、森の中で野犬に遭遇されました」

「何だと？」

「ですが、ちょうど出くわした娘に助けられたのです。姫さまには、怪我はございません。ただ、険しい山道に入られたため、お疲れが激しく、正体を無くされたようで……」

「そうか」

「姫さまの命により、姫さまを助けた娘と一緒にお連れしました」

男の言葉を受けて、あやめが続ける。

「その娘は全身にひどい傷を負っております。先ほど、少しだけお目覚めになられた姫さまが、娘の治療をお命じになられたのです」

「それで薬師を呼んだのか」

「殿にお伺いを立てず、申し訳ございませんぬ」

「それほどに、娘は瀕死の状態なのか」

「薬師の話によると、今日明日が山か、と……」

「尚子の命を救ってくれたのだ。手を尽くしてやれ」

「かしこまりました」

そこで、小さく将門は息を吐く。

いつの間にか、あれほどに強張っていた頬の筋肉はゆるみ、肩から力が抜けていた。尚子は疲労で寝ているだけなのだから、もう心配はいらない。そう体が納得したのかもしれない。

「さて、小春丸」

将門は再び、視線を地に下ろし、冷やかに言った。

「覚悟はできておろうな」

聡い男だ。

それを見込んで、尚子に付けた。

今回は無事であったとしても、次回も無傷で帰宅できるとは限らない。

主の危険を回避できてこそ、従者としての価値があるというもの。

（野犬の出るようなところを歩かせたことが失態であったな、小春丸よ）

緊張という名の静寂があたりを包んでいた。

おそらく、小春丸でなければ、体中が恐怖で震えだし、どうにか将門の前から逃げようとしたかもしれない。

しかし、小春丸は落ちついているように見えた。堂々と、しっかりとした声で、告げる。

「姫さまをこのような危険な目にあわせた罪、死をもって償います」

伏せていて、表情こそ確認できないが、『殺せるなら殺してみろ』そんな挑むような声だった。

「――そうか。ならば、ここで、この俺が首をはねてくれる」

小春丸は、ますます自分の額を地面に擦りつけるようにして平伏した。

（ふん。あいかわらず食えない男だ）

将門は、心の中で呟いた。

小春丸は、聡いが信用ならない男だ。だが、解かりやすい男でもある。

自分自身の価値を理解してる。

自分が小春丸を殺すわけがないと、信じて疑っていない。

そして、この手の男が自分を“殿”と呼ぶ理由も心得ている。

この男が自分を見捨てて他国へ行く時は、この将門に価値がなくなっただということだ。

（残念なことに、俺はそういう男が嫌いじゃない——だが、気に食わん！）

将門は、周囲に気づかれないように、一瞬、口端を引き上げた。

そして、殊勝な小春丸の姿を、まるで、臭いものでも見るように一瞥してから、背後にいるだろう好立に向けて、振り返らずに、命令を下す。

「この男を納屋につるしておけ」

言い終わる前に、尚子の部屋へと足を踏み入れた。

当然のように、「かしこまりました」という好立の返事が追いかけてきた。



将門が姿を現したので、尚子の部屋に居た者がいつせいに作業をやめ、恭しく頭を下げた。

その中の一人の男が、頭を下げたまま、ずっと前に進み出る。

「姫様は、深くお眠りになってます」

「大事無いのだな？」

言いながら、将門はひよいと御簾をくぐり、几帳の影に寝かされている尚子の枕もとに歩み寄った。

「はい。じきに、お目覚めになられるかと」

「そうか」

疲労からだろうか、青白く見える尚子の顔を少し眺めたのち、つるりと滑らかな額に手を当てる。

熱はないようだ。周囲に気づかれないように小さく息を吐く。

それから、隣室に目をやった。隣室は、普段から女官の控室として使われる。きっと、その隣室に例の娘が治療をうけているに違いない。

「瀕死だと聞いた。尚子の命の恩人なのだ。救ってやれ」

それだけ言うと、もう一度尚子の顔を眺めやる。

「最善を尽くします」

薬師の声を背中で聞きながら、そっと尚子の頬に触れた。規則正しい体の揺れが、伝わってくる。

（まったく、無茶をする……じゃじゃ馬め）

思わず、口元が緩んでしまったのを、必死で隠して立ち上がり、尚子の部屋を後にした。

再び廊下に出た時、将門の目の前を、金色に輝く何かが、通り過ぎた。ひらひらと、舞う様は蝶を連想させた。

将門は驚きに足を止めていた。

軌跡を探すように、宙に視線を這わせる。

それらしいものは何も見当たらない。

（なんだ……？ 蝶のように見えたが……だが、金色の蝶があるか？）

季節は秋。そもそも、蝶である可能性は低いように思う。

しばらく、視線を彷徨わせたが、虫らしい虫もない。

落葉だったのだろうか？

そう思って、足元に視線を落として見たが、一枚の葉も見当たらない。

（気のせいかな？）

再び、将門は歩き出し、執務室へともどっていった。

だが、将門が見た黄金の蝶は、見間違いではなかった。

蝶は、将門の前を一瞬舞い、すっと姿を消したのだ。

次に蝶が姿を現したのは、尚子の枕もとであった。

蝶は、ひらひらと尚子の頭上を舞い始めた。砂金のように黄金に輝く鱗粉が尚子に降りかかる。わざわざ、蝶が振り掛けているようにも見えた。

数秒の後、蝶は、すうっと空気に溶け込んでしまった。

その直後、尚子の頬に赤みがさしてきて、見る見るうちに顔色が良くなっていった。

・ 1 ・ 金色の揚羽（2）



誰かに呼ばれたような気がした。尚子は重たい瞼をなんとか持ち上げる。

ぼやけた視界に、茶色いものが映し出され、それが木製の天井だと認識できる前に、別の物が視界を遮った。誰かの顔だ。誰だろうと、ぼんやり思う。

「姫様。お気付きになりましたか？」

すっきりとした目の美女が、耳に染み込むような声で確認するように言った。

返事をしようとしたが、声がかすれて言葉にならなかった。そんな尚子の声を聞き逃すまいと、少しでも彼女が顔を近づける。ふわりと、甘い香りを尚子の嗅覚が捉えた。その瞬間、自分の置かれた状況と目の前にいる女性の名前をいっきに思い出した。

「……あ……やめ？」

「今、薬師をお呼びします」

すぐに、ばたばたと数名が部屋に現れた。

「意識もはっきりされてるようですね。殿をお呼びして」

数人に診察されている中、誰かにそう伝えているあやめの声が遠

くの方から聞こえてきた。
意識がまた遠退いていくのを感じる。

どこも痛くはない。
ただ、ひたすらに眠い。
起きてるのがつらい。

(だめ……寝たら……)

寝ている場合ではない。それはわかっている。
あれからどのくらいの時間がたっているのだろうか。どうやって
小次郎の屋敷に戻ってきたのかも、記憶が曖昧だ。だいいち、自分
は確か崖から転落したのではなかったか？

体中にひどい倦怠感があるものの、痛みは感じないし、骨折もな
さそうだ。

あの犬神を信仰していた村の娘のことも心配だ。

「……………」

あやめを呼ぼうとしたが声がでない。が、そこは並みの女官とは
違うあやめだ。尚子の表情から何かを察したようで、さっと尚子の
傍らに腰をおろした。

「いかがされました？」

「……………」

喉がからからに渴いていて、声にならない。重たい腕を持ち上げ
て、なんとか喉を手で押さえ、喉の渴きを訴える。

あやめは、すぐに理解し、尚子の半身を起こすと水差しを手に取
った。

「薬湯です」

あやめがそつと水差しを傾ける。入ってきた液体とともに、口の中に、柔らかな酸味が広がった。

ごくりと喉がなる。少しずつ喉を流れる水が、体の隅々に染み込んでいくのがわかった。

「尚子」

少し上ずっているが、聞きなれた、そして、どこかほっとする声が聞こえてきた。

声の方になんとか首を動かす。

「尚子……」

なんて情けない顔をしているのだろう。そう思った。

「尚子……」

歩み寄ってくる小次郎はどこか危なっかしい気がしたし、尚子しか見えていないようだった。それを目で追いながら、いけない！

と尚子は思った。一国の主たるもの、醜態を家臣に晒すわけにはいかない。

あやめもそう思ったのか、目配せをしてきた。だから、小さく頷く。

尚子の意を酌んだあやめが、尚子の部屋に控えていた数人の女官や薬師たちに目配せをして、退出を促す。それを最後まで確認してから、自らもしなやかに出ていった。

「尚子……」

小次郎は、ついに尚子の目の前にたどり着き、膝をついた。

「……痛くはないか？」

小次郎の手が恐る恐る、尚子の頬に伸びてくる。

「大丈夫」

尚子は笑って見せた。

「そうか……」

それだけ言うと小次郎が小さく息を吐いた。心底ほっとしたように、でもそれを隠しながら。

そんな小次郎を見ていたら、不謹慎にも、おかしくて笑いが込み上げてきた。

まるで、見失っていた母をやっと見つけた、迷い子のような顔をしている。

自分よりも見た目も、年も、一回りも大きくて、筋肉隆々の、一人前の武士つわものが、だ。

（そんなことを言ったら、怒るだろうな……）

——大の男に、可愛いだなんて。

勝手に綻ぶ口元を、もう尚子には押さえることは出来なかった。

「小次郎……頼みがある」

「なんだ！ 何がほしい！ 何でも言え！」

自然に優しい声になって尚子が言うと、小次郎は間を開けずに、身を乗り出すようにして答えたので、ますます尚子は目じりに皺を作って言った。

「抱いて」

「――」

小次郎は、目を丸くして絶句している。何を言われたのか、わからないとでも言うように、尚子を見つめ返している。それがまた可笑しくて。愛しくて――。

「私が抱きついてもいいのだけど、体に力が入らないんだ」

少しの間を開けて、小次郎が動いた。勢いよく腕を引き寄せられる。

「わっ！」

広い小次郎の胸に、顔を埋めると、尚子の胸がとくと跳ねた。

「阿呆め、もっと早く言え！」

小次郎の心地よい声がすぐ耳元で聞こえた。藍色の着物からは、少し汗の匂いがした。ひよっとしたら、小次郎はこの部屋まで走ってきたのかもしれない。

心配してくれた。それは、純粹に嬉しかった。
だから、素直に言葉が出た。

「……ごめんなさい」

「……そう思うなら、二度と危険なことはするな」

「わかった。もうしない」

「そうしてくれ。真っ青なお前を、小春丸が連れ帰ってきた時には肝を冷やしたぞ」

「ごめんなさい……」

「許さん」

「……もうしない」

「だめだ、謝ってすむと思うか？ お前が目を覚ますまでの2日間、生きた心地がしなかったんだぞ、俺は。それに意識のないお前を看病するのは、これで二度目。もうたくさんだ」

「だって一度目は、小次郎が夜通し馬を走らせて……」

「なんか言ったか？」

「いえ……何も……」

尚子少しだけ首を動かし、上目遣いで小次郎の顔色をうかがった。すぐさま、切れ長の黒々とした瞳でギロリと睨まれた。

怒っている。

かなり怒っている。

どうしよう。

そう思いながら、思わず視線をそらす。

「あの……どうすれば許してくれる？」

「尚子」

真剣な声だったので、尚子は小次郎の胸から顔を上げ、小次郎をまっすぐ見つめ返した。目が合った時、小次郎がふっと笑った。再び尚子の胸が、どくん、と大きく跳ねる。

なぜか、自分はこの小次郎の笑顔に弱い。

いつも、意地悪げな笑い方しかないのに、こうして不意に優しく

く微笑みかけられるとどうしても胸の鼓動が早まってしまう。

こんなに、お互いの息がかかりそうな距離にいと、自分の心臓の音が聞こえてしまいそうで、余計に息がつまりそうなほど胸が高鳴った。

ますます目が合わせられない。恥ずかしさに、また、目が泳いでしまう。

「尚子」

「は、はい」

声が勝手に上ずり、尚子の背筋がぴんと延びた。なんだか、頬が熱いような気もする。

「俺はな、できることならお前を閉じ込めておきたい。屋敷から一歩も出さず、俺のことだけを考えていろ。そう言いたいくらいなんだよ。けどどな、それをしたら、お前を俺の国に連れて来た意味が無くなる。お前が上総の叔父上のところで暮らしていた時と何も変わらない。むしろ、もっと悪い。違うか？」

「――」

「俺がお前をつれて来たのは、お前が自由に生きている姿を側で見ていたかったからだ。自由に空を舞うことのできない籠の鳥が見たいんじゃない」

「うん……」

「お前は、ただその心に従って、大空高く、あちこちを飛び回ればいい―――ただし、必ず俺の所に帰ってこい。それが条件だ」

小次郎の言葉が、尚子の中で静かに響いた。自然と、尚子の視線が小次郎の力強い光を放つ瞳に吸い込まれていく。

――必ず俺の所に帰ってこい。

その言葉は、まるで、鏡のような水面に、たった一滴の雫が起した波紋のように、尚子の心に広がっていくようだった。

静かに見つめ返す尚子に、小次郎がもう一度、念を押すように繰り返す。

「必ず、無事に、帰ってこい。わかったな？」

「わかった。誓う。――でも」

「でも？」

尚子は、返事をする前に、ずっと体ごと小次郎に向き直ってから再び口を開いた。

「私も、同じことを小次郎にもいいたい。必ず、無事に帰ってきて」

何が言いたいのだろうと、小次郎の瞳が一瞬揺らぐ。

「小次郎の“心”がどこを彷徨ったとしても、帰ってくるのは私のところだ。帰り道が分からなくなったら、私を探せばいい。ううん、無理やり私が引っ張って帰ってやる」

だから、自信を持て。

恐れずに、己の心が望むままに、国を作って欲しい。

皆が、笑って居られる、己の心のままに生きられる国を。

怖がらないで――

ありったけの心をこめて、尚子はまっすぐに小次郎を見つめた。

・1・ 金色の揚羽(3)

少し間をおいて、じっと尚子を驚いたように見つめていた小次郎が、ふわりと笑った。そして、そのまま、優しい腕に抱きしめられる。

「尚子」

たくましい小次郎の胸の中で、名を呼ばれて、尚子の心臓が大きく脈打ち始める。

「もう待てないぞ。だが、お前が悪い」

まるで、体中の血液が一瞬にして沸騰したように、体が熱を帯びていくようだった。顔が熱い。

（そ、それってつまり――）

否応なしに、自分の体が何かを悟り、身構えているのが分かって、余計に恥ずかしい。

もう、どうしていいか分からず、とにかく小次郎の次の言葉を待った。

「よし、こうしよう。今回のことを許してやるかわりに、俺の頼みを聞いてくれ」

「た、頼み？」

声が上がった。

絶対、ばれた！ と尚子は思った。

明らかに、この状況で、自分が“何か”を意識していることが、今の一瞬で小次郎に伝わったに違いない。そう思うと、尚子はこの場から走って逃げ去りたいほど恥ずかしかった。だが、がっかりと肩に回された小次郎の腕が、それを許さない。

「前に言ったじゃないか。お前にしか出来ないことがあるって、忘れたのか？」

「忘れてなんて――きゃっ！」

最後まで言葉を紡ぐ暇もなく、ごろりと体を右に半回転させた小次郎と一緒に、尚子も体を半回転させられ、あっという間に小背中に床を感じながら、鼻のくっつきそうな高さから自分の顔を見下ろす小次郎の瞳を直視できなくて、必死に顔を反らした。

「なんで顔を反らす？ 俺の頼みは聞いてくれないのか？」

「ち、違う」

（こんな状況で、頼みなんて聞けないっー！）

「違うなら、俺の目を見てくれ」

（そんな……ずるい……）

そう言われては尚子は恨めしそうな顔で、小次郎を見上げるしかなかった。

「顔が真っ赤だ」

堪え切れなくなったのか小次郎が、くっくくくつ、と笑った。

「う、うるさい！」

「可愛いな」

「黙れ！！ それ以上言うな」

「分かった分かった。たっぷりとは時はあるから、今は勘弁してやろう」

「た、たっぷりって……」

「今日は、このままずっと一緒だからな」

「っ!？」

「今から、三日間、ずーっとこのお前の部屋で一緒に過ごすぞ。それが俺の頼みだ」

「なっ……んっ!」

何を言ってるんだ、と言おうと思ったが、あっという間に口をふさがれた。

「ちよっ……まっ……」

尚子は何とかして顔を背け、話をしようとするも、すぐ目の前にある美味しそうな尚子の唇を小次郎が逃すわけがない。しかも、上から覆い被さられ、顎を大きな手で固定されては、尚子にできることなど残されていない。

「待たないと、さっき言っただろ？」

ぞくりとするほど、いい声でささやかれ、すぐに、今までのどの口づけとも違う深い深い情熱的な口づけが降ってくる。強引ながらも、できるだけ尚子に体重をかけないように気遣う優しさも伺えた。だからだろうか、前回同じような状況で、あれほど強かった嫌悪感も恐怖感も不思議と沸いてこない。

むしろ、尚子自身ですら認識のない心のどこかで、小次郎を受け入れていたのかもしれない。

そんな身の入らない抵抗など、小次郎の情熱に油を注ぐ効果しかないというもの。ついに、尚子は呼吸の仕方も分ならず、切ない息

を漏らしはじめた。

「許してほしいのだろうか？」

いかにも嬉しそうな小次郎の声にも、息継ぎだけで精一杯で、返事をする暇がない。少しだけ口を離してそう言ったかと思うと、小次郎は情熱的な口づけを降らし続けた。

尚子は、ただ、ただ、それを受ける。今にも、小次郎の情熱の波にさらわれ、溺れてしまいそうだった。

（小次郎……）

尚子の体から、少しずつ力が抜けていく。

どうしよう。

このまま——流されていいの？

このまま、この男の妻になったら本当に後戻りはできない。

この男の妻として、この国と一緒に育てて行くことができるのだろうか。祖国を、父や兄弟に刃を向けることになったとしても。

祖国の民の命を、この国のために、ためらわずに奪えるのだろうか。

「尚子……」

切なそうな小次郎の声に、どきりとした。まるで、このまま我がものとしてよいのか、許可を求める声にも聞こえた。

（でも……もう後戻りすることなんて——すでにできないのではないのかな？）

この男のいない世界で生きていけるだろうか。

（小次郎が私を必要とするかぎり、私は小次郎と共に生きる覚悟をしたのではなかったの？）

今さら躊躇する理由などない気がした。

だって、これから、この男を愛して、国の民を愛して、この国を愛すればいいのではないの？

むしろ、私の存在が、両国の共存への道を開くのではないだろうか？

（そう、例えば——私が産んだ子……）

そこまで考えて、はっとする。

そうか。

そうなんだ。

（頼みって——私にしかできないことって——）

小次郎が望んでいるのも両国の共存なのだ！！

一瞬にして目の前にかかっていた白い靄のようなものが、ぱーっと晴れた気がした、その時だった。不機嫌そうな小次郎の声が降って来たのは。

「おい、何か考えてるな？」

「え？」

「反応が急に悪くなった」

「は、反応って……」

「そうでなければ、俺の口づけが下手くそみたいじゃないか。何か考え込んでいる以外に考えられん。何が心配なんだ、言ってみろ？」

「……………」

「あの娘のことか？」

と、その瞬間。尚子の脳裏に一瞬、傷だらけの娘の姿と、琥珀色の瞳と、ふてぶてしい馬番の顔が、次々に浮かんだ。

（そうだった！！）

反射的に体を覆っていた男を跳ねのけ、体を起こした。

「あの娘はっ！？ 小春丸は！？」

がっしゃーん、と表記するしかない悲惨な音をたてて哀れな小次郎が几帳と一緒に壁に激突するのと、尚子が立ち上がってそう叫ぶのが一緒だった。

「あやめ！ あやめっ！！ どこだ、あやめっ！！ 小春丸を呼んでくれっ！！」

尚子は、何事もなかったかのように、すくりと立ち上がって、部屋の外に大股で歩き出した。

あの後、娘はどうなったのか。そもそも、どうやってここに帰って来たのか。小春丸に聞きたいことはたくさんある。

力いっぱい部屋の戸を押し開け、廊下に出たところで、慌てて駆け寄ってくるあやめの姿を見つけた。

「あやめっ！！」

「姫様、もう起きて大丈夫なのですか？」

「大丈夫だ。それより娘は？　小春丸はどこだ？」

「……と、その前に、殿はどちらに……」

「あ……」

初めて尚子はそこで、小次郎を振り返る。

そこには、ふてくされたように、こちらに背を向けて床に横になりながら、しっし、と追い払うように手を振る男の姿があった。

「小春丸なら納屋にいる。生きていればな」

はっ、となって尚子は顔をこわばらせた。

全てを一瞬にして悟ったのだ。自分が意識不明で帰って来たがために、その罰を受けているのだと。そして、それは刻一刻と小春丸の命を危険にさらすものだということを。

尚子は、勢いよく床を蹴って走り出した。

分かってる、小次郎は悪くない。

国を治める主だからこそ、厳しい決断をしなくてはならない時もある。

（小春丸！　　お願い、生きていて――！！）

脱兎のごとく走り出した尚子の背を横目で見ながら、将門は口端

を僅かに引き上げた。

「……ふん……運のいいヤツだ」

あと3日、飲まず食わずで納屋に吊るしておいたなら、死んでいただろう。

（最初から、尚子が助けに来ると目論んでおったのだろうか）

尚子の性格を知っていれば、尚子が自分を見殺しにするはずがない。きっと、あの馬番はそう考えていたに違いない。

（まあ、いい。殺したって死ぬような男ではないだろうよ）

簡単に死ぬような男には興味は無い。

運すら味方につけるような、そんな男だからこそ尚子の側に置いたのだから。

「しかし……尚子のやつ。今夜こそは逃がさんぞ、覚えている……」

その後、しばらくの間、地の底から湧いてきたような、どす黒い、不気味な笑い声が尚子の部屋から聞こえていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3787j/>

災厄の姫君

2011年8月22日13時03分発行